

北海道家庭学校 寮母藤田セツ子の「家庭であること」の実践と その政治教育的意義

—留岡幸助の「家庭的生活」認識と関連づけて—

河原 国男*

要旨

本稿は、北海道家庭学校の家族舎石上館寮長藤田俊二（1932—2014）の夫人・寮母であるセツ子（1938—2020）が寮生に対しどのようにかかわったか、その様相を藤田俊二日誌によって具体的に明らかにするとともに、その特質を同校創設者留岡幸助（1864—1934）の「家庭的生活」認識と中心的に関連づけて考察し、その意義の解明を試みた。その結果は以下の通りだった。1）家族舎での炊事場を主にした寮母と寮生とのかかわりは、生活を共にしながら、病、傷、失意などの状態の寮生に対して治療、保護するケアとともにとともに、価値実現にむけて人間形成する働きを示していた。よって、寮生に対する寮母のかかわりを「治療的養育」の概念で説明することには限界があり、十分には捉え難い部分を残した。2）寮生一人一人に対する寮母の人間形成のかかわりが何を目標としているかを掘り下げるため、本稿は、寮母の「家庭であること」の実践として、寮母自身のかかわりだけでなく、卒業する寮生に対する藤田俊二の所見（期待）をとり上げ、両者（寮長・寮母）の協働関係と、幸助の「家庭的生活」の認識との関連で、寮生に対する寮母の人間形成の特質を捉えた。その結果、家族舎で役割分担する生活を通じて寮生一人一人の「長所」を見極めながら「社会的観念」を培い、勤労とともに「銘々の職分」をはたし「共同生活」を実践できること、こうした人間の形成に関する考えが跡づけられた。一人一人を包摂し全員の参加を求めている点で、「デモクラシー」を理念とする政治教育の考えとして特徴づけられた。以上 1）、2）の結果について、ケアの契機を含みながら寮生一人一人に即して人材の育成をめざすという包摂的な政治教育として特徴づけられる点に着目するならば、寮母藤田セツ子の寮生に対するかかわりは、現在の「ケアリング・デモクラシー」（トロント）の所見と対比できた。デモクラシーを理念とする社会を構成する主体の形成をめざす教育（政治教育）の契機を含みながら、この主体を限定する形で、「ケア・教育・政治」の関連構造を示しているという点で、寮母藤田セツ子の実践の独自性が示されていた。

キーワード：ケア，家庭的生活，家族舎，社会的観念，政治教育，ケア・教育・政治の関連構造

1. 課題と方法

本稿は、北海道家庭学校の石上館寮長藤田俊二（1932—2014、昭和 7—平成 26）の夫人であり寮母であるセツ子（1938—2020、昭和 13—令和 2）が寮生に対しどのようにかかわったか、その様相と特質を明らかにするとともに、その結果について同校創設者留岡幸助（1864—1934、元治元—昭和 9）の

* 宮崎国際大学教育学部

「家族的生活」認識と関連づけて考察し、政治教育に関する意義が示されていたことを解明するものである。

教護院時代（1997〔平成 9〕年まで）の当時の同校（定員 82）には 80 数名の寮生が 7 つの寮舎（家族舎）のいずれかに在籍し、小舎夫婦制のもとで十数名が一つの寮で寮長夫婦と寝食をともにしていた。石上館はその一つである。向陽寮長（1963.7-1964.3）、洗心寮長（1964.4-1965.3）を経て、俊二の石上館寮長期間（1965.4-1993.3）まで、セツ子（資料 1）は寮母として寮長を支えた 1）。その際、寮生の一人一人に対して、寮長とともに夫人が示した実践は、どうであったか。同校は 1914（大正 3）年北海道北見国紋別郡湧別サナプチ（現在、紋別郡遠軽町留岡）の地に「家庭学校社名淵分校」（1952 年「北海道家庭学校」と改称）の名で開設する以前、1899（明治 32）年東京巢鴨に創設以来、「家庭学校」を校名とした 2）。現下のわが国の社会的養護の理念・政策では、「家庭的養護」という語が、関連用語（「施設養護」「家庭養護」など）とともに整理、提示された 3）。こうした経緯をふまえれば、職員である実夫婦が入所する子どもたちと継続的に「生活を共にする」という意味で、夫人の実践をまずは外形的に“家庭的”として捉えるのはまちがってはいないだろう。

その大筋の見通しとともに、セツ夫人の寮母としての実践に着目し、その特質と意義を解明しようとする本稿は、以下の 3 つの問題関心に支えられている。

第一に、「学校」であることとともに、小舎夫婦制を採用し「家庭」であることを原理として重んじてきた北海道家庭学校史のなかに、セツ子の寮母としての日々の実践はどう位置づけられるか。同校編による 110 年史が、学術水準を確保した形で、2024（令和 6）年刊行された。本書のなかで、谷昌恒（1922—1999/2000、大正 11—平成 11/12）の 1969（昭和 44）年校長着任とともに、同校が 1970 年代に「生産第一主義」から「教育第一主義」へ移行したこと、その方向性は、生産部門の独立採算制の廃止、作業班学習発表会の実施、夫婦小舎制建築、等に具体化されたと、論じられている。寮舎建築について、「子どもが「やすらぎを覚え、そこに我が家的安堵感」があると同時に、「家庭的雰囲気のもとで、寮生活を主体とした教護活動」を推進しやすい居住性のある寮舎が追求された」（家村昭矩、二井仁美）と指摘されている 4）。北海道家庭学校を設立当初から「感化農場」として内外に提示した幸助以後、戦後同校を「教育農場」として受け継いだ留岡清男（1898—1977、明治 31—昭和 52）も、「放胆な教育実験を試みてみよう」という意図をもち、薪が「木の油で燃えるだけではなく、それに人間の汗と膏とが加わって燃える、ということ」を少年たちに体験させた。よく知られた、この印象深い事例が想起されるように、勤労による作業班活動そのものの成果（果樹、野菜、牛乳、卵、味噌、机、長椅子、書棚、焼却炉、濾過槽、側溝など）とともに、それ以上に、生産活動を通じて、どのように少年たちが「汗」の価値を知り、一人一人に即し人間形成するか、という成果を家庭学校は伝統的に重んじてきた 5）。このような足跡に立脚した、谷校長の課題認識であり、それにかかわる 110 年史の所見としてうけとめることができる。2009（平成 21）年には、校内本館に遠軽町立東小学校と同遠軽中学校の各「望の岡分校」が設置され、内部でも懸案としてきた一学科指導による「準ずる教育」（1948 年、児童福祉施設最低基準第 101 条）ではない形で、学習指導要領に即した一「義務教育」が敷地内に実施される。後に全国動向と軌を一にしたこうした経緯があるが、法制度上の「義務教育」そのものの実施の有無とは別に、1970 年代では「教育」の実践についての組織的な自覚が示されたことも、ここに付記しよう。機関誌『ひとむれ』は、「教育」特集号を数回編集している 6）。「生産教育」、「学科」の学習、その他、人間形成にかかわる特徴的な事実が、寮長それぞれの日頃の問題関心に即し、校内の種々の局面で、実績として実証できるはずである、という谷校長の信念の表明を意味するだろう。

であるとすれば、この時期の寮生活の実際において、寮母・寮生間にどのような関係性が示されたであろうか。その問いの答えは、誰にもただちにわかる目に見える成果ではないかもしれない。そうであっても、寮舎の種々の場面に即し、一つ一つ検証に値するにちがいない。

谷校長は、「生活を共にする」ことについて、次のように説明したことがある。

一つの食卓を囲み、みんなで食事を共にすることだと私たちは考えています。寮長夫人が丹精をこめて作った食事を共にする。その賑やかな食卓は寮生活のもっとも家庭的な団欒にふさわしいものと言えます。

炊事は夫人一人の手に余る仕事です。少年の一人が炊事当番となって手伝います、本校の生活に慣れ、万事をまかせることが出来るとされた少年が当番になります。認められたことになるのです。少年たちは一つの段階を通過したような自信を持ちます。

男の子ですから、炊事当番は死ぬほどいやだなど公言するものもいます。しかし、実際には結構楽しそうにいきいきと働いています。決して拒むようなことはしません。

寮長夫人と一対一で仕事をする時間が長く、その温かい甘やかな雰囲気が好きと言えるのです。ともすれば厳しい寮長には言えないことでも、そっと夫人に告げることがあります、夏、冬の休みの帰省に、ひそかにタバコをのんだこと、女友達と遊んだこと。ね、先生には黙ってて、とあわてて念をおしたりする少年もいます。そうしたやりとりが楽しいのです。7)

ここには、寮舎での少年たちと寮長夫人とのかかわりがとり上げられている。その様相について、炊事当番を通じての「温かい甘やかな雰囲気」と表現されている。寮長先生とはちがう、少年たちにとって特別な時間がある、ということだろう。補足していえば、当時、どの寮でも寮生たちは、寮母のことを「奥さん」と呼び慣わしている。肉親とは違う、という認識が双方にはある。その前提をもって、この雰囲気が好きだと指摘している。状況を細やかに見つめていた校長の証言として貴重である。その点で、二つの問いが注意される。個々の寮の実際でどうであったか、という問い。もう一つは、その「雰囲気」がかれらに不足するであろう愛着関係、あるいは基本的信頼感醸成を促すものであるとして、そのうえで一近隣の公立学校ではなく、家庭学校内において一どのように人間形成の働きが導かれていたか、という問いである。谷のこの説明は「誕生会」と見出しの箇所から引用している。食堂で誕生会を開かれる。「この学校で、もう一度生まれる。新しい生き方、新しい人生を発見する。生まれ、二度も三度も生まれ変わる」。こうした谷校長の指摘を、表面的ではなく、真実性ゆたかな、経験的事実に裏づけられたものとしてうけとめれば、生まれ変わった当の少年たちにおいて一意図的に、無意図的に一どのように人間形成が導かれるか、という問いを生み出す。この二つの問いは、「教育第一主義」の下、石上館寮母藤田セツ子の日々の実践の場合はどうだったか。これが第一の問題関心である。

第二に、現今の児童自立支援施設（57施設）に、交替制とともにひき続き採用されている小舎夫婦制（約3割）の実際のあり方とどう関連するか、という問題。この点に焦点をあてた、新藤こずえ、板倉香子による実証的な研究成果⁸⁾が着目される。新藤らは、非行性の除去と社会適応という目標の教護院時代より以上に「家庭的養護の推進」ということが政策的に重視されるようになったという自立支援施設を対象にして、寮長、寮母に対してヒヤリングしている。そして、「寮運営における家庭的支援で大切なこと」に関する具体的事項を整理している。教護院時代、「家庭的」であることを創設以来から原理として重んじてきた北海道家庭学校において、どのように先駆的におこなわれていたか、そ

の比較検討を通じて関連性が注意される。

第三に、ケア概念の成り立ちにかかわる問題。檜原真也はその著『子ども虐待と治療的養育』(2015)において、児童養護施設での現場経験をふまえて、広義には「ケア」に含まれるであろう「治療的養育」という概念を提出するとともに、その実践を具現する「ライフストーリーワーク」の指針を明確にしている。檜原はこの概念を次のように定義している。「子どもたちが示すさまざまな言動は、発達の過程で負った被虐待体験や剥奪体験の影響であり、その永続的な変化には、他者との親密な関係者が不可欠であるとの認識に基づき、①居住型の環境で生活を共にしながら、十分に配慮された日常のかかわりを大切に、②子ども（集団）と養育者（集団）の相互作用を治療的に活用し、③それぞれの子どもに応じた多様で個別的なかわりを総合的に行うこと」9)。このように規定する「治療的養育」について、檜原は書名サブタイトルでも表記しているように、児童養護施設で暮らす子どもたちに対するかわりを主として論じている。ただし、当の実践を示す先例として、一覧表（「治療的養育の歴史」同上、p.49）では家庭学校も範囲に含めている。「治療的養育」の概念とともに本書によって説明される「生活を共にする」（同上、pp.76-80）という実践事例は、教護院時代の北海道家庭学校の実践、より限定して寮母の実践はどう説明できるだろうか。当時の同校が、これまで以上に「教育第一主義」であろうとし、校長、寮長たちの実践の事実もそうであったならば、そして、藤田俊二の場合、その日誌が示すように、少年たちの日々の姿、表情、態度、思いを一人一人に即し克明に記述し、それによって“成長証明”してきた実践が至近距離に展開してきたとすれば、それらと関連した寮母の実践はどうであったろうか。「治療的養育」のみならず、一檜原の同書の所見に即しつつ—それを含めて広義に特徴的な「ケア」の概念がわが国でどのように歴史的に成立、あるいは展開したかという問題も視野に入る。そこまで広げなくとも、摘出されたケア概念の事例は教育概念と部分的に接近するものとして把握できるのだろうか。留岡の認識と関連づけた場合に寮母セツ子のかかわりは、どのような特質を示すことになるか。谷昌恒のことばでいえば、「温かい甘やかな雰囲気」をどう実現していたか。こうした問いでもある。この点を考察する必要がある。

先行研究との関連で以上の問題関心に支えられて、本稿は寮母藤田セツ子の寮生に対する寮運営上の役割に着目しようとする。問題をさらに絞って、解決の見通しを示していこう。

さきの論文 10)で、筆者は寮長藤田俊二が学校運営上、谷校長に対してどのような関係性を示していたかという問題をとり上げ、一種の対話的關係が示されていたことを、日誌記述と寮生の作文によって具体的内容とともに明らかにした。礼拝堂正面に掲げられ「難有」の額に即して、「難儀」をうけとめて、みずからの試練の経験として価値づけられるという理念を、谷校長は講話を通して語りかけ、長椅子に座ってメモをとりながらむきあう寮生たちに提示した。「苦難に耐える力」11)を培う必要を、かれらに、そして寮長たちに語った。他方、寮長藤田は、その理念に沿う形で、生育地の实地訪問、生育歴の推測などを通じ、寮生の境遇と生い立ちに即してストーリーを日記体で記述した。そして、その作業を通じて、誰が悪いというわけではないと第三者にも納得できるように、新聞記事なども引用しながら実証することを試みていた 12)。両者の働きは、同時代に見出されるものだった。その場合、相互了解のもとで直接的に対面する人格関係によって成り立っていたというわけではないだろう。主観的な意図は別として、異なる相互の役割遂行という客観的な事実関係において、一種の協働性が示されていた。すなわち、厳しい試練を乗り越えながら寮生たち一人一人が自己形成する、その努力を促し励まし、積極的に導く働きとして、両者は協働していた。校長講話に接した寮生を仲立ちとして、問いかけと応答から成り立っていた。寮生の作文も添付する藤田日誌の記述のありようを注視するとともに、

関係資料を照らし合わせることで、そのような事実関係が明るみされた。この点で、対話的といえる関係がここにも実現していた。目には見えないが、同時代の北海道家庭学校がその深層に示していた一局面を、さきの論文で知ることができた。それは、1世紀余の史的蓄積のなかで個性的な同行者たちに関する詳細な外形的事実—その解明はもちろん貴重である—から容易にはうかがえない。当事者間の直接的な意図を越えている。そのような「対話的世界」13)が、同校のそこ、ここに見出されるとすれば、とりわけ特記に値する一面であるにちがいない。

そうした消息をふり振り返りながら、寮長藤田と寮母セツ子との関係性はどうかであったかを—本稿の主題とするものではないが—問いかけたい。藤田は寮母セツ子に対して寮運営上、力の上下は決定的にあったであろう。夫人が寮生にむきあう場合も、寮生にとっては夫人の背後には寮長の存在がつつねに意識されていたにちがいない。けれども、そのような関係性があったとしても、そのことは、両者間には役割分担があって、協働関係を基礎条件としていたという事情を、ただちに打ち消すものではないだろう。

そのように予想される協働性を寮母セツ子は保ちながら、寮生一人一人に対してはどのような実践を示していたか。今日の概念では、「家庭的養護」、あるいは「家庭的支援」であったとして、その寮母の実践は単独にそれ自体として成り立っていたのだろうか、寮母と同行する藤田俊二の指導理念、そして、「家庭的生活」を先駆的に基礎づけた留岡幸助の理念が、寮母の実践を背後から—明確な自覚はなかったであろうが—支えていたのではないか。留岡幸助に関しては、全5巻の著作集（1978・81、同朋舎）、全5巻の日記（1979、矯正協会）がある。それらに接して推察できるのは、業績全体が情熱、あるいは献身のインスピレーションだけで産み出されたのではないこと、それらが行為の主導動機として不在であったというわけではないにしても、全体を明確に方向づけ理念として推進していたのは、その対極的と思われることである。長期受刑者を収監する「集治監」での教誨師としての経験（犯罪動機と経歴に関する調査）とその所見は、もちろん見逃せない。のみならず、以降における「給児事業」

「感化事業」等に関する欧米、国内の施設の「視察」、洋書、古典の読書—その一つは、「万人役人」論で知られる近世の儒者荻生徂徠が、「道」が包摂的なものでなければならないことを為政者に語っている『徂徠先生答問書』—とその記録を通じての方向性に関する知的認識、そして「小論と雑記」の枠で後に日記に収められた数々の覚書と思索が加わる。ここに一連の知的努力が見出される。それが晩年に至るまで持続している。それらは、「一路白頭に到る」という没我的献身の事業とその生涯を支える広大な視野と判断力をもたらしていたであろう。「難有」という理念的確信も、その中心におかれたはずである。寮母セツ子は寮生にどうかかわったか、という問いは、こうした創設者の存在とその事績と無縁ではないであろう。1世紀余ほど遡って、その事績を一部でも確認することは、迂遠とも思われる。けれども、こうしたアプローチは、当の問いに直接的に応答することにとどまらない意味にかかわるだろう。初発の時点での思想的可能性、とりわけ“FAMILY SCHOOL”とも普遍化して称したこの「学校」の思想的可能性を明らかにするうえでも不可欠となるだろう。創設以来、境界領域—福祉・教育の領域だけではない—において開拓的に経営し、存在し続けたこの「学校」の存在理由も、この問いとともに検証されうるのである。寮生に対するかかわりという当の対象が、「ケア」に含まれるものであって、その担い手とその対象という親密な二者関係にとどまらず、そのかかわりそれ自身として公的な活動領域に及ぶものであるならば、民主主義社会の成り立ちに関する近年のJ.C.トロントの論議（2014）14)に—当事者たちの自覚を越えて—家庭学校の「炊事場」での寮母の実践も対比でき、「ケアと政治」の視野で意義づけられるのではないか。

であるとすれば、「家庭的養護」などの現今の社会的養護の政策上の理念を歴史認識—教護院時代の家庭学校もすでに歴史的対象である—の事実確定の概念的手段として選択する際にも、なにほどかの慎重さを要する。その概念と現実（留岡の認識）とのあいだに異同が生じ、同一、近似、そして、それ以上の隔たりを明確に測定する必要が生ずるであろう。「ガイドブック」とも控えめに称した同校編『「家庭」であり、「学校」であること』（2020）があることを、ここで想起しよう（15）。山菜おこわなどの食事メニュー、ソフトボール大会、作業班学習発表会、クリスマス晩餐会などの画像が数多く掲載されている。彩ある日常の表情の数々である。それらが示すように、「家庭であること」とゆるやかに捉える方が、むしろ家庭学校の創始者の理論化の努力のみならず、歴代校長、寮長寮母、寮生—これらの人々が境界領域に蓄積する実践のゆたかさを、過不足なく示唆して適切であるかもしれない。

本稿は、以上のような問題意識と予想に基づき課題設定する。石上館寮母藤田セツ子が一人一人の寮生に対してどのようにかわり、「家庭であること」を日々実践していたか、その具体的な諸相を跡づけ、その特質と意義を解明することを中心的な課題とする。

この課題に対してどう接近するか。藤田セツ子の寮母としての実践の成り立ちは、本人が明確に自覚する部分ももちろんあるが、それ以上にその自覚を越え歴史的文脈のうちに成り立っているにちがいない。その歴史的文脈については、われわれが構成する形で把握することにする。そこで、以下の諸点をふまえる。

第一に、寮母セツ子が寮長俊二との対面的な関係性に着目する。寮運営上の意思決定の上下関係を維持しながらも、寮母としての役割、寮長としての役割、という対等性を維持して、寮生一人一人の成長をめざしながら、問答するコミュニケーションを展開するという対話的な協働関係が、その初期から成立していた事情を寮長藤田俊二の日記によって確認しよう。セツ子夫人が寮母としての働きを現実担っていたという場合でも、それ自体として成り立っていたというのではなく、寮生活運営上、寮長との関係性を保持しながら実践していたという基礎的条件を確認しておく。

第二に、第一を確認のうえで、寮生一人一人に対する寮長藤田俊二のかかわりにも視野に入れておく。「家庭であること」は、寮生一人一人にとって寮母とのかかわりであるとともに、寮生同士、そして寮長とのかかわりが重きを占めるであろう。寮生活、そして一部には作業班活動（そ菜部）を通じて、石上館寮生の一人一人に、寮長はかかわっていた。その全体を明らかにすることはもとより不可能であり、課題としない。一人一人の“成長証明”ということ、在籍中での最終段階で顕著に表現しているという点で、寮生卒業時の藤田の日誌記述に着目する。それによって、寮母藤田セツ子の寮生に対するかかわりがどうであったかを補っていきたい。

第三に、非対面的な、もう一つの協働関係にも着目する。寮母セツ子の背後にも、創設者留岡幸助が残した足跡を見出すことができよう。明治中期に、かれが監獄事業を教誨師として実地経験するとともに、海外の感化施設を精力的に見聞、視察したことをわれわれは先行研究（二井仁美など）を通じてすでに知っている。その経験を通じて、留岡が「家庭学校」と称する学校の存在意義を主張するなかで、「学校」の内部に「家族的生活」を導入する必要をどう認識するにいたったかを明らかにする。それによって、寮母セツ子の「家庭であること」の実践、とりわけ「炊事場」での実践が、当事者の自覚を越えて示していた意義を、その思想史的関連をふまえて考察する。以下、この足跡から、辿っていこう。

なお 30 年にわたる日誌の初期、中期、後期といった時期区分（16）は、本稿では、一時期には限定しない。本稿でも、藤田日誌から引用する場合には、資料紹介的な意味をもって、該当する箇所全文を引

用する。個人情報保護の観点からの資料の引用等の対応については、註 52)で記載した。本稿も、筆者による科研に属する。その計画については、宮崎国際大学研究倫理調査委員会の承認(2021.6.8)を得ている。



資料 1 1970 年前後の寮長藤田俊二と寮母セツ子

バックは、石上館。1974 年 10 月に新築される以前であるので、着任後 10 年内の寮長、寮母ということになる。藤田節男氏提供。

2. 留岡幸助の「家庭的生活」の認識とその構造

留岡幸助は、遠軽に北海道家庭学校を開設するに先立って、1899(明治 32)年 11 月、35 歳の時、東京巢鴨に「家庭学校」を創設した。その後 1901(明治 34)年には『家庭学校』を刊行し、その設立趣旨等について説明していた。「不良少年」たちを「教育的処遇」を施すゆえに「学校」と称すると特記するとともに、「家庭的生活」とすることを同時に強調していた。その著作だけでなく、その著作の前後、留岡は、「家庭」、「家庭的」、「家庭的生活」、「家族的感情」、「ホーム」、あるいは寮母に相当する「主婦」について著述、雑誌論文、日誌なかで記している。どう認識していただろうか。その歩みと内容それ自体とともに、その事項がどのような問題関心と関連づけられながら認識されているか、以下に跡づけよう。戦後、1960 年代—1980 年代における寮母藤田セツ子の寮生に対するかかわりを特徴づけるために、迂遠のように見えるが、本稿にとって必要なアプローチになるだろう。

もっとも早期に、「主婦」とその関連するに類義語ついて着目し、しかもその役割について肯定的な認識を示したのは、日誌、論著で確認しうるかぎり 1888(明治 21)の日記記述である。ペリー氏が家族は「帝国ノ基本」といった。自分はこの語を転じて「婦人ハ家族ノ基本」であるといおう。なぜか。

茲ニ人々生ジテ二、三人相集リテ家族ヲ為シ、家族遂ニ集合シテ国ヲナシ、政府ヲナスモノナリ。其家族ノ中最モ勢力アルモノハ婦人ナリ。現今内外ノ人々ノロニ文ニ喋々スル所ハ、我国ノ家族ノコトナリ。我国ニテハ、純粹ノ「ホーム」即ち家族ナシ。若シ国ノ文明国ノ昇平ノ御世来タセントバレバ、先ヅ宜シク昌平和楽タル「ホーム」ヲ造ラザルラズ。…17)

「家族」の中心に「婦人」が位置づけられる。その「家族」は、「ホーム」として規定されている。そして、その「ホーム」は、ここでは「昌平和楽」という表現で特徴づけられている。より具体的にはどうか。この認識は、覚書の断片筆記というのではなく、論説的なまとまった文章構成のなかに示されているが、その点は明らかではない。日記の同年の別の箇所にある以下の部分はその問いに答えてくれる。災害、事変があっても、変わらない「宝」とは何かについて語っている箇所である。

私ハ来ル夏休ミハ、本国ナル備中ニ帰り、私ノ屋ニ住居スベキモノデス。然ラバ、之ヲ未来ノ家、将来ノ住居ト云フモ過言デハアリマセン（何故ナレバ今ヨリ後ノコトデスカラ）。然ルニ私ニシテ帰ルベキ家モナク住居モアリマセンナレバ、其悲ミハ如何ガデアリマセウカ。又私ノ家ニ只住居ノ為ノ家屋ノミアリテ、其内ニ道具機械モナク、又親愛スル父母兄弟ガアリマセントナレバ、如何ニ夏休ミガ来リマセヨウトモ、私ハ私ノ本国ニアル家ヘ帰ル心ハ致シマセン。只外ノ国々ニ週流（サマヨウ）ヨリ外ハアリマスマイ。18)

「帰ルベキ家」がなかった場合どうか、という仮定とともに、われわれにとって「帰るべき家」の重要性が語られている。そしてその家が **home** のことばで捉えられている。後に家庭学校創設者となる若き日、20 代前半の留岡幸助の出発点となる認識の、その萌芽である。

その 2 年後の 1890(明治 23)年には、「家族」と「学校」とがどう関連するかが注意され、そのうえで、次のように「妻君」の働きが着目される。

「学校は人を育養す。然れども英雄、君子必ずしも学校により育ちたる人にあらず。却て英雄も、小人も、君主も、盗賊も、是非とも一たび通過せざる可からざる育養場は家庭にあり。家庭の問題、豈軽々しく看過すべけんや。…然れども此は何人に望むべきか。一家の明星たる妻君の外、誰か其責に任ずべきぞ。

去れば差向き一家の妻君たるものの務は、冷かなるものを温め、反目するものを和睦せしめ、遊惰なるものを活達ならしめ、卑汚なるものを高潔ならしめ、…大なるかな、細君の力。其一顰一笑、一挙一動は、以て家を乱して修羅場となすべく、以て一家を治めて樂園たらしむべく、子弟をして悉く君子たらしむべく、悉く小人たらしむべく、妻君の力斯く迄も大なるを知らば、其責任も又甚だ大なるを思はざる可らず 19)

この記述について、次の諸点が着目される。第一に、「学校」と「家庭」の場が、「育養」の語とともに教育する働きとして重んじられている。第二、その「家庭」は「学校」と対比して、誰もが「通過」する基盤的なものとして位置づけられている。第三に、「家庭」での「妻君」「細君」の働きいかんが、種々の局面を決定づけている、と重んじられている。

その翌年、1891(明治 24)年、留岡は「空知集治監」の教誨師になり、受刑者に接し、犯罪動機、経歴等を調査する。そのおり、多くのケースで原因が「子供」期の境遇に遡れると知る 20)。そうした認識をふまえてか、同じ年、日誌で最古代の救児事業に関して「当時孤児院、救済院、授職ノ学校ノ如キモノヲ建テ、或ハ作業場ニ、或ハ家族ニ連レ帰リテ世話セリ」と記述する。「古代」に関する「家族」の記述は、この程度にとどまっている。「家族」そのものであるよりは、「家族」を原理とする施設について立ち入って記述されるのは、19 世紀の事例である。同じ 1891 年日記の同じ箇所に以下の記述が

ある。

1833年、ドクトル・ジョン・ヘンリー・ウィツヘルハ其母ノ助ニヨリテ、ホルン Horn(ハンボ
ルグノ近傍)ニテ **Rauhe Haus** ヲ開設シタリ。全ク家族制ニシテ、其母ト共ニ初メ、三人ノ小児ヲ
集メ、彼九人トナリ、遂ニ十二人トナリテ、一家族ヲナシ、家族的感情ヲ以テ、悪少年ヲ感化セリ
21)。

ここに「ウィツヘル」と称されているのは、Johann Hinrich Wichern(1808-1881)である。ドイツ・
ハンプルク郊外で 1833 年に **Rauhe Haus** を開設した。「十二人」を「一家族」とする、としている。
この人数を基本単位とする、という規模の認識があるのか不明であるが、「家族的感情」が有する感化
力に、ここでは着目されている。「ラウヘスとは独逸語にては茅屋の意なり」と後(1900)に説明して
いる 22)。日誌、雑誌論文、著述に留岡は、この人物をみずから創設する家庭学校の先駆者の一人と
して位置づけ、しばしば言及することになる。同 1891 年には、「最モ有効ナル教育的、改良的ノ主旨
ニ基キ」「懲治監」を創設したとする「ウィツヘル」の生涯の伝記記述を 20 行程度紹介して後、名を
「ウ」と略し以下のように「家族制」について記述している。

ウ氏ハ熱心ナル母ノ助ニヨリ、入監者ヲ愛スル恰モ己ノ子ヲ愛スルガ如シ。一方ニハ家族制ニヨ
リテ、父子ノ感情ヲ燃ヤシ、一方ニハ職業ヲ授ケテ他日自活ノ準備ヲナシ、惰眠ヲ貪リツツアル
心身ノ能力ヲ発達ナサシメ、而善良ナル道德ノ基ヲ開クニ至レリ。23)

ここには、「教育的」であること、「心身ノ能力」を「発達」させること、「自活ノ準備」のため職業を
授けること、そして「家族制」という方針など、後の「家庭学校」の基本方針となる事項が確認されて
いるという点で着目される。

1894(明治 27)年 3 月教誨師職を辞し、米国遊学(1894-1896)し、「監獄(プリズン)」とも「エレメ
ンタリー・スクール」とも区別された「リホームトリー」(Reformatory)、出獄人のための「ホーム」
(Home of Industry)等の施設を数多く「視察」「実見」し、日記として克明に記録している(日記、
第 1 巻)。服役中の「作業」をもって「懲苦」とするのではなく、「労作を愛する習慣を養成」すること
が基本方針として実施されていることに、留岡は共感をもって書き留めている(1895)24)。

「空知集治監」での教誨師として得られた知見、Wichern の創設した「家族的感情」を育む小規模
の「ラウヘスハウス」の知識、そして、「労作」に関する米国での「視察」の経験—これらをふまえて、
幸助はみずからの「感化学校」の構想を日誌に明らかにしている。すなわち、1896(明治 29)年、概
則の第六条第三項として「族母ハ族長ヲ助ケ家内ノ整理ヲナスモノトス」25)としている。

1898(明治 31)年には、「保護教育」における「家族」の重要性は「公共的組織」に勝るとし、日記に
以下のようにその理由を論じている。

慈善事業に従事する人の経験したる所に依れば、如何に貧困なる家庭にても、苟も其墮落せざる
限りは完美善良なる公共的組織に優ると云ふ。…

幼児ヲ保護教育スルニハ、社会ノ秩序ト安寧トヲ維持スルニモ先ツ物質的ノ富ト安楽トヲ増進ス
ルニモ、人性ノ知覚ヲ發揮スルニモ先ツ家族ヲ完全ニセザルベカラズ。愛情ト、忍耐ト、親ノ熱情

ト、子ノ孝心ト同胞ノ愛ト、弱者ニ対スル義務ト、不幸ナル者ニ対スル同情ト、老者ニ対スル敬愛ト、是レ皆神ノ理想ニ依リテ作ラレタル家族組織ノ奨励鼓吹スル所ニアラズヤ。26)

ここにいう「家族組織」は、実際の「家族」であるよりは、組織された「家族」を指している。それは「愛情」「忍耐」「同胞ノ愛」等々を奨励、鼓吹する、と留岡は指摘している。翌 1899(明治 32)年には、実際の「家族」であれ、組織された「家族」であれ、期待される家族の本質を指して、1899 年の日記の記述のように「ホーム」と捉えて、次のように記している。

「ホーム」は、只ニ飲食住居ヲ以テ成ルモノニアラズ。仮令自己ガ所持スル住宅アリト雖、此ヲ以テ「ホーム」ト云フ可ラズ、心ナクンバ茲ニ家ナク、「ホーム」を組織スルハ慈母、細君。姉妹、兄弟ノ現在及愛ト注意ニアルコトナリ。此ノ愛ト注意ハ以テ人ノ住宅ヲ変ジテ「ホーム」となす所以ナリ。

花園ニ花ノアル如ク、人生ノ曠野ニ於ケル花ハ「ホーム」ナリ。

「ホーム」ノ心ハ心ノ集合点、愛情の湧出スル所、此レ人生ノ成立ニ光輝を与へ、カヲ添フル所以ナリ 27)

「ホーム」については、1888 年の「昌平和楽」、「帰ルベキ家」と表現したが、ここでは精神的な意味が強調されている。同年 1899 年の梅女学校卒業式での講話として書かれた文章では、同じ主旨でより具体的に語っている。「疲レタル夫ハ、其疲ヲ癒サレ、失望シタル子女ハ慰ハ受ケ、憂ハ変シテ喜ビトナルナリ。而此心ノ主体「ホーム」ノ中心ハ、其内ノ主婦即妻君ナラザル可ラズ」28)と主婦妻君の役割が期待されている。

以上のように、1899(明治 32)年の日記の記述では、保護事業で重要な「家族」の本質を「ホーム」と捉え、主婦(妻君)によって担われると留岡は指摘している。ただし、それを実現する家族舎とその人数規模については言及されない。

その同年 1899(明治 32)年には、東京巢鴨に「感化院」をみずから立ち上げ、「家庭学校」と称す。翌 1900(明治 33)年 3 月には「感化法」が公布され、「北海道及府県ニハ感化院ヲ設置スヘシ」とその第一条に明記される。「満 8 歳以上 16 歳未満」の者、等を対象にすることが記されている。法案を上程した政府説明(小松原英太郎)では「感化教育」の必要が指摘されていたが、全 15 条からのこの簡易な法律の条文そのもののなかには、「教育」のこと、「ホーム」に関連する事項などは言及されていない。同年 4 月、留岡は「感化事業に就て」と題して雑誌『社会』2 巻 13 号、にみずからの構想の一端を明らかにした。そのなかで「家庭」という表記が、はじめに説明される。

我家庭学校は純然たる感化学校なり。之を特に家庭学校と名けたる聊か理由ありて存す。世人較もすれば感化院を目して一数の監獄と同一視する弊あり。現に某所に設置したる者を観るに、殆ど監獄の如き趣きありて、外圍を廻らすに高き板塀を以てし、感化院の名称其物は已に教育的に非るが如しと。之れ殊更らに家庭学校と命名せし所以なり。ペスタロジーがホームを以て教育の中心とせしは、余輩の感を同ふする所にして、家庭組織を以て我が学校を継続せんことを期する者なり。学校則ち家庭、家庭則ち学校にして、両者の要素の適宜に配置せらるゝ所を以て真この教育を為し得べしと信ず。29)

ここに引用する箇所では注意されるのは、「監獄」との同一視を難ずる一方、ペスタロッチのことが特記されていることである。「家庭」であること、「ホーム」を実現することは、「教育」の意味を兼ね備えること、しかも「教育の中心」でさえある、ということが、教育史上に名高い人物—「教育の泰斗」と留岡は後(1930)に表現する(「私は何故に感化事業に身を投じた乎」30)—の理念をもって価値づけられている。「将来九十人を収容すれば十五人宛を一軒に住居せしむ」とある。そして、少年の逃走を防ぐ「堅牢な墙壁」を築くよりも、「感化則ち真個の教育こそ墙壁」として Wichern の理念を引いている(31)。北海道家庭学校の「開放処遇」は、この理念に拠る。

その 1901(明治 34)年 6 月には著作として『家庭学校』が刊行される。扉には“THE FAMILY SCHOOL”の表記もある。「感化院」と訳している Reformatory School(32)(1900)ではなかった。これまで日記で折にふれて記述してきた「家庭」「家庭的組織」「ホーム」といったことばが、より明確なことばで表現されてくるだろう。「家庭」などの場が、それを基礎づける観点も示されてくるにちがいない。

「家庭学校概則」の第五条には「本校は家族制度(ファミリーシステム)ニ由リテ生徒ヲ家庭的愛情ノ裡ニ薫陶スルモノトス」とある。第七条には、「家母ハ家族長ヲ補佐シ家族内ヲ整理ス」と明記される。「第五章 家庭的生活」として、以下のように説明される。

少年子弟が悪化する原因元より一にして足らずと雖、其の十中八九までは、家庭悪しきか、然らざれば全然家庭を有せざるに在るや明らかなる事実なり。彼等をして斯の如くならしめたるの原因果たして此の点にありとせば、彼等を善良なる市民に改善せんと欲するも、亦家庭的空気の中に於て教育するの大切なるは言を俟たず。而して我が家庭学校は茲に見る所ありて創立したるものにて、其の中心を為す所は、此の家庭を指揮監督する主婦(メツロン)なり。此の主婦(メツロン)は真の母にあらざれども、母に代りて児童を教導撫育するものなり。故に家庭の道德的中心力は、此の主婦が生徒の上に注ぐ所の温然たる慈愛の情是れなり。此の愛情ありて子女は生育すべく、家庭は和樂すべし。仮令家屋ありと雖、愛なくば家庭と稱すべからず。母ありと雖愛なくば家庭たる可らず。畢竟不良子弟の家庭に発生する重因は、母たる者の愛情冷やかなるか、若くは其の愛情偏頗にして此に厚くして彼に薄雲のあるに依るもの多し。実に教育上最も重大なる勢力を専有するは家庭なり。家庭なくして真正の教育を施さんとするも、蓋し望み難からん。…茲に於てか教育界に大家の現出するあらんか、必ずや教育の中心に家庭に置かざるもの稀なり。ペスタロジー曰く、「人類教育の新基礎は美はしき家庭なり」と。…感化事業の鼻祖たるウキツヘルンも、亦其の教育を施すに当り、家庭組織に倣ふ所多かりしと云ふ。スチヴンソンの「ウキツヘルン伝」に日へることあり。(某点は原文ママ) 33)

第一に、「善良なる市民に改善」しようとするために「家庭的空気」重要性が指摘されている。第二に、「家庭」を指揮監督するものとして、「主婦」の働きが期待されている。「真の母」ではなくとも、「慈愛の情」を有し、「道德的中心力」を発揮するものとされている。第三に、不良子弟の主な原因として家庭での冷淡な、あるいは偏頗な扱いがあると指摘されている。第四に、ペスタロッチのことばとともに、「教育の基礎」として「家庭」が位置づけられている。

このように特徴づけられた「家庭的生活」は、同著のなかの「第十一章 家族制度」でもより具体的に制度に即し説明される。

普通教育に於いては之を校舎（某点ママ）と名付くれども、感化教育に於ては之を家族（某点ママ）と称す。一家族中には家族長なる男子ありて一家を監督す。家族長に次ぐに主婦（メツロン）Matron なるものありて之を補佐せり。家族長は一家族内の規律を掌るものありて、且つ毎日午前は生徒を教育し、午後は生徒と共に労作し、且つ補助主婦（アシスタントメツロン）なるものあれば、之を助けて炊事被服等母たるべき務を尽し、生徒にして疾病に罹れる者ある時は看護の任に当るなり。一家族内には食堂あり、教場あり、其他家族に必要な凡ての機関具備し、純然たる家族的生活を為すものとす。故に苟も生徒の身心に関する一切の利害は即ち家族長及主婦の利害にして、啻に口を以て教ふるのみならず、身を以て彼等を率ひ互に喜憂を頒ち寝食を俱にせざる可らず。斯る生活を称して、感化教育に於ける家族的生活とは言ふなり。斯くて間接直接に人情を知らしめ、義理を教へ、家族の温かなる愛により成長したる者と等しき心情を養成せしめんと欲す。之を為さんと欲せば勢ひ単に口舌の教訓のみに依る可らず、實際的に活ける教訓を与へざる可らざるや論を俟たず 34)。

この章でも「主婦」のことがとり上げられている。とくに3点着目しよう。第一に、「炊事被服等母たるべき務を尽し、生徒にして疾病に罹れる者ある時は看護の任に当る」とあるように、家族長から区別される、主婦の固有の役割が明確にされていること。第二に、「家族長」とともに、夫妻は「口を以て教ふるのみならず、身を以て彼等を率ひ」とあること。生活事実を通じて人間形成するということを意味する。「陶冶」（Bildung）という語は用いられていないが、生活が陶冶する、という方法が原理として強調されている。対比されている「口舌の教訓」は、ここに例示されているわけではないが、肯定的に用いれば一校長講話が相当する。第三に、第一のことの結果でもあるだろうが、「喜憂を頒」つことができる、ということ。

こうした著作を刊行して翌、1902(明治 35)年にも、同名タイトルの『第二篇家庭学校』を留岡は著した。その序文では、前年感化法が制定されたことを喜ぶ旨を記し、その後に「感化事業をして成功せしめんと欲せば刑罰的組織を避け此を教育的に仕組まざる可らず」と主張する。どのような教育的仕組みを実現するか。前年の著作以上に本書では踏み込んでいる。その「第7章不良少年と社会的観念」で、「家庭的生活」の観点から捉えれば、二つの重要な点を指摘している。

第一に、「家庭的生活」を「社会的観念」の観点から意義づけていること。「不良少年の多数自己ありて他人あるを知らず、況や社会をや。是を以て彼等は自己に不利益なることは、悪きことと思ひ、自己に利益あるものは、何事に限らず、善きものなりと思惟するなり」。こうした傾向について、「主我的情念」に支配していると指摘し、「親戚と協力し、隣人と歩調を整へて、社会に生存する」ことのできる「社会的観念」が欠乏している、と問題性を捉えている。

第二、こうした「社会的観念」を「養成」するものとして「家庭的生活」を提供することの必要を位置づけ、それを具体化する寮生活、これまで以上に、下記のように立ち入って明確に説明していること。

15 人若しくは 20 人の生徒を打て一団となし、之を一校舎に収容し、彼等を監督するには、慈愛の情念に富みたる男女を以てするにあり。斯の如くにして、一家族を形成するに至れば、普通の家庭に於けると同一の方法によりて、学課及び労働を科し、その余暇に於ては、朝夕必ず不良子弟をして、家族の事務に従事せしむにあり。仮令ば早朝その家族の母たるべき監督者にして、

炊事に従事せんか、生徒の或者は水を汲みて厨に運び、或者は縁側板の間を洒掃し、或者は庭園又は校内の掃除に従ふが如く、苟も家族に必要な仕事は、惜むなく、惰けることなく、家長を助けて之を為さしむるにあり。斯の如くして怠ることなくんば、数年の後には、不良子弟と雖も必ず他人の労苦を分担するに至るべし。是に於て乎社会的觀念は事實に於て実践せられたるものと謂ふべし。35)

15 人もしくは 20 人を一団となし、という規模の方針は、東京巢鴨の「家庭学校」の 1909(明治 42)の時点では「家族舎」と称して 4 家族が存在すると記されている(家庭学校『家庭学校回顧十年』1909)。北海道遠軽に「社名淵分校」として 1914(大正 3)年開校以後は、1915 年に掬泉寮、1917 年に石上館が開設される。そうした形態とともに、家事が具体的に明確にされている。その分担意識について、「他人の労苦」の分担という働きとともに「社会的觀念」として特徴づけている。その觀念は「彼等に欠乏」するものとされる。それを「養成」する方策として「家族役割表」が示される。「各室掃除」「構内掃除」「靴磨き」「紙屑集め」「便所拭い」「風呂番」「らんぶ掃除」など 12 事項が一覧にされる。

このように生徒側の家族内での役割が明確にされる「家族制」について、留岡の他の説明から補えば、以下の特徴を指摘できる。1)「兵営制度」と区別できるとして捉えていること。「数十数百の兵士が一棟の屋舎内に起臥寝食して、父なく、母なく、女性なき単調無味の生活を送るが如く、院生は総括せられて一棟の寄宿舎内に住居し、専ら規則と階級とを以て教養」せらるるものをいう 36)。2)「社会的觀念」をどう「養成」するか、という観点からも生活を通じての人間形成(陶冶)が重んじられていること。「説諭、勸告、忠言、訓戒、説教等は世人の思ふ程に効力ある者にあらず。余の実験によれば、規律ある労役に服従せしむるを最効驗ありと信ず。其労役とは家庭と関連せる労役を意味する也」。留岡は経験を踏まえて、家庭生活を通じての陶冶という方法に、「社会的觀念」を培うという課題に対しても自覚的であった。3)「社会的觀念」を育成するに際して、種々の家事を分担することがなぜ有効か、この点について留岡はいう、「学科教育と実業教育の外、更に家事労役に服せしむる所以は、彼等が自己の家庭にありて我儘に怠惰に生活せし弊風を矯正し、其結果として、社会的は我儘勝手に自己の考のみを以て過ごし得可きものに非ず、必ず人を助け人に助けられ、互いに共同的生活を営む可きものたるを覚知せしめんが為めなり」37)。卒業後のことが留岡の視野に入っている。「人を助け人に助けられ、互いに共同的生活を営む」という生き方が、ここに期待をもって展望されている。

このように「家庭的生活」が自覚的な形で重んじられている。中心的には「教育」の領域が位置づけられる。子に対する「慈愛の情」を「道德的中心力」として発揮する主婦が不可欠の働きをする。その場合、留岡はかならずしも自覚的ではなかったかもしれないが、「家族的生活」を支える課題領域をかれは掘り下げ、あるいは視野を拡大することに努力している。その点で、すくなくとも下記の 3 つの部分、(1)政治の働き、(2)同情の働き、(3)看護の働き、が補佐している

「政治」との関連

1897(明治 30)年、政治との関連について留岡は、日記に記している。「慈善ト政治一見親和ノ関係アルナキガ如シト雖、慈善ヲ忽背諸ニ付スル政府ハ、經濟的ニ政治機關ヲ運轉スルモノニアラズ。其故ニ明君ノ其位ニアルヤ必ズ民ヲ愛シ人ヲ憐ム。一人トシテ其所ヲ得ザルナキニ至ル。於是乎政正シク民安ンズ。民安ンジテ国礎強固ナルハ歴史ノ示所ニシテ、一疑ノ此ニ挟ムナキナリ」。ここには、人として各自がその所を得るようにする対策をもって一国の政治の責務として、感化院等も含む「慈善事業」が位置づけられている。そして、政府内務省に「慈善局」設置が急務としている 38)。このような

歩みのなかで、家庭学校は先駆的に 1899(明治 32)年設立された。

「政治」ということで政府の取り組みに期待する部分もあるが、留岡は、それ以上に人々自身がいか
に「所を得」るか、という課題について関心をむけている。留岡の認識からわれわれは 3 点指摘しよ
う。第一に、「一個の市民といふものを造る」ということ。『家庭学校』(1901)では「善良なる市民」
に改善せんがためと指摘していたが、留岡は根拠をもってそのことばを用いている。「英雄—私は衆目
を驚かす様な英雄を造るのではなく、市民町民村民として規律正しい、市民町民村民として納税の義
務を果し、市民町民村民として公共心を有し、市民町民村民として苟も恥かしからざる処の其の考え
を持った一個の市民といふものを造るのが、即ち今日国家を経営する所の理想でなくてはならないと
思ふ」。第二に、「我が職分といふものを重んじて之に尽瘁するといふことが実に大切である」こと。

「馬車屋は馬車屋、パン屋はパン屋、教育家は教育家、政治家は政治家その自分の職分といふものに落
付いて、而かも一つの事を遣ってそれに精通する」というイギリス人のように「銘々の職分を重んずる
こと」。「市民」たるために必要なことと、かれは捉えている。こうした「職分」に、誰もが巡り合うこ
とができるのだろうか。そのような疑問が生ずる。第一も第二も、一般むけの講演会での留岡の所見
(1908 ; 明治 41) である 39)。後、「感化事業の真諦」と題した論説 (1914; 大正 3) に着目すれば、第
三の点が指摘できる。長所を見出し、その活用を図ることである。北海道サナプチ「農場」経験とともに
「寝食を俱に」しながら、留岡は次のように論じていた。「感化事業は決して廃物の利用ではない。
若し利用すべしとするなら、即ち彼等の長技を利用して之を善良な方面に導く点にのみ存するのであ
るが、左りとて不良少年は決して廃物ではない。若し強いて云ふべくんば、彼等は寧ろ放棄物である。
…人には夫々個性があって、それに必ず引き掛りといふものがある。…少年の裡にある引掛りさへ見
出すことが出来たならば、少年感化のことは六カ敷きものではない」40)。この論説 (1914) で留岡は、
感化事業の対象となる少年たちを想定して、その一人一人の長所(「長技」)の活用についてとり上げて
いる。「放棄物」と見られる者であっても、その者が示す長所が一寮での役割分担を通じての「社会的
観念」に結びつきながら一社会的に有用な人材として形成できる、と理解されている。「包摂」的とい
えるだろう。この論説は、藤田が「寮長二十年のくぎりに」(1983 ; 昭和 58) でも引用するものである
が、後にみずからの足跡をふり返る論説 (1927) では、荻生徂徠 (1666-1728) の『徂徠先生答問書』
によって、より徹底的に根拠づけていることが注目される。徂徠のことばを引用して、留岡はこう記し
ている。「今日世上一般に人物を探がすに、疵なきもの疵なきものと尋ね廻り、仮令役立ちそうな人あ
るもその人に癖あり、その人に少しでも疵あらば之はいかぬ、あれは駄目と完全に完全を期するが故
に、人を用ゆることはいつまで立っても出来ぬものなり。私は常に考へて居るのに、役立つ人は癖あ
り、疵あるものの中に得てして人物は見出さるゝものなり」41)。各自がその所を得て、「役立つ人」は、
むしろ「疵あるもの」(「疵物」)を思われる人間を用いることによってこそ形成できる、という認識が
まとまった引用文とともに示されている。直接的には方面委員制度導入にかかわる所見であって、感
化事業に即した論説ではない。けれども、上記の論説 (1914 ; 大正 3) を含めて、寮生一人一人に対す
る留岡の期待とともに、役立ちという点で「疵」あって難しそうに見える者—「放棄物」という表現に
相当—でも、むしろ、それらの人々こそ「用いる」という方法的実践によって包摂するに値する人材た
りうる、という認識が示されている。一般普遍的な課題にかかわっている人材形成に関する基本認識
を示している。「人を助け人に助けられ、互いに共同的生活を営む」という『第二篇家庭学校』(1902;
明治 35) で示された将来的課題にも通じる。ここにおいて留岡は「政治」の課題に属するとはとくに
把握してはならないが、政治的なもの—その倫理的契機であり、技術的契機であろう—に立ち入っ

ている。かれの日記中の認識でわれわれが捉えれば、「出来る丈多数の民衆を幸福ならしむる政治、施設、教育制度を意味する」。その点で、「デモクラシー」を実現する政治教育認識として性格づけることができる 42)。

「同情」との関連

「家族制度」について留岡はすでにふれたように『家庭学校』(1901; 明治 34) で「身を以て彼等を率ひ互いに喜憂を頒ち」と、家族長及び主婦の役割にふれていた。その働きは、重要で、留岡は「同情」論として展開している。1898(明治 31)年、留岡は「同情の念」と題した論説を発表(『基督教新聞』)する。「人は同情の念に動かされて初めて利己なく私心なき公明なる献身的の行為を顕はすこと得べし」とし、「家族」においてこそ、この「同情の念」がもっとも「濃かに」おこなわれると捉えている 43)。こうした同情は、苦難の場合、その当事者において、ただちにその解消を求めるものではない。「難苦は賜物なり」という論説(1897; 明治 30)において、「難苦なくしては発達進歩するものなし、難苦は瞬間頗る不便利なりと雖之を耐へ之を忍び戦ひ克つに至りては其結果実に驚く可きものあり」と人間のあり方を論じ、「耐へ難きの試練」の重要性を指摘していた 44)。「難有」の理念として後に結実する(「何事も難有し」1912; 大正元)。こうした「難苦」を伴う「試練」に対して「同情」の対象となる。「家族」に着目した同情論は、後に「苦痛の賜」と題した論説(『人道』1912; 大正元)として徹底化される。

「家族の父たり、母たるものは、二六時中歓喜の生活計り送って居るかといふに、決してさうではない。否な親は其の子女の為に非常な苦しみを嘗めて居る。譬ひ其子供が四十になっても、五十になっても、親は矢張り赤ん坊のやうに思って、雨につけ、風につけ、其の子供の安全を祈らぬ日とはない。斯くて親は子供の為に瘦せ衰へることを知らないのである。所詮恩愛の絆なるものは涙の外に解くことの出来ない歓喜と苦痛とを伴ふものである。左りとて此苦痛の為に親が子を見棄てるかといふに、決してさうではなく、真正の親は子供の為に苦むことを以て寧ろ大なる喜びとするものである。…親が難ありといふ訳も、亦実に此の苦みを嘗めてくれるからである。…苦しむものと共に苦しむことは実に尊い、難有い、又仕合千万なことである」 45)。

「苦しむものと共に苦しむこと」ということを家庭学校に即していえば、「苦しむもの」とは少年たち—小舎夫婦制を巢鴨の家庭学校開設以来実施している寮生一人一人—を指している。かれらが抱えている「苦しむ」を同等に、あるいはそれ以上の質量で寮長寮母は「親」として知的に認識し、心遣いして、うけとめること、そのような意味を留岡の主張する同情論は含んでいる。

「看護」との関連

1901(明治 34)年『第二篇家庭学校』第 7 章は「教育の基礎は身体に在り」と題されている。「家庭若くは学校に於て教育に従事するものの決して忘却すべからざる一事は、教育に着手するに方りて、先づ其の生徒の身体如何を検査し、其の身体より教育を始むる異なり」 46) と記されている。「身体」に対する配慮、ということで、留岡がその「礎」を築くものとして重んじたのは「能く働き、能く食らい、能く眠らす」という「三能主義」である。その配慮は、学校全体として習慣的制度として徹底しているが、生徒一人一人に即してみれば、もちろん健康を損なうこともある。よって寮母に対して、「疾病に罹れるものある時は看護の任に当る」となるとされた 47)。身体に対する配慮、とりわけ疾病一般に対しては「看護」が求められる。ゆえに「垢染みたる顔手、身体」を清潔にするため「浴場」が重んじられなければならない。より限定して留岡が注意をむけるのは、教育と関連する精神の病理についてである。

「教育と病理」と題した家庭学校主任医の知見を留岡はとり上げている。「不良少年の如きは精神上病

理的に解釈するもの多きが如し。其精神状態を見るに道德、宗教等の高等なる觀念に乏しきか、或は強度の感覺を有するか、又は意志の障害あるものか等なり。…不良少年の精神障害の原因は、先天後天に發生するものにして…。故に之が改善を期せんとすれば其原因を探究し、其由来を詳悉し、身体に適當の方策を施すに非ざれば教育の完備を期す可らず」48)。このように留岡は、家庭学校主治医の知見を引用する形で、精神病理にも着目し、看護すること、すなわち「身体」に対する配慮を求めている。その場合でも、とくに「教育」の成り立ちに対する関心を示していた。

以上のように留岡幸助の「家庭的生活」にかかわる認識と、それ関連する領域を跡づけることができる。感化事業に「家庭的生活」を導入する必要を思い、みずからが設立した施設に、「学校」という名とともに、それに「家庭」の名を冠したかれの疑いのない確信的な認識が日記及び論説、著作に示されていた。その特質を3点に指摘しよう。第一に、この認識の形成について。留岡においてこの認識は、確認しうるかぎり、すくなくとも1899年東京巢鴨での学校開設の11年前の1888年を起点として、一步一步進展して形成されている。欧米先進情報の摂取という側面はあるが、一挙に、というのではなく、認識の史的歩みを通じて「家庭的生活」の認識像を明確にしている。①寮母を中心とした「慈愛」の雰囲気、②一寮舎で15-20名の規模、③家庭役割分担を通じての「社会的觀念」の育成、などの諸要素を明確にしている。第二に、その施設の呼称について。Reformatry School という通称ではなく、「FAMILY SCHOOL」と表現し、書名には併記していた。1913年北海道家庭学校創設以後も含めれば、田園教育舎、あるいは地域社会学校としても成り立っている。ドイツ・ハンブルクの Wichern の「ラウヘス・ハウス」など、欧米先進諸国の先駆的实践にも測りあえ、説明できるという自負に、揺るぎなく支えられているかもしれない。そのような想定が可能だろう。第三に、「家庭的生活」という認識の成り立ちについて。「同情」「看護」「政治」の諸領域の知見は、「家庭的生活」そのものの概念を補強する思想として構造的に把握できるだろう。この点はここに説明を要する。「家庭」であることは、「慈愛の情」を有し、「道德的中心力」を発揮するものとして期待されていた。その力をより効果的に発揮するための原動力にもなりうるものとして3つの知見は位置づけられる。感化力という点で「天然」(自然)、「家庭」、そして「実物」のそれぞれの力は、創設者が自覚するところである49)。その場合と比較して、明確な自覚が、これらの知見に対して創設者にあったかどうか不明である。晩年の回顧ではその認識はうかがえない。かれの主観的自覚とは別に事実関係から本稿で構成するものである。以後の家庭学校史でも、この思想構造についてふり返りの対象になる、ということはなかったであろう。戦後の石上館で寮長藤田俊二と寮母として同行した藤田セツ子によっても、もちろん明確に自覚されたということもないだろう。意図的に人間形成することを志向する「教育」の施設であることを前提として、その教育の基礎構造をより明確にする、という掘り下げの試み以前に、むしろ、「保護」するのみならず、「教育」する施設であることを優先的に主張する必要性が、これまで持続していたからであろう50)。そのような社会的事情はともなく、歴代の当事者たちの自覚を超えて、留岡幸助—留岡清男—谷昌恒—藤田俊二といった史的系列を協働関係として理解するならば、「家庭的生活」の思想構造は、寮母セツ子の「家庭であること」の実践の特質を解明する一つの手がかりになるだろう。その点に注意をむけたい。その前に、もう一つの身近な関係性にも着目することが不可欠である。

3. 寮母藤田セツ子の寮長藤田との関係性—対話的コミュニケーションの実践—

寮生一人一人の生活、作業、学業の各指導に際して、寮母藤田セツ子は寮長藤田俊二とどのような関係性を示していたか、という点も着目しておこう。

寮母は、職員構成上、制度的には教護（寮長）に対して「教母」と称され、学校内において寮運営上、生活指導、学習指導、職業指導、等において緊密な連携協力の関係を形成することが期待されていた。北海道家庭学校でも、基本的にはこうした組織編成は変わらない。『ひとむれ』教育特集号、通巻 450 号、1979 年 8 月 1 日、には「教母」としては柏葉寮寮母平本秋子「婦人会の現況」と題した報告文が掲載されている 51)。以下では、寮母が寮業務をどう担っていたかをその全体像を明らかにするものではない。寮母の寮生に対するかかわりを明らかにするという本稿の主題のために、前提として、寮母と寮長との関係性について確認する。

家庭学校着任後 20 年を経過して、みずからの指導法について全国教護院研修会で総括的にふり返っている文書「寮長二十年のくぎりに」（1983；昭和 58）には、寮母の役割に明示的には言及してはいない。「共に食事し、共に暮す中からの人格陶冶を实践して来た古き良き伝統を持っている教護院こそが」教育の課題をはたすことができる、と家庭学校でひき継がれている基本方針をわずかに記しているにとどまる。寮母の炊事につき従って「炊事当番」を担わせるということが、各寮共通して実践することが慣例として成り立っている。その一事例を代表として、寮生活での種々の役割を寮生間で担うという当番的な課題—すでにふれた『第二篇家庭学校』（1902；明治 35）の「家族役割表」のような—にかかわって、寮長は寮母とどう連携し、協働するか、という点で、なにかしらの方法的な自覚はこの文書では見られない。「炊事当番」という個別の役割というよりも基本的には、創設以来の「三能主義」の实践として説明できることで、藤田自身がこの文書—公的な性格をそなえているにせよ、個人史的回顧の文書—で説明するには及ばぬと判断したのだろう。そうであるにせよ、すでに着任の当初から—藤田の石上館にかぎらず、他の寮でも共通であろうが—寮長としてのみずからの日々の実践のなかの諸局面に、寮母の存在は、制度的のみならず、習慣的にも不可欠的な位置づけを与えられていた。実生活のなかで示されたその事情の場面一つ一つをふれておこう 52)。

1966.10.31 K(**1)

炊事が S に変わってもよく手伝っている。薪割りなどの作業が終わるとすぐ手伝う。仕事に対する態度、手付きなど今春卒業していった K(**1)君によく似ている～～とは家内の話で、何んだかそう言えばそう思われて来る様な感じの子だ（下線は原文ママ引用者）。暗いけどそれなりにユーモアを持っているし、このままいけば安定した存在になるかも知れない。礼拝堂で説教を聞いている時も、身じろぎなどしないで座っていたのは良かった。このまま安定していく様に心から希う。

1967.6.26 T(**2)

今日も一生懸命にやっている。今迄に比較してぐんと落ちついた態度でやっているのが特に目につく。

○落ち着いた態度でやっていると見たのは僕の楽観的な見方であった様である。家内いわく、「T(**2)さん、ちょっと変な所がでてきたみたいよ。何か気に入らない事があったりすると、何にも言わなくなって黙り込んでしまうの。気分悪くて」とちょっと困った様にぼやいてた（夜 10 時）

これは困ったものである。どんな形で注意したらいいか？しばらく様子を見なければならぬ。

1967.7.1 S(**4)

どこからつれて来たのか、まだ羽ばたきもできない様な小さな雀を、小さな箱に入れて 2 号室で

飼っていたのを見つける。家内の話によると、どうも昨日あたりかららしい。「御飯をやる時に、雀さんさあ食べるんですよ～と言いながら、そっとやっているんですよ～」と 家内は笑いながら言っていたが、僕が笑っている訳にもいかないの、「S(**4)！小鳥を大切にするのはいい事だが、2号室では駄目だぞ！納屋で飼えっ！」とそんなに怒気をこめないで怒鳴りつけたら、ほっとした様に「ハイ」と頭をかいていた。

1974.1.31 I(**33)

今日もせっせと炊事をしている。家内は、

「少し I(**33)は我ままになって来て～」

と時々こぼしているのだが、僕は一切取り上げず。我ままと凛々とした気概とは紙一重のもの。

今は凛々とした気概をこそ大切に伸ばしたいからだ」

1977.3.1 A(**56)

T(**33)の**貿易入社を決めて夕べ帰ってくる。僕の留守中も A(**56)は炊事をきちんとしていたらしく、家内は「**今迄で一番しっかりした感じなの、今週の A 君の炊事は！**」(朱筆は原文ママ、以下同じ引用者)とほめていたが、それに対しての僕の反論は、「元々 A はしっかりしているんだよ！」

1980.4.28. K(**76)

K(**76)が炊事当番、M が炊事手伝いなのだが、小さくて利かない(中 1) M は、性格的にも他人と仲々協調し難い自我の強さがあって、しんの優しい K など実のむき出しの自我の強さに参っている様だ。実はこの自我の強さは、反面では実の頑張りの精神とも裏腹になっているだけに、注意の仕方にも細かな心くばりが必要で、僕はじっと M と M の周辺を見守ってはいるのだが、今はもう K(**76)が大変な様だ。

「炊事手伝いの O(**64)君がふざけたりしていて これをしれとたのむと 今はこれをするのといったりしてなかなか聞いてくれません。だから少し炊事がおくれてとても辛いです。」

家内は、

「**100%M が悪いわ、自分ではなんにも出来ないし、やらないくせに、K の言うことは絶対に聞かないの！あれでは M は人から嫌われるわ**」

としきりに実のことを憤慨しているのだが、M には M のいい所がある！

と、僕は厳正中立。

1981.12.7 T(**89)

昼に家内が顔をこわばらせて言うには

「今日電話が鳴ったので、私が「もしもし藤田です」って言ったら途端に何んにも言わなくなっただんです。最初に藤田先生のお宅ですかと言った言葉はたしかに T(**89)さんの奥さんの声だったし、その後何んにも言わなくなって私、気分悪くて～」

「はっきり T の母さん(継母)だと判ったのかい？」

「それははっきりと言えるわ、ともり君の母さんの声は2、3度聴いてますし、とりすました声にも特徴があって判ります。気持悪かったわ～」

T の母さんだったと家内は 100%の確信を持って言い、昼の時間に女から無言の電話が来る様な浮いた生活もしていないしといささか考えこんでの今日の1日だった。

もし T の母さんだったとしたら、無言の電話というのは異常としか言い様がないし、僕も何んだ

か段々気持悪くなって来た。

以上が示すように一筆者の他の論稿 53)でもうかがい知れるように一藤田俊二の記述はその時、その場で居合わせた人物の会話がいきいきと描き出されている。こうした諸事例が浮かび上がらせてくれることの一つは、石上館での個々の寮生の生活をめぐって、寮長と寮母とのあいだに一種のコミュニケーションが展開していることである。

その様相は、一歩通行ではない。相互性が成り立っている。その場合、「家族長なる男子ありて一家を監督す。家族長に次ぐに主婦 Matron なるものありて之を補佐せり」(『家庭学校』1901;明治 34)といった制度上の上下関係は、1世紀後のこの教護院でもひき継がれていたであろうが、その上下を越えた関係性が示されている。信頼関係を基盤にしながら、その日むき合っていた一人の寮生について、かれの辿った過去、現在、そして将来にかかわる生きる課題をめぐり問ひかけとともに、それに対する肯定あるいは否認、相違を含む応答から成り立っている。そのやりとりは、寮生に身近に接した寮母とその発言に対し一目おきながら、対等性が示されている。

T の母さんからと思われる「無言の電話」があったという情報の共有 (1981.12.7**89)、「何だかそう言えば」(1966.10.31**1)、「うんうんと頷きながら」(1989.6.24**139)という同意、家内は厳しい意見であるが、僕は「楽観的な味方」(1967.6.26**2)、あるいは、家内は「憤慨」しているが、「僕は厳正中立」(1980.4.20**76)、「僕が笑っている訳にはいかないので」(1967.7.1**4)、「僕の反論は」(1977.3.1**56)、「僕は一切取り上げず」(1974.1.31**33)という対置にも、その点が示されている。そうしたやりとりに、対話的といってよい協働の姿がある。

ここにとりあげた事例は、おもに初期に属す。中期でもその関係はうけ継がれている。後期になり藤田も 7 つの寮を含む学校全体として責任ある立場が期待される。転寮によって「指導困難」な生徒をひきうけることになる。寮長にせよ、寮母にせよ、厳しい局面に立たされて互いに相互理解を試みていることが、日誌の記述からうかがえる。「あんな食ってかかる態度」(1989.6.27**139)などの記載がある。そのような場合でも、あるいは、そのような場合だからこそ、寮長と寮母のあいだには、寮長と寮生のあいだに示されていたような対話的なコミュニケーションが成り立っている 54)。寮長・寮母の関係が他方と区別されるのは、一人一人の寮生の成長を目的とするという協働性がはじめて明確に相互に理解されている、という点である。

4. 石上館寮生に対する寮母セツ子のかかわりの諸相とその特質

—寮舎での炊事場を中心とした「生活を共にする」実践—

ここにいたってわれわれは、石上館寮生に対する寮母藤田セツ子のかかわりそのものに着目できるだろう。留岡幸助の「家庭的生活」の認識、そして、寮母と寮長俊二との協働関係、この二つを前提として、本稿は主要な対象をとり上げることができる。寮舎において寮生一人一人に対して、「共に食事し、共に暮」(藤田俊二「寮長二十年のくぎりに」)して、「生活を共にする」こと(谷)を毎日実践し、どの場面で寮母セツ子はどのような役割を実際にはたしていたか。その展開が諸相あることを、俊二の日誌を手がかりに具体的に明らかにしよう。寮長の対応というよりも、その部分を含みながら、一人一人の寮生に対して、寮母はどうかかわったか。この点に中心的に着目したい。そのかかわりがとりわけ顕著なのは、以下のように寮内の「炊事場」(資料 2-1, 2)である。その場面とともに、それ以外の諸相も具体的に跡づけておこう。その諸相を以下に、9 項目に便宜的に分けた。炊事を中心として、それ以外のかかわりの広がりを見出すことができるだろう。



資料 2-1 石上館の炊事場

1974 年 10 月に新築される以前の石上館の炊事場である。寮長藤田俊二(1932-2014)と後姿の寮母セツ子(1938-2020)、そして炊事する寮生が写し出されている。『暮らしの手帖』1971 年第 11 号の「遠軽の家庭学校」と題した記事(全 18 頁)に掲載される。



資料 2-2 石上館の炊事場

2007 年夏の様子。俊二の次男藤田節男氏提供。

1) 炊事当番

1966.10.10 S**4

今日は体育の日で午後からこくわとりだ。こくわとりを一番喜んだのは S(**4)、なに程山で食ったのか舌を割らして大笑いしながら帰って来た。夕食の時に家内がしきりに S を呼んでいる。「何するんだ? S が何かしたのか?」と聞くと、「S さんにサンマを焼いてもらおう? フフ」と家内が

笑いながら言う。S はとてもサンマを焼くのがとても上手なんだそうだ。サンマを焼くばかりではなく、ハンバーグの厚さだとか、カレーライスの塩加減など、S が一番よく知っているし正確なのだそうだ。「S さんってのは割かしいいものを食べて来たのかも知れないね。父さんという人がまた美食家だったのかも知れないし〜」（～の表記は原文ママ、以下同じ引用者）と、家内は料理にかけては S に一目おきもし、重宝もしている様だ。家内に何を言われても、えへらえへらしながらちゃんと仕事をしているこの子のこの頃に何かひとつの安定感がでて来た

1966.11.10 S**4

今日は僕の上の子の（剛太郎）の誕生日なので、桂林寮のさとしちゃん、掬泉寮の I ちゃん、M ちゃん、柏葉寮の I ちゃんなどを招待して、汁粉、赤飯などでささやかな宴をもよおした後、夜、生徒にも汁粉と赤飯を一杯づつ食べてもらう。皆、口々に「美味しいです」とか「おいしいです」とか言っているなかで、S(**4)だけは何んとも言わずにこにこしながら食べている。家内が、「S さんは何んとも言わないの？」と笑いながら聞くと、「ほんとうに美味しいと思っている人は言葉にだして言わないもんだんですよ 奥さん〜」となかなかいいことを言ったので皆で大笑いとなる。何んにしても楽しい奴になってきた

1967.2.6 S**4

今日でとうとうギブスをとることになり、朝からそわそわと楽しそうにしていたのだが、朝食のすいとん（一週間に一度の生徒の大好物）を食べてから病院に行けるかどうか？何んとも心配そうに笑っている S(**4)の顔がほんとうにユーモラスだった。…夜は久しぶりにカリント、午後から、まだ作業にでれない S が手伝って、玉子 5 コ、牛乳 5 合などを入れてつくっただけに、家内自ら「美味しいわよ 今夜のカリント〜」というだけの上等のカリントができたのだった。そのカリントをジャンケンで分けるんだから、寮内すさまじいような喧噪でいっぱいになってしまった。その中で、大きな S と小さな鈴木とが真剣になってジャンケンショ、ジャンケンショとやっているのが何んとも楽しかった。

1967.3.5 S**4

昨日で炊事が終わってにこにこしている。今日になって家内いわく、「S(**4)さんの炊事についての見方はちょっとからくしておいてね〜」と言う。足の悪かった故もあったが、全体的にだらけていたと言うのだ。前回が良かったので、S に対してひとつの固定した甘い見方があったのかも知れないんですけど〜とは、家内の小さな自省のようである。今後のすべての様子を注意ぶかく見守りたい。

1966.10.31 S**5

昨日から初めて炊事当番をさせてみることにした。ちょっと心もとないので、仲のいい S(**4)をつけて〜。どっちがほんとの炊事かわからないような 2 人のコンビぶりが微笑ましい。「S(**4)、ここをちゃんとふけよ」と S(**5)が言えば、「ハイ、ハイ」と S(**4)がふいている。大きな S(**5)の、何ともいえない大人の風格が嬉しい。炊事をしながら、「僕の父さん奥さんをもらうかも知れないんだよ 奥さん！」と家内に笑いながら大声で話していたそうだ。「僕がここに来る頃にきまりかけるところだったんだもの〜」とも言っていたとか〜。「僕が家庭学校を卒業して家へ帰るころには、新しい母さんが家にいるかも知れないよ。だけど、ほんとの母さんが家から居なくなる時は、僕は 5 年だったけど、ワッと泣いたんだよ 奥さん〜」と、ちょっとしんみり話していたとか〜。この子の幼い人生をも、早や厳しい現実がいやおうなくおし包んでいるのだ。

1968.10.21. S**5

炊事をしながら、家内と 2 人しみじみと語り合ったという。母さんが呑屋に働いていたので、毎晩酒ばかり呑んでは酔っぱらって帰って来て遂々父さんがたまりかねて、出て行け！と怒鳴ったら出て行ったのだという時の S(**5)さんの表情が可哀想だったの〜と、家内がしみり話していたのだった。

1967. 4.10 O**8

今日から O(**8)一人で炊事をするようになった。なかなかきびきびしていて潑刺たる感じである。「初めてとしては 90 点以上ね〜」と、家内の評価もいい。

1967.4.12 O**8

今日も炊事を一生懸命やっている。この子を見なおした〜と、家内もすっかりベタほめなんだから大したものだ。炊事当番では抜群の成績を示しているのだが、今日の国語テストではこれまた抜群の最低成績で喜んだりがっくりしたりのあわただしい 1 日ではあった。

1967.10.31 O**8

うでまくりをして一生懸命に炊事をしている。きびきびと手順良くやるだけに、家内は随分助かっているらしく、仲々機嫌がいい。知ったかぶりをするので皆に評判の悪い T が、南瓜汁粉をつくっている O(**8)の所に来て、「これ、なによ？」と聞いたら、「お前だら聞かなくても知ってるべや！」とびしやりと O にやられて、さすがに二の句がつけずにすごすごと炊事場から居なくなったそうだ。

「O さんって、仲々いいづらいことをびしやりと言うの。それがとっても楽しい言い方なので大きい子もつい笑ってしまうのよ。40 年に卒業して行った M さんみたい〜」と、家内はすっかり O ファンである。

1968.10.7 O**8

炊事当番 今日から炊事当番である。現在の石上館では O(**8)は炊事当番の第一人者、自分でもはっきりとそれを意識しているので、すさまじい様な仕事ぶりを見せて、今日のうちに漬物小部屋の硝子戸まできれいに洗い上げてしまった。「O さん、やる気十分ね〜」と、家内も安心している。

1969.4.29 O**8

今日も一生懸命に炊事をしているが、家内にこまごまと言いつけられると「わかったわかった〜」と、ちょっとうるさそうに答いるとかで、「古くなってくると自信がついて来るから、私にあんまり言われるといやになるんだわね！」と、家内が何んとなくしみりと話していた。その他に、あまり何でも洗って洗ってライポン F を、他の炊事当番の子よりは 2 倍は使ってしまうとかで、家内も少し困っている風だ。

1975.12.15 S**45

今日から炊事当番、午後から家内とのり巻き寿司をつくりながら、
「僕もう姉さんと会えない気がするよ、奥さん〜」としみり家内に語りかけ、
「そんなことは絶対にないわよ。隆がもっと元気をださなければ駄目よ！」
と家内が励ましたら、ほっとした様に笑顔を見せていたとか〜。

1976. 1. 31 S**45

午後 3 時から HBC テレビ青年会議を見る。僕と 10 年前の卒業生 6 人とが出演した番組だったの

だが、10 年前の家庭学校とその思い出、現在の生活、将来の希望などを語り合っ楽しい 1 時間だった。もう少しで社会人として巣立っていく S(**45)は、23 日の日に岩見沢まで乗せて行ってもらった MS 先輩も出演しているだけに、非常な親近感でじっと見ていた様だった。終わってから炊事場に行った家内に「僕 考いさせられたよ！」考い考い言っていた由。

1976.2.1 S**45

M(**51)、T(**52)、T(**53)、S(**55)無断外出 午前 1 時～午後 5 時 この 4 人が、どの様な理由で、どの様な相談が成立して-15 度の薄明の中を走り去って行ったのか知る由もなく、今日はただ呆然とした 1 日。一説には、

S(**45)、H(**44)という年長者に対する反感があったらしい

というもあるのだが、これは無外の理由にはならない。日記にいろいろ書いていないが、その様な風には僕はとっていないよ S(**45) ！。それよりも嬉しかったのは、炊事をしながら家内に、「無外のない伝統が石上館の誇りだったのに！」

と本心怒っていたということ。愉快だったのは、

「今度の無外で先生の頭がいっぱいになって、僕の卒業が延びるだろうな！」

とぼやいていたということ。そんな事はないから安心せい S(**44)。

1976.2.5 S**45

気分直しだ！と、落花生 3 キロを買いこんで、それにガム、キャンデー、アメ、ラーメンまでまぜこんで、午後から景気よく節分豆撒きだ。

「はいつくばって拾い廻るのは何んとかなく惨めだね おくさん！」

と炊事場で家内にいい事言っていた S(**45)だったが、それはもう大ハッスルして拾っていたのが楽しかった。

1976.8.1 A**56

炊事をしていた時の A(**56)について、今日も家内が考え考え次の様に話していた。

「聞いても、なんとなく聞えないふりをするの。反抗するとかなんとかではないんですけど、最初の頃の様に素直ではないの～。厚かましい所もでて来たわ～～。」

段々下降していくなあ～A よ。

しかし、T(**52)、I(**33)、S(**55)などと対等に口をきける様になった自信は大きく評価したいし、A、ひとつの長い橋（細い橋）をゆっくりゆっくり歩き始めた 5 ヶ月目である。

1976.11.1. A**56

T(**53)と A(**56)の炊事場は楽しいと家内が言う。

家内

「A 君、面白いのよ。

学校の事でも、寮の生徒の事でもなんでも言うの」

言葉にとげが無いから とっても楽しいのよ。」

T とぴったりしている A が、一番安定している様に見えるのは、やはり、T がよりしっかりして来ていると解しているのだが～～。

1977.10.31. A**56

×家内が

「炊事当番なんだけど、人のいい T(**62)君をとことん使うのが見苦しいわ」

とこぼしている。

A(**56)よ もっと自覚しての仕事をせい。

1977.11.2 A**56

炊事4日目、どうも A(**56)の我まな仕事ぶりが僕の眼にも映る様になって来て、さてどうしたものかと沈思している。

×夕食後 自分はそのま食堂でテレビを見続け T(**62)1人でせつせと炊事場で洗い物をして
いた。家内が今日も、「なんでも T君にやらせるの。私が何か言うと又気分を悪くしそうだし、我
ままなのね Aは～～～」と溜息をついているのだが～～。

さてどうしたものか。

1979.8.26 M**75

今日から M(73)を炊事当番に、M(**75)を手伝い兼牛乳缶とり指名する。M(**73)の優しい人柄、
M(**75)の気おけない善い人柄に家内はなにかほっと心和睦ものがあるらしく、とても楽しそ
うに炊事場へ通っている。

「M(**73)君も M(**75)君もきちんとした食事をして来たらしくてカレーライスでも野菜サラダ
でも、ちゃんとした作り方を知ってるの～」

と感心しきりの先ずは初日。

1979.9.16 M**75

今日から牛乳缶とりを M(**75)とする。炊事場で炊事当番の M(**60)と大きな M(**75)がかもし
出す雰囲気がとても明るくて、家内はとても喜んでいる。その家内が、

「M(**75)君って雑に見いるけどちゃんとした料理の作り方知ってるのよ～。家では3度3度き
ちんとした食事をしていたのね」

としきりに感心し、男の子でもその様な視点から見る見方あるなあ～と、僕も又感心したのだっ
た。

1979.11.26 K**76

牛乳缶と炊事手伝い (初)

今日から M(**73) (54年1月入校中2)を炊事当番に K(**76)を炊事手伝いとする。MもKも来
年以降の我が寮の支柱ともなる存在だけに、このコンビがうまくいくのかどうか？は注目に値す
るのだが、まずは滑り出し順調！

家内は

「K君って頭が切れる子ね、何かこう途中で言いかけて止めるのは、いろんなことに自分なりの
考いかやり方を言いかけては、自分はまだ新入生だから～～～と、自分に言いきかせてやめ
るみたいなの～～～。」

とKの聡明さを家内の立場から見事に言い当てていた。

1981.4.10 S**81

S(**80)が炊事当番で S(**81)が牛乳取り兼炊事手伝い、「2人の話のやりとりがとても面白いのよ
～～」と家内が笑いながら言っていた話、「S(**81)もよく言うわ～、上の教室に上がれなかったの
は自分が出来ないのではなくて、なんか別の理由があるからだって言うの！。自分が国語に弱い
ということは絶対に私には言わないのよ～大したものだわ～」それはもう S(**81)の精一杯のプラ
イド！。

1988.4.15 Y**128

初めての炊事なのによくやっている Y に皆ほうっ！と見直している気配。

Y(**128)自身も自信をつけているらしく、炊事場で家内になんでも喋るらしい。

○おじいちゃん、毎日ウィスキーをコップで4杯以上呑むんですよ、

○おじさんはそれ以上呑みます、35才でまだ独身なんですよ、僕はとっても可愛がってくれるけどあの人、アル中ですよ、

○先生の眼力で父さんを探して下さいよ、あの人(父)と会って、僕の方からあの人と縁を切りますよ。

1988.5.15 Y**128

昨日がっちり僕に怒鳴られてしゅんとしていた Y(**128)だったが、

◎炊事当番

になって俄然明るく饒舌になったのにはいささかびっくりしている。「それはよく喋るのよ～～」とは家内の話。

1988.5.21 Y**128

今日で Y(**128)の炊事が終わった。「Y 君の明るいのはびっくりしたわ！それと物をよく知っていること、よく喋ること、自慢すること、なんだか別な Y 君を見た思いよ！」とは家内の話。

1988.7.19 Y**128

炊事をしながら家内に「僕の母さん(2人目の)ひどいさ～～、1日1回おにぎりだけだったんだよ、夜だけは父さんが居るからちゃんと食わせるけどね～～」「このまま暮せば殺されると思ったから僕の反抗始まったさ、その母さんの赤ん坊(異母弟妹?)ばばんばんいじめたさ～～」「僕は17才の時に生んだ母さんば絶対探すよ！」

1989.6.16 S**139

家内、しんみりと話す。

「S(**139)君のこと、少し分かって来た様な気がするの～～。

炊事をしながら父さんのことを話すのよねい。

麦飯が好きだったこと、醤油入りのタマゴ焼きが好きだったこと、ぽつりぽつりと話すの～」

炊事場での家内との語らいの中から S が変わって行くかも知れない予感。

1989.6.17 S**139

...

◎炊事終わった。

「芯からつかれたわ」

とは家内の感想。

1989.6.24 S**139

×ポスターを描いている時に炊事場に顔を出しては自分の好きな物を好きな様に盛りつける様に炊事に(S**130)に指示したり、ポスターを描くのに W(**137)をこき使いながらの威張り様が頭に来て家内が大声で注意したら猛然と反抗して来たとか。つかみかからんばかりに口答えして来て家内は夜になっても蒼白になっている。

「S(**139)君を絶対に炊事当番にさせないで下さいね！」* 大書し、8行で強調—引用者。

うんうんと頷きながら、特別に S(**139)に僕からは言わない事にしようと思う。僕と家内と S が

3人で熱くなっているのは収集がつかないから～～。

それにしてもこの家内とSの烈しい衝突は後々まで長く尾を引きそうな気がする。

2)風呂当番

1966.12.16 S**4

今週はこの子の風呂当番なのだが、午後からの作業でどんなに雪でぬれて来てもすぐ風呂の火をたくにとりかかる真面目さがほんとうに嬉しい。「S(**4)さんって、自分の責任ということをちゃんとやる点では、今の石上館で一番でないかしら～？」と、家内もすっかりSびいきではある

3) 買い物

1971.9.18 K**13

午後から家内と2人、最後の買物をする為に遠軽の町へ行って来る。にこにこしながら家内の後をついて歩いての2時間、「チャシューメンをととても美味しそうに食べたのがとても嬉しかったの」と、家内もまた嬉しそうに話していた。「淋しいでしょK(**13)！」(家内もとうとう最後までKと呼んで卒業だ)と家内が言ったら、「うん、なんだか卒業したくないよ」とにつこり小さく笑っていたとか。卒業したくない訳はないのだが、不安なのだらうきっと。

1973.1.27 I**33

(前略)

○午後、家内と2人町へ買物に行ってくる。「レストランで食ったホタテカレーライス美味かった」と、にこにこしながら報告に来ていた。

1971.3.9 K**16

いよいよ明日去って行く。午後から家内と2人遠軽の町へ買物にいそいそと出かけて行ったのだが、町ではとても嬉しそうに家内の後について歩いていた由。中華どんぶり食べたいよ～と言ったので食べさせたら、とても喜んで食べていたとかで、家内もなんとなく楽しそうな表情で帰って来たのだった。

(以下略)

1973.4.14 F**34

午後から、**家内にもなわれて町へ買い物**に行ってきた。生徒が順番で行く最も楽しみなことの一つだけに、F(**34)はもう朝から嬉しそうにしてそわそわしていたのだが、一緒に行った家内もY(**27)も閉口する位に、生協ストアの中を走り廻ったり、信号無視して道路を横断したり、Fにはほんとに楽しい1日だった様である。

4) 川遊び、運動会

1968.7.7 O**8

今日は日曜、(僕は午後3時まで北見に言って来て不在)待ちに待っていた川遊びが解禁になり、早速釣り道具を持ってシャナフチ川に一目散にかけて行ったO(**8)だったが、4時半頃に大きいのは15cm位のから、小さいのは4、5cmのものまで、大小とりまぜ20匹あまりをバケツいっぱいの水を入れて、にこにこしながら帰って来たのだった。家内が先頭に立って、O、H(**12)、N、S(**15)などの面々が小さな池をつくり、その中にはなして、わっと歓声を上げて喜んでた。去

年の夏も魚釣りばかりしていた O だったな！

1989.6.21 K**131

25 日の運動会に向けて気分はいよいよ盛り上がって来た。どの種目にも自信をのぞかせている K(**131)、「今年は僕はやりますよ！」と意欲満々、家内は仮装にも K と考えているらしく、どんな仮装にしようかと衣装をあれこれ思案し始めている。

1989.6.23 K**131

運動会の練習、梨の間引きと忙しい日が続いている。明後日の運動会の仮装コンクールに出場するのは K(**131)とし、◎花笠音頭の仕度を家内が整えている。「恥かしいな～」と言いながらもやらないとは言わない K、今夜は口紅までつけての花笠娘にきれいに変身しての練習を繰り返している。

5) 雑談

1967.7.60**8

「O(**8)さんって とっても面白くなってきたわよ～」と家内が笑っていた。何んでもはつきり言うようになってきたし、大きい子への批判などもきちんと言うのだそうである。「T(**2)なんてね、ずるくてね、小さい者にばかりテーブルをふかせているんだよ。」と堂々と言っていたそうだが、T ってのはいけない奴だという事を改めて考えさせるのだった

1974.3.19 I**33

家内と 2 人並んで立って、

「奥さんと僕とどっち大きいかな？」（下線は原文ママ —引用者）。

と僕に判断を促す I(**33)と、にこにこ笑いながら立っている家内とをつくづく較べて見て、I の方がわずかではあるが家内より大きいことをしみじみと確認してから、

「I の方が大きいぞ！」

と大きな声で言ったら、どうだ！と言わんばかりににっこり笑っていた。

I 150.2 cm

家内 150.0 cm

という 2 mm 位の差で、I が家内を抜いた今日は記念すべき日である。

6) いたずら

1973.2.5 F**34

今日は平和山登山、83 人と全部の先生が登りきっても、F(**34)だけが仲々登って来ない。あちこち遊びながら道草くいながら登って来たのに違いのないのだが、そのままにしておく。仕様のない奴だ。

しかし、家内は、「どんなにくたらしいいたずらをして、F や I(**33)なら可愛いいわ」と言い、僕もそう思う気持 5 分の 4 はあり、「甘いなあ」と思いつつ、ついそのままにしておく事が多いのである。

7) 傾聴と理解

1967.10.11 S**5

「おくさん！母さんって子供を育てるのに大変なんだよね！僕ね、小さい時にね、ハシカだかや
ってさ、たいした面倒かけたんだって！」と、炊事をしながら家内にしんみり言っていたとか～
で、「S(**5)さん、とっても母さんのことを思いだしてるみたい～」と、家内がしきりに同情して
いた。

1968.3.4 S**5

静養室から軍手が1双なくなった。様々の物品を置いている静養室に鍵をかけなくなってから 1
年、いまだかつてこんな事故がなかっただけに、僕は勿論、寮内大きなショックを受けたのだっ
た。そして、その盗ったのが S(ただし**5 ではない—引用者注)だとわかった時の驚きとかなしみ、
ぼくはすっかりうなだれてしまったのだった。信じていた者の盗みだけに、暗たんたる思いに沈
んでしまったのである。そんな僕の様子を見て、炊事場で、S(**5)が家内に「先生、むっつりして
いて面白くないな！」と淋しそうに言っていたそうである。

1975.11.5 S**45

発信 (姉へ)

○姉さんに更に手紙をだす。

岩見沢児相 門馬先生 (手配の婦人相談員) より電話

「2、3日前に父さんと最近結婚した継母さん、父さんの働らいている**さん、姉さん等が一
諸に相談所に参りまして、S(**45)君の岩見沢職訓入りについていろいろ話し合いました。その結
果、相談所としては次の様な感触を得ました」

(職訓入りについて)

- ① 保護者と周囲の人が非常に熱心であること。
- ② 学資その他の経済的な面も心配ないこと。以上から、岩見沢児童相談所としては、隆君の職訓
入りについては賛成いたします。

この電話を嬉しく受けてから、門馬先生には

「12 月に卒業させて自宅学習した方がいいのか？家庭学校在学のまま受験した方がいいのかは、
にわかに即断できませんので、家庭学校としても今しばらく種々の角度から検討して、改めて卒
業の時期についてご連絡したいと思います。」

と話して電話を終る。電話が終わった後、S 君呼んで以上の経過を話したら、安心した様になっこり
笑っていた。岩見沢職訓入りについて、姉さんや継母さんが、父さんが、どの様に動いているのか
いないのかじりじりしていたらしく、2、3日前家内に

「僕は、父さんのほんとの子供なのかなあ？ほんとの子供なら、もっと一生懸命にやってくれる
筈だよ 奥さん！」

などと、おだやかならざることを言っていたというだけに、今日の電話で、S とは又別に、僕も大
きく安堵している。

1976. 2. 14 S**45

～午後から貼付の「卒業に当って」の作文を書き、夜には皆と一諸に最後の日記も書いてくる。

「～1 年 11 ヶ月、そう長い月日じゃないけど、お世話になりました。」

には思わずぽつんと涙をおとしてしまった。1 年 11 ヶ月、ほめることよりは怒鳴りつける方が多
かったなあ S(**45)よ。家内に「なんだか変な気持だよ奥さん！昨日までは卒業したいとばかり思
っていたけど、今はなんだかもう少し d 寮に居たい気持だよ」

と、しんみり言っていたとか。楽山寮から、K、I も来ている土曜の夜、S はどんな思いで家庭学校での最後の夢を見ることになるのだろうか？～

1975.8.6 I**33

！一時帰省に帰りたくない と申しでる *大書し 5 行で強調—引用者
一時帰省が決ってもさっぱり嬉しそうでない I をいぶかしく思って来たのだが、今日
「ほんとに帰りたくないけど、帰らないようにできるの？ 奥さん？」
と、かなり思いつめた表情で家内に言ったというので、I(**33)を呼んでほんとの真意を聞いてみた。
「ほんとに帰りたくないのか？」
「ハイ」
「どうして？」
「なんとなく」
I 大きくなって来たから、家の様々な事情がわかって来たのかも知れないな？
... ..
(無言、なんとなく辛そうな表情)
いづれにしても I の申し出は本気なものと判断し、一時帰省担当の加藤先生にすぐこのことを連絡しておく。
それにしても、帰省したい帰省したいと浮足だっている空気の中で、帰省したくないと思いつめている I の心情にはただ胸のいたむ思いである。
今日の日記には泣いてしまった。

1975.10.22 I**33

自分より新参の者が次ぎ次ぎに先に卒業して行くのが、I(**33)にはいやらしく、
家内に、 ！「僕より後に入って来て早く卒業し、そ奴が卒業生として遊びに来るのが一番頭にくるよ」とぽつんと言っていたとか～～。解るなあ その気持！

1989.6.15 S**139

◎今日から梨の間引き始まる。
いつもの年の様に石上館
の者だけで梨の間引きを始めたのだが、S だけはそのまま山林 2 班 (山田先生) にお願ひする。なんとなく S(**139)には梨の間引きなどは似合わないと思ったから～。
？夕方、S 喉咽から血の塊りが出る。
「僕の父さん、喉咽のガンで死んだんです」(下線は原文ママ)
これは初めて聞くこと、それにしても血の塊りは何だったのだろう？
「風邪気になればたまにはあるわよ」
とは家内の話なのだが～～。

1989.6.16 S**139

家内、しんみりと話す。
「S(**139)君のこと、少し分かって来た様な気がするの～～。
炊事をしながら父さんのことを話すのよねい。
麦飯が好きだったこと、醤油入りのタマゴ焼きが好きだったこと、ぽつりぽつりと話すの～」

炊事場での家内との語らいの中から S が変わって行くかも知れない予感。

◎運動会の練習、入場行進の時の白の騎手が W(**137)、赤の騎手が S になり仲々いい。

8) 応答

1966.11.13 S**5

夜、S(**4)、O(**8)、S(**5)の3人が部屋で小包みを開けて食べていたのだが、そのうちに S(**5)が猫を抱きながら、「おくさん～猫もさ、人間もさ、うまれるときはへそからうまれるのかい～と邪気のない調子で家内に話しかけて、家内もすっかり困ったような顔で、「男の子はそんなこと言わないの～」と、どうやら切りぬけていた。その次ぎの言葉が又面白い。「おくさん～猫っていいね。作業もないしさ～、朝も早くおきなくてもいいしさ～」と言ったら、S(**4)も S(**4)で、「猫は少年院に行かなくてもいいくていいね～奥さん～」と、どっちもどっちのとんちんかんな会話をくりひろげてはカリントをむしゃむしゃ食べていた。

1966.11.22 S**5

炊事場で家内が仕事をしていると、「奥さん～肥った女のひとって たくさん子供うむんでしょ～」とか、「酪農部の豚を殺すとしたら 女の方を殺すの？男の方を殺すの？男の方だったら ああ大きなキンコロついている でっかい奴かい（種豚のこと）？」などと聞くに來るので 家内の方ですっかり赤面してしまうようだ。S(**4)や T(**2)などは、体裁悪そうにそこらに居なくなり、家内はできるだけさっぱりした口調で、「男の子ってそんなこと聞くもんでないんですよ！」と叱っては見たものの、S(**5)は一向に何てことの無い顔で、「ハーイ」と戻ってしまうのでかえってこまってしまうらしい。僕にしたってどう話していいのかわからないし、困ったな？性についての事柄ってのは～と、いささか手をこまぬいて考えているだけだ。

9) 取りなし

1968.9.9 O **8

T(平和寮の寮生—引用者)とのばかり合い（自分のものと相手のものを交換すること。北海道方言—引用者）の一件以来、O(**8)の私物の一切を「卒業まで預かっておく」ということにして、僕の押し入れにしまいこんでいるのだが流石にこの頃になって相当こたえて來たらしく、家内に、しきりにとりなしてくれるよう頼んでいるらしい。僕には、まだ直接言えないのである。

1973.10.11 I**33

今日は I(**33)、F(**34)、K(**35)の小さな古参組を怒鳴りつけた。日直は I(**36)、グランドに行っている S(他の寮生—引用者)、F(**37)を呼びに行って 10 分ばかり待っていた。昼食、僕は一体昼食はどうなったんだ？と食堂に行ってみたら、御飯にはえがむらがり、皆ぼんやり I の來るのを待っている。「馬鹿の様にただ座って、目の前の飯についたはえも追わないのか！」と皆をどなりつけた後、この小さな古参組を呼んで、「小さいからといってもう甘いな！飯にはえがいっぱいといついても追わない様な馬鹿者にいつからなったんだ！」と更に怒鳴りつけたら、しゅんとしてちろこまっていた。家内がしきりにとりなしていたがそのまま怒鳴り続ける。

1975.10.24 I(**33)

今日は冷たい雨、そして1日1日と秋が深まっていく。

鬼さんこちらをしてほんとに楽しそうに遊んでいた I(**33)、M(**47)、K(**50)の3人が、炊事場

と食堂の間にある硝子戸のガラスを割ってしまった。

「ほんとに楽しそうに遊んでいたのだからあまり叱らないで！」

と家内はしきりに 3 人をかばって、僕は黙りこくっている。僕がむっつりと黙りこくっているものだから、3 人共しゅんとして声なく、なんとなく可哀想になってしまった。

1970.5.25 K**16

×！ ○一生県命になっているのはわかるのだが、気分の悪い時の陰険な言葉には、なんともいえない棘があって、居たたまれなくなる様な気分を持っている。今朝はその典型的なもので、**「そんな棘のある言葉でしか小さい者にもものを言わないのなら、畑をつくるのなんかやめてしまえ！」**と大喝したら、皆いっせいにしゅんとしてしまった。今朝の場合、K(**16)、H(**17)、T(**21)、T(**14)の 4 人で県命に味瓜を蒔いたり、ビニールトンネルをかけたりしていて、K が H に「なに ぼやぼやしてんのよ。昨日通りにやれないのか！ほんとにウスノロだな～ブツブツブツブツ」今度は T(**21)に「なんぼ言ってもわからないな、そっちに行ってやれや！」この様な言葉をからっとした口調で言うのなら、それはそれでリーダーとしての重味と解してもいいのだが、むっつりと陰険な調子でやられたらそばに居る者はたまったものではないのだ。K を怒鳴りつけてから、T(**14)、H(**17)、T(**21)の 3 人も呼んで、「K が抜けても畑をつくるのか？」と聞いたら、3 人とも別になんて事のない顔で、にこにこしながら、「K 君が抜けてもつくりますー」と至ってさっぱりと答えたのには、僕の方でちょっと拍子抜けする。そして、この 3 人、昼休みも夕方もいそいそとたのしそうに西瓜を蒔いたりトマトを植いたりして、夕方には暗くなるまで働いていたのだった。一方、当の K は、なんとも手持ちぶさたな妙な立場になってしまって、皆が畑で働いている昼休みも夕方にも、自分のベッドに寝転がって、平本先生から借りて来ているあまり調子の良くないトランペットで、「聖者の行進」を県命に吹いていた。そのなんとなくやるせない様な響きに、家内はすっかり同情して、「K さんを許してあげたら～」としきりに言うのだが、僕の方でもなんとなく言い出し辛くてそのままにしておく。しかし、トランペットの持つ哀愁と、K のそれを吹いている心情とが切なく交錯してなんとなくしみじみとした思いになった夕方ではあった。

この様な言葉をからへした口調で言う
 のなら、それはそれでリーダとしての重
 味と解してもいいのだが、むっつりと陰険
 な調子でやられたら、是非に居る者やを
 奪ったものではなないのさ。

Kは怒鳴りつけから、T(**14)、H(**17)
 T(**21)の3人を呼んで、「Kが抜け
 てた煙を吸うのか？」と問いたら、
 3人とも別になんて事のない顔で、
 こにこしながら、「K君が抜けると
 っくりまずー」と至ってさっぱりと答
 えたのは、僕の方でよくと拍子抜け
 する。そして、この3人、昼休みも夕
 方もいそいそと楽しそうに両域を晴
 たりトットと廻ったりと、夕方には暗
 くなるまで効いていたのだった。一方、
 当のKは、なんとも手探ふさな妙
 な立場になってしまって、皆が煙で効
 いてる昼休みにも夕方にも、自分のベッ
 ドに寝転がって、早坂先生から借りて来
 ているあまり調子の良くないつラニペッ
 トで、「聖者の行進」を県命に吹いて
 いた。そのなんともなくやるせない様な
 響きには、家内はすっかり同情して、「
 Kさんを許してあげたら〜」とし
 きりに言うのだが、僕の方でそんな
 なく言い出し辛くて、そのままだと
 おく。しかし、トラニペットの持つ哀

資料3 寮生(K**16)についての日誌

寮生(K**16)とその寮生を「大喝」する寮長との関係を取りなす。そのKについては、一昨日にあたる5月23日の日誌に「石上館10人、そ菜部10人計20人の中心としてきびきびと働いていたKの仕事ぶりが特に鮮明に光っていた」と記していた。その前日の22日も、「午後からそ菜部で西瓜を蒔いたのだが、農薬を撒いたり、紙テントをかけたりして、一生懸命に働いていたKの姿が今日は光っていたな。特にほめておこうと思う。ここだけで〜」と記述していた。そうした期待があったただけに、作業する仲間に対する「陰険な言葉」遣いに、藤田は立腹した。なお、このKという寮生は『もうひとつの少年期』にとりあげられている「島田」である。

10) 看護

1969.2.21 K**16

○首に4回目のおできを出している。去年の11月に入校

以来、首とかふとももとかにおできが治ってはで、治ってはでして、して、ずっと続いているのである。ニキビとはちがうし、どこことなく暗い不潔さが感じられてあまりいい気分ではない。家内は、「先天性梅毒ではないかしら〜」と心配しているのだが〜。

1972.10.12 I**33

Iの顔がタムシになってきた。大したことはないと思うのだが、今のうちに治そうと家内がせっせとオロナインをつけている。

1980.8.20 S*81

家内が一晩付き添ったかたちになってしまった中で、今日 1 日時々咳ごみながら寝ているが S(**81)可哀想で仕方がなかった。通院させなくてもいい感じなのでそのまま寝せておく。早く丈夫になれ！S。

1980.8.21 S*81

今日からすっかり元気になる。「起きるよお！！奥さん！！」

と言いながら、今日は元気に起き、皆と一緒に草とりをし、午後からは楽しそうに皆と一諸に草とりをし、午後からは楽しそうに皆の真似をして木彫をしていた今日の S(**81)だった。

1980.8.24 S*81

今日一日寝たきりの S(**81)が、淋しそうにぽつんと、「せんせい、奥さんいつ帰ってくるの？」と尋ね、22 日から 25 日まで法事で帰郷している家内が、居なくて、ほんとに淋しそうにしている S を見て深く申し訳ないと思った。そのにくたらしい口のきき方の故に、ややもすれば皆からうとんじられる事が多くなっている S は、家内を頼りに暮してる一面があることをなんとなく感じているだけに、家内の帰りを S ともどもにしみじみと待ってのまずは前夜である。

1980.8.25 S*81

○家内が函館から帰って来た。

様々な事があった今日の一日、誕生会ではほんとに楽しそうに沢山の御馳走をたいらげ、夜 8 時半すぎには家内が帰って来て、「奥さん！お帰りなさい！」とにこにこしながら迎えていた S(**81)の顔がほんとに嬉しそうだった。その憎まれ口と毒舌の故に皆からうとんじられている S の唯一の救いが、どうも家内の優しさにある様で、今しばらくは家内と S のつらなりをじっと見守りたいと思う。皆と S が気持ちよくつらなれる様になってくれば、いつ迄も家内に甘えることはないと思うから～。

○夜中に小発作（家内が 2 時間付添う）

1980.8.26 S*81

○通院（笹小児科）やはり、ぜん息と診断

たしかにぜん息だ！しかし、どこかに甘えがあるなあ～（僕や家内の足音がするとにわかに咳ごみが烈しくなる）

1980.8.28 S*81

○薬がなくなったので通院。（笹小児科の話）

「今は全く正常の健康人にもどっています～との事です。向川先生のお話」

「S(**81)よかったなあ！」

「僕もそう思います・・・ヘッヘッ・・・」

なんだか僕と家内の方がぜん息ノイローゼ気味だよ S！早く元気になって、トローンボーンを吹いて聴かせてくれよ！S！

1975.4.30 S**45

午後から全校で平和山へ薪だしに行って来る。S(**45)は土木部では大きな方だけに、頑張らなければならないこともあって、次ぎ次ぎに大きな薪をかついで、僕と行き交う度ににやりと笑っていた。寮に帰ってから「奥さん、こんなに肩が腫れる位に頑張ったんだよ」と、肩をはだけて見せながらサロンパスを貼らせていた。

生徒による日記（S**45）

…作業班で全部の班で山の薪出しをしました。各班ごとにまとまってやり、他の班はバチやロープを使ってやっていたけど、土木部は一人一人運び、最初は多少重い木でも運べたけど、何回か運んでいると肩が痛くて、運んでいても途中で我慢出来なくなり落としてしまったりしました。それでも我慢して何回も、運びました。でも運んでいる時は痛くて泣きそうになるぐらいで、肩は赤くなってしまったけど、これこそ仕事をやったという証拠であり結果であると思う。

以上、寮母セツ子が石上館の寮生の一人一人に対して、寮生活のさまざまな場面で示したかかわりの諸相を寮長の日誌記述から抜粋しながら明らかにした。ここにとり上げたのは、147 名中一部にすぎないが、そのかぎりでも、一定の傾向性を特質として把握できるだろう。

第一に、寮生活について。炊事場、風呂当番、買い物、雑談、いたずら、寮長からの叱責に対する取りなし、寮生からの心の打ち明けに対する傾聴・理解、そして看護、などの諸場面で、寮母として藤田セツ子は寮生一人一人とかかわっている。平均的な家族生活の諸要素を含む形で、「生活を共にする」という日々の実践としての基本的特質が示されている。生活の隅々までという意味では「細やかに」（檜原真也）共にしている。

第二に、生活のなかでの炊事場でのかかわりについて。その「生活」は、藤田日誌での記述内容で把握するかぎり、寮内外でも、「炊事場」でのかかわりがその量において他の場면을圧倒している。「炊事場」を中心とすることによって、「家庭であること」という体験を濃厚に提供している。「今日も一生懸命に炊事している」という寮長の記述とともに、「家内の話」「家内の評価」ということで、炊事の状況について寮母は伝えている。「初めてとしては 90 点以上ね」（1967.4.10 O**8）、「きちんとした食事をして来たらしくカレーライスでも野菜サラダでも、ちゃんとした作り方を知っているの」（1979.8.26 M**75）と、寮母は寮長に語っている。炊事は、たんに担当した個人のためというのではなく、自分を含む十数名の寮生全体のためという当番活動であり、寮全体にとっての公共性を実現する。しかも担当できるということは寮長寮母からの信頼を勝ちとっていることの証明であり、本人にとって名誉でもある。「結構楽しそうにいきいきと働いています」という谷校長の証言を具体的に裏づけている。

第三に、「炊事場」でのかかわりの諸相について。炊事を担当する寮生の炊事そのものの務めぶりがどうあったかが寮長と話題になることは当然であるが、それ以外にも、炊事を通じて、寮生の生活上、あるいは入校前の家庭生活上のさまざまな出来事、課題にかかわる一人一人の語りかけを寮母はうけとめている。「学校の事でも、寮の生徒の事でもなんでも言うの」（1976.11.1）という証言は、一寮生（A**56）についてのものであるが、けっして少数の例外ではない。

「O さんって、仲々いいずらいことをびしゃりと言うの」（1967.10.31 O**8）といった個性的な性格のこと、「母さんが呑屋に働いていたので、毎晩酒ばかり吞んで酔っぱらって帰って来て遂々父さんがたまりかねて、出て行け！と怒鳴ったら出て行った」（1968.10.21 S**5）という内情のこと。「A 君、面白いのよ。学校の事でも、寮の生徒の事でもなんでも言うの。」（1976.11.1 A**56）、「S もよく言うわ～。上の教室に上がれなかったのは自分が出来ないのではなく、なんか別の理由があるからだって言うの！」（1981.4.10. S**81）、など寮生からの率直な語りを寮母は炊事場でうけとめている。

その内容は、立ち入った事柄を含んでいる。「岩見沢職訓入りについて、姉さんや継母さんが、父さんが、どの様に動いているのかいないのかじりじりしていたらしく、2、3 日前家内に「僕は、父さんのほんとの子供なのかなあ？ほんとの子供なら、もっと一生懸命にやってくれる筈だよ 奥さん！」

などと、おだやかならざることを言っていた」(1975.11.5 S**45) という記述、あるいは「僕の母さん(2人目の) ひどいさ～～、1日1回おにぎりだけだったんだよ、夜だけは父さんが居るからちゃんと食わせるけどね～～」「このまま暮せば殺されると思ったから僕の反抗始まったさ、その母さんの赤ん坊(異母弟妹?) ばんばんいじめたさ～～」(1988.7.19 Y**128) が示すように、内面の奥に抱かれています。思いや家族関係の語りに対して、寮母セツ子は傾聴している。

自分の「反抗」理由を打ち明けている後者の場合、少し前に寮長によって指示された作文「自分の家族」(7月14日)のなかで、次のように記していた。「幼い時から父さんと二人の生活が多かったのが今になって他に誰もいなくてもどうという事は、無いように思います。自分が父さんから自分の母親は、自分が幼い時に自分を家に置いて逃げたと聞いたのがちょうど中学一年の時でした。だからつい最近まで一緒に生活していた母親は、本当の母親で無いという事を知りました。今でも本当の母親に会いたい気持ちはありますがそれは、自分がきちんとした社会人になってから自分で会いに行きたいと思います。そうなる為にもここでの生活をきちんとして行きたいです」。自分はなぜ「反抗」したか、その理由を寮母に語ったこの寮生は、「きちんとした社会人になって」実の母親に会いたいという思いを記し、寮長に伝えていた。炊事場で寮母に語ったことは立ち入った内容で口外できない事柄であるが、鬱積した思いを単に表出するというのではなく、立ち直りの姿勢を伴っていたことが注意される。

その一方、かかわりの難しい寮生に対しては、理解できたどうかは不明であるにしても「同情」しようとする働きを示している。「家内、しみりと話す。「S君のこと、少し分かって来た様な気がするの～～。」…」(1989.6.16 S**139) と寮母は語っていた。

いずれにしても、炊事場という寮生仲間から少し距離のある場で、寮生たちは、日頃抱いている不安を寮母に語り、うけとめられている、という心情を抱くことができたであろう。内側に隠された心(情動)は、和らぐ形で調律されているといつてよい。谷昌恒校長が寮母の役割に対して指摘するような、「温かい甘やかな雰囲気」にかかわっている。親密性をそなえた私的空間でもあることを示している。取りなしの事例(資料3)も、そのような親密性に支えられている。

第四に、「生活を共にする」行為の関連構造について。この場合に、それぞれの場面は個々の寮生と寮長夫妻、寮生間の出来事として成り立っているが、それぞれの場面での寮生に対する寮母のかかわりを一つの集合的な全体として捉えるならば、2つの点で着目できる。第一に、炊事場の両面性ということ。親密な雰囲気のなかで、内密にしている心を打ち明けられ共感的に傾聴するという私的領域に属している。と同時に、炊事当番を通じて寮全体のために役割遂行することで、社会的観念(留岡幸助)を培うという公的領域に属している。第二に、一連の行為として把握できる。すなわち、病状に対するケア、精神的不安の思いに対する傾聴、といった課題解決にかかわる配慮がある。「看護」「同情」の働きがここに見出される。ケアといつてよい。寮長からの叱責後の取りなしといった生活指導、そして、役割課題の達成にむけた人間形成上の導き、といった行為が続いている。ここには、ケアの領分を越えた一連の行為が見出される。マイナスの臨床的な領域から零の健康状態に回復するだけではない。プラスの次元にむけた働きかけをとまなっている。人間のあり方について、どう積極的に価値実現するか、という目標にむかう働きかけが示されている。その場合、自然的な人間形成ではない。意図的なかかわりを通じての行為である。当事者たちの認識のいかんは別として、法制度ではなく、学問上定義される概念でいえば、明確に教育として規定できる。寮母藤田セツ子の寮生に対するかかわりは、こうした垂直的な一連の段階と、それらをふまえた行為が構造として成り立っている。

石上館寮母セツ子が寮生一人一人に対するかかわりは、「炊事」を主としながらも以上のような諸相

を示していた。それらは「生活を共にする」という集合的な全体として把握することができる。

5. 寮母藤田セツ子の「家庭であること」の実践の特質

—卒業する寮生に対する寮長藤田俊二の所見と関連づけて—

寮母藤田セツ子の寮生との「生活を共にする」というかかわりは、「家庭であること」の実践のなかで一部にとどまっている。「家庭であること」のなかには「家庭的養護」そのものではない部分も含まれるだろう。年齢の幅、経験年数のちがいのある寮生同士の関係もそうである。その点も一寮長、寮母とは別に、新参者を世話する役割が与えられた先輩寮生を「親」と称して、擬似的に「親」の存在を意識化させるなど—「家庭的生活」（留岡幸助）の意義を認識するに際して重要であるが、ここではふれない。以下では共同生活する寮長とのかかわりをとり上げよう。そのうちで卒業する寮生に対する寮長の所見、とりわけ成長の足跡に関する寮長の認識と期待も視野に入れて、寮母藤田セツ子の「家庭であること」の実践がどのようなものだったかを捕捉的に検証しよう。その場合には、現今の「児童自立支援施設運営指針」等が示す「保護」「ケア」「教育」の基本構造に関してどのような特質を示していたかに参照視点として注意をむけたい。

児童養護施設での実践をふまえ、檜原真也は『子ども虐待と治療的養育』（2015）において「治療的養育」という概念を定式化していた。その概念はより広義には「ケア」に含まれるものとして記述されている。この「ケア」についてとくに定義されてはいないが、同書の記述を参照して、より限定的に、家庭内での虐待経験、あるいは、それに近い経験、によって深い心の傷を有する一人一人の子どもを想定して物理的、身体的、心理的に世話する行為を「ケア」と呼んでおこう。その意味での「ケア」の行為は、寮母セツ子の寮生一人一人に対する実践と重なる。

まずこの基本的な性格を有することを確認しておこう。そのうえで、現今の児童自立支援施設における小舎夫婦制のあり方との関連の問題にふれておこう。

新藤らによる実証的成果（2016）では、「家庭的支援の必要性は自明でありながらも、その内容は必ずしも明らかにされているわけではない」とし、教護院時代より以上に「家庭的養護」が推進されている、と指摘されていた。新藤らは寮長、寮母 14 名にヒヤリングし、その一項目として「寮舎運営において大切にしていたこと」を調査した。その結果、「一緒にいる、そばにいる」、「優しさ、温もり」、「遊ぶ」、「怒る、叱る」、子どもたちを「育む」こと、「共同」に関することとして整理できる項目が報告されている。また、こうした整理のうえで、寮運営で大切にしてきたことのうち、「家庭的支援として外せないと思うこと」について、厚生労働省の「児童自立支援施設運営指針」（2012）の整理（食生活、住生活、衣生活、健康安全、行動上の問題に対する対応、心理的ケア、など）にしたがってその具体的事例を挙げている。

こうした調査研究で明らかにされる現今の児童自立支援施設での「家庭的支援」と対比して、本稿が明らかにした 1960-80 年代の北海道家庭学校の寮母藤田セツ子の寮生に対するかかわりは、どのような異同、特質があるだろうか。

1)「寮舎運営において大切にしていたこと」としてヒヤリングで寮長、寮母によって、語られていることと、寮母セツ子の実践は、前者は「大切にしていたこと」と、後者は経験的事実でかならずしも一致しないが、普通の家庭で共有されている「一緒にいる、そばにいる」という基本要素を含むもので、同じ質のものといってよい。

2)「自立支援」を支える「家庭的支援」について。両者は、小舎夫婦制の実践的事実をふまえている。

調査研究では、この小舎夫婦制がケアの形態としては存続が危ぶまれていると現状にふれつつも、「より家庭に近い」ということ、それによって、寮生に「家族モデル・夫婦モデル」を示せること、こうした提示によってその必要性、重要性は薄れていないと指摘する。こうした「家庭的支援」のための「工夫」として、調査研究では、「寮長・寮母の役割分担」にも着目し、「実夫婦が寮長・寮母を担うことにより、お互いに「全幅の信頼」をしながら、子どもへの対応が「大きく食い違って争うこともなく、一方で厳しく注意する「父親的役割」、優しく気遣いする「母親的役割」のような役割分担が存在していた」と指摘している。こうした現状は、寮長藤田寮長、寮母夫妻の場合にも共通する。

3)「自立支援」を支える生活の基本構造も等しい。新藤らのヒヤリングで明らかになった寮生に対するかかわりは『児童自立支援施設運営ハンドブック』(2014;平成26)での説明に即せばi)「生活の中の保護」、ii)「生活の中の治療」、iii)「生活の中の教育」の三側面で捉えられる。寮母藤田セツ子の寮生に対するかかわりも概ね—「児童自立支援施設運営指針」(2012;平成24)に即して「生活の中の治療・心理的ケア」と修正した形で—その側面で説明できるであろう。であるとすれば、家庭学校寮母藤田セツ子の寮生に対するかかわりは、今日の家庭的支援の先駆的事例といえる。本稿では、石上館寮母をとり上げたが、家庭学校の他の寮母でもその点は共通するにちがいない。

そのように予想したうえで、「保護」と「治療」と「教育」の部分について、より立ち入って分析すればどうか。寮母藤田セツ子のかかわりは、現今の児童自立支援施設の基準に照らして単に先駆的にすぎないのかどうか。その部分を含みながらも、固有の来歴を有する北海道家庭学校の寮母であるという事情を重んずるならば、現今の概念的基準に照した場合には、なにほどの隔たりがあるのではないか。この点を実証的に検証しよう。本稿の主題にとって中心的に重要である。

その際、二つのことに留意する。一つは、彼女のかかわりをそれ自体単独で捉えるのではなく、留岡幸助の「家庭的生活」認識と関連づけながら、協働する全体として構成的に捉えることし、そのうえで、藤田セツ子の寮生に対するかかわりの特質と意義を解明する。もう一つは、現今の基準として、上記ハンドブックが示す基準のみならず、檜原の著書(2015)—児童養護施設の子どもたちを主に対象にしていることに注意しながら—「治療的養育」の概念がどこまで有効に適用できるかも考慮する。

3)・i)「生活の中の保護」について

「治療的養育」の概念では、食事、入浴、睡眠、衣服、学習などにおいて細やかさに配慮した「生活を共にする」ことが重んじられている。この点も、家庭学校での寮母の寮生とのかかわりと共通する。

「三能主義」55)として同校の方針として、したがって石上館の藤田寮長・寮母の実践においてもうけ継がれてきた部分である。

3)・ii)「生活の中の治療・心理的ケア」について

留岡は「教育の基礎は身体に在り」との見地から健康管理のため、「炊事場」(食事)とともに、「浴場」を重んじた。その際、身体に対する配慮に加えて「精神」の病理に対する配慮も重んじていた。このことに関連して、留岡は「身を以て彼等を率ひ互いに喜憂を頒ち」ということを求めた。その基盤には、「同情」働きが期待されていた。寮生の一人一人の個別の事情を理解し、ともに喜ぶということ、そして、それ以上に、「苦しむものと共に苦しむこと」(「苦痛の賜」1912;大正元)が「母」たる者にとって本質的に重要な資質であると、留岡は論じていた。寮母藤田セツ子は、その期待にどのように応えていただろうか。さきに、かかわりの諸相の論述で、その一端(炊事場、傾聴・理解)にふれた。以下では、その部分を掘り下げてみよう。

事例 1 :

1967.2.21 S**5

今日で子供向きマンガテレビ映画「遊星仮面」が終わったのだが、最後のシーンで遊星仮面が幻の母さんに初めて会ってなきだしたら、S(**5)が下を向いてポトンと涙をおとしたとかで、ちょうどすぐそばに居た家内が、いささかしんみりした気分になって 僕に話していた。涙ぐましいひとつのエピソード、もっとも S らしい可哀想なエピソードである。生みの母さんをどんなに見たいだろうか？。

1967.11.7 S**5

「S(**)さんね、父さんから小包が来なくなったという事の訳を知る様になってから、とてもしっかりしてきましたよ。靴下なんかも、ボロボロのを先にはいて、新しいのはちゃんとしまっているの～」と、家内が感心しながら言っていた。不幸をこの子なりに受けとめているのだ。けなげな心根が尚更に心をうつのである。

事例 2

1975.5.21 S**45

I(**42)と H(*44)が日毎に親しくなっていくのが隆には愉快ではないらしくて、I と H が親しそうにすればする程、S(**45)はわざとそっぽを向いている感じがする。

S の狭量も少しは感じられるのだが、S と皆との溝の幅が段々広がってくのは、S が 1 人に 1 人になっていこうとしている孤影のみなもとの中に、I との冷めたい反目があることを充分理解しておかなければいけないと思う。

1975.5.22 S**45

今日もなんとなく淋しそうな S(**45)である。その様に見るからその様に感じられるのかも知れないが、S の孤独は日を追って深まっていく様な気がして、可哀想でならないのだ。家内は「S も悪いと思うのよ、自分の方から皆から離れよう離れよう～という気持ちもあるんじゃないかしら。S 自身も、もっと大きな気持ちをもって皆と暮す様に考えれば、I 君との対立も別な面から解決できる道があると思うの」と言っていたが、これは確かに S の一面を鋭く衝いている。

事例 3

1979.8.10 F**74

夏期帰省

○帰省 (11 人) …

○残留 (1 人) …

○藤田は、岩見沢児相組をともなって、午前 6 時 45 分に寮を出る。

以下は、家内の話である。

「F(**74)君ね、誰もいなくなった寮内をあっちへ行ったりこっちへ行ったりして、しまいには自分のベッドへごろんと寝転がって天井を見上げていて、私がジュースを持って行ったら照れくさそうに受け取って飲み、9 時頃父さんが来るまでいらいらしているみたいだったわ。父さんが恐縮した様に来られたのが 9 時頃で、F 君ったら何んにも言わないでべろんと立って迎え、にこりもしないで応接室で 1 時間あまり話し合ってから、むっつりした顔で父さんと並んで帰って行きましたわよ。父さんは、F と東京でゆっくり話し合いますと少ししょぼんと言っていました。帰った後ベッドを見たら、自分が一番大切にしている物は全部大きなバッグ 2 つにつめて持って行

きましたから、もう来ないつもりなんでしょうね。」

以下は、家内の話である。
F(**74)君ね、誰も居なくなつた寮内をあち
へ行ったりこちへ行ったりして、しほには
自分のベッドへごろんと寝転がって天井を
見上げていて、私がジュースを持って行つた
ら照れくさそうに受け取って飲み、
9時頃父さんが来るまでいろいろし
ているみたかったわ。
父さんが恐縮した様に來られたのが
9時頃で、F君ったら何んにも言
わないうでべろんと立って迎え、にこり
ともしないで応接室で1時間おま
り話し合つてから、むっつりした顔で
父さんと並んで歸って行きましたわよ。
父さんは、Fと東京でゆっくり
話し合いますと少ししほんと言
っていました。
歸つた後ベッドを見たら、自分が一番
大切にしている物は全部大きなバッグ

資料4 寮生 F(**)についての日誌

夏期帰省を前にした様子について寮母藤田セツ子が語ったことがそのまま記述されている。帰省の期間中のこの寮生についての日誌には、「8.11～8.16 どうしているだろうか？」とのみ記されている。8.17 の日誌には以下の通り記述されている。「昼 母さんと一緒に、再びやって来た。(少し照れくさそうに、大きなバッグを持って。) F がこんなにもさっぱりした顔で帰ってくるとは思ってもいなかっただけに、胸にこみ上げてくる様な感動が走った。嬉しかったし、僕は黙って F の肩をつかむだけだった。樂山寮から M が帰ってくるのは夕方 4 時、その後次ぎ次ぎに帰ってくるのを迎えるのに忙しい僕と家内に手伝って、炊事を手伝いながらせつせと風呂をたき、その懸命な姿には又もうひとつのひたむきな真面目さが感じられたのである。母さんには、1 時間後にすぐ帰ってもらったのだが、みあげる様にして涙をふきながら話して下さった母さんの言葉と様子には家内がもらい泣きしていた」。この F という寮生について藤田俊二は、その年の 10 月 23 日の日誌で、黙々と一枚一枚「落葉取り」する姿を印象深く記述していた。拙稿 (2023) 参照。

事例 4

1980.8.24 S**81

今日一日寝たきりの S(**81)が、淋しそうにぽつんと、「せんせい、奥さんいつ帰ってくるの？」と尋ね、22 日から 25 日まで法事で帰郷している家内が、居なくて、ほんとに淋しそうにしている S を見て深く申し訳ないと思った。そのにくたらしい口のきき方の故に、ややもすれば皆からうとんじられる事が多くなっている S は、家内を頼りに暮してる一面があることをなんとなく感じているだけに、家内の帰りを S とともにしみじみと待ってのまずは前夜である。

1980.8.25 S**81

○家内が函館から帰って来た。

様々な事があった今日の一日、誕生会ではほんとに楽しそうに沢山の御馳走をたいらげ、夜 8 時半すぎには家内が帰って来て、「奥さん！お帰りなさい！」とにこにこしながら迎えていた S(**81)の顔がほんとに嬉しそうだった。その憎まれ口と毒舌の故に皆からうとんじられている S の唯一の救いが、どうも家内の優しさにある様で、今しばらくは家内と S のつらなりをじっと見守りたいと思う。皆と S が気持ちよくつらなれる様になってくれば、いつ迄も家内に甘えることはないと思うから～。

○夜中に小発作（家内が 2 時間付添う）

こうした 1～3 事例に示されているのは、一種の共感である。当の寮生の胸中を推察して、共に苦しむ感情である。入校以前、父親と消息不明になった寂しさであり（事例 1）、寮内の生徒同士の人間関係での「孤独」であり（事例 2）、立ち直りが進み、1 週間の「夏期帰省」を翌日に控えて、共に生活してきた仲間、寮長夫妻とひょっとしたら別れの機会になるかもしれない様態についてである（事例 3 資料 4）。それらは、家庭学校で特異なことではなく、どの寮でも寮生一般にも共通する事態であるだろう。そのような事態について、寮母セツ子は、寮生の生活の外形に着目しながらも、その奥に示された内面の心情を推し測り一寮長とともに一その辛苦の思いに共感している。事例 4 は、そのような寮母との絆をより堅固なものにしたいという寮生の思いが「お帰りなさい」ということば示されている。それは応答というよりも、積極的な呼びかけに近い。ここにとりあげた事例（1～4）の寮母のかかわりを留岡幸助の「家族的生活」の認識と照らし合わせるなら、それを成り立たせる「同情」認識の実践として捉えることができる。「苦しむものと共に苦しむこと」という共感が、寮母セツ子にも「生活を共にする」ことを通じて働いている 56)。

創設者の認識との共有関係をそのように捉えたうえで、さらに寮母セツ子のかかわりがどのようなものであったか、現代の事例との関連を検討しよう。そのかかわりは、虐待経験のある子どもに対する「治療的養育」の概念（檜原真也）との接近をうかがわせる。「彼らがどれほどの“痛み”を抱えて生きてきたのかを思い巡らせて、そうあらざるをえない必然性を深いところで受けとめてくれる大人の存在によって、はじめて子どもは自分の行為に向きあうことができる」57)と記されている。この見解に、家庭学校の寮母セツ子も一定の留保をつけて同意するだろう。すなわち、日々むき合っている寮生が明確な虐待をうけているのではないにしても、また、そのかかわりが、ここにいう「必然性」に沿った対応として示された①観察とアセスメント、②意思決定、③行動、④終結、という 4 段階を明確な指針として自覚し実践していたのではないにしても、基本的に同意するだろう。「共に生活する」なかで、寮母は寮長とともに、その段階に近いかかわりを実践しているにちがいない。児童自立支援施設運営ハンドブックが示すに枠組み指針でいえば、「生活の中の治療」に近い。医療的行為そのものではないが、共感を通じて心の傷を癒す行為が重んじられている。

このように近似する他方、寮母藤田セツ子が示す寮生とのかかわりと「治療的養育」とを対比するとき、見逃すことのできない距離があるだろう。「生活の中の教育」として括られる領域である。「治療的養育」の場合と比較してはどうか。

3)-iii)「生活の中の教育」について

檜原は、その著書においてライフストーリー・ワークの技法を詳細に明らかにしている。そのうえで、子どもたちが生きてきた過酷な境遇、体験とともに、「施設における日々」について、「事実を分かち合う」「生き立ちを振り返る」「過去を辿りなおす」ことを通じて、「彼らは深刻な被虐待体験や分離・剥奪体験から少しずつ回復し、成長を遂げていく。…それまで施設の内外で培われた良き出会いや楽しい思い出が、子どもの背中をそっと後押し、生きる希望を喚起するものでありたい」と終章で記している。施設で暮らす子どもたちに対するストーリー・ワークの実践が示す意義にかかわる貴重な指摘である。一種のナラティブ・アプローチによって、社会的現実の構成をめざし、子どもたちの「成長や回復を支え」る、と特徴づけられている(58)。人間形成にむけた認識志向は、たしかに認められる。けれども、意図的な人間形成にかかわる積極的な認識は、ここでは展開していない。「治療的養育」というかかわりは、そこまでに限界づけられているといつてよい。児童養護施設を主として想定し、したがって近隣の公立小中学校での学校教育が提供されている事情を考えれば、そのような限界づけは、むしろ自覚的に抑制しようとするもので適切性をもっている。児童自立支援施設運営指針が示す「生活の中の教育」はどうかという問いは、自覚的にか、習慣的にか、このアプローチの領分を越えた形で成り立っていると考えられる。

そのように位置づけられるとすれば、他方、家庭学校寮母藤田セツ子のかかわりは、たとえば、運営指針の「生活の中の教育」の部分が顕著に示されている。寮長藤田俊二と協働しながら、「保護」「治療」の部分を含みながら、より積極的に人間のあり方の価値実現にむけて、寮母セツ子は生活するなかで一人一人の成長を促し、導くようなことば掛けや実践、評価をしている。教護院運営指針において一般に「生活指導」といわれている行為であろう。「生活日課の中での児童の生活全般にわたる指導、たとえば、しつけ・情操の育成・余暇・保健衛生・児童自身にかかわる問題についての個別的かつ集団的な指導」(59)とされる。われわれはその用語の一般的な有効性を認めつつも、藤田に日誌記述に即しながら、寮母セツ子の実践的なかかわりが示す、より実質的な働きを見定めたい。

今日もせっせと炊事場で仕事をしている。ただ、A(**56)の仕事を非常に高く買っている家内が
家内? 「A 君ね、なんにも深い悪気で言っているのではないと思うんだけど、
例えば

(ここにちゃんとついていてね)と鍋かけてから私が言う(さっきから いるでしょ)という
様な返事をするの、慣れて来たからだと思うんだけど、すこし調子に乗って来たみたい〜〜」
と小首をかしげながら言っていたのが気になっている。(1976.7.28 A**56)

・せっせと炊事をしての2日間、家内の A(**56)評に傾聴。

家内 「A 君は言いつけた仕事はちゃんとやるの。 だけど、それ以上の仕事を自分からすすんでやるという所はまだないの。」

もう何ヶ月かすれば すすんでやる A になるよ 奥さん。(1977.4.18 A**56)

・炊事をしていた時の A について、今日も家内が考え考え次の様に話していた。

「聞いても、なんとなく聞えないふりをするの。反抗するとかなんとかではないんですけど、最

初の頃のように素直ではないの～。厚かましい所もでて来たわ～～。(1976.8.1A**56)

・炊事 (3)

今日で一週間分の炊事が終わった。

家内は

「最初の炊事を 10 とすれば、今日の炊事は 5 位だったわ。なんとなく、良さも悪さも出しつくして来た感じなの～～。」

と考え考え話していたが、入校して 2 期目の A(**56)は、たしかにひとつの転機に立っている。

(1976.7.31A**56)

以上のように、寮生が示す「炊事」など生活上の好ましからぬ課題について、寮長に報告している。その一方、以下のような事例も寮母セツ子は、寮長に伝えている。

・炊事が S に変わってもよく手伝っている。薪割りなどの作業が終わるとすぐ手伝う。仕事に対する態度、手付きなど今春卒業していった K 君によく似ている～～とは家内の話 (1966.10.31K**1)

・今日から O(**8)一人で炊事をするようになった。なかなかきびきびしていて潑刺たる感じである。「初めてとしては 90 点以上ね～」と、家内の評価 (1967.4.10O**8)

・家内は「K(**76)君って頭が切れる子ね、何かこう途中で言いかけて止めるのは、いろんなことに自分なりの考いかやり方を言いかけては、自分はまだ新入生だから～～と、自分に言いかせてやめるみたいなの～～。」と K の聡明さを家内の立場から見事に言い当てていた (1979.11.26 K**76)。

以上のように、寮生の取組の態度に対して理解し、肯定的に評価できる事例も、同時に寮母セツ子は寮長に伝えている。

こうした肯定的な評価は単に寮長に報告するのみではない。寮母は寮生に対して対面的にかかわりことば掛けしている

・大切にしまっている自分のセーターを、「S(**5)さん！今のうちにそのセーターを着なければ来年は着れなくなるよ！S さんはどんどん大きくなっているんだから！」と家内に叫ばれて、いたわしように仕方なさそうに、新しい自分のセーターをボストンバッグから取り出していた恰好がユーモラスだった(1968.4.1S**5)。

・今日も一生懸命に炊事している。家内に、「S(**5)さんが一番いいよ～」と褒められるのを一番楽しみにしているらしい (1968.5.22 S**5)。

・今日もせっせと炊事をしている。「今迄で一番だわ、Y(**10)さんの炊事は～、この次あたりからは、H(**3)さんや N(**6)さんと同じ位の炊事当番になるかも知れないわ～と、聞こえる様に聞こえない様にひくい声で言ったら、Y さんったらすっかり上ってしまっているの～～」と、家内が茶目っ気いっぱい口調で言いながら、笑っていた (1968.8.9 Y**10)。

・夕方、牛乳缶を持って酪農部に行ったら 1 時間もして漸やく帰って来たのだった。僕には何んにも言わなかったが、蜂の巣を 1 ケ、大切そうにさげて来て、家内にそっと見せていたそうだった。

(1969.7.2K**13)。

・今日もせっせと雪像を積んでいる。「K(**13)はやっぱり年期だね」と、家内がしみじみ K の仕事している姿を見ながら言っていた。(1970.2.12K**13)

・今日になっていきなり 20 cm の大雪。そんな中を走って牛乳缶とりに行ってきた H**17。

「帰って来た時は奥さんにすごい早いねと言われてうれしかった。早く行って来るというのはとても気持ちのいい事だなあと思いました。」(1985.12.9H**17)。

「どんどん大きくなっている」、「一番」、「早いね」、といったことばが直接、寮生に対して伝えられている。「年期だね」という表現も、寮内では経験年数を上回って熟達している、ということの賞賛を示している。家庭学校職員にも、寮生たちにも通っている。

寮母が寮生に対して示すこうしたことば掛けのかかわりは、どのような特徴だったろうか。

第一に、寮生の成長そのものの姿、あるいは取り組みにむけられていること。炊事、恒例の雪像作り、早朝の牛乳缶取りがその対象である。

第二に、その取り組みを、成長、あるいは人間形成にかかわるものとして賞賛し、評価していること。非行性がとり除かれている、といった消極的な評価ではない。

第三に、その評価は、当の寮生の取り組みに直接にむけられることによって、これからの取り組みを促す指導の働きと一体化していること。

もう一つ、見逃すことのできない特徴があるだろう。寮母は、こうした評価に際して寮長俊二と協働していること。すでにふれたようにその関係性は、対話的な様式において両者間で持続的に確立している。一人の寮生のその日の出来事を詳細に記述している一つの特徴的事例によって、その点を明らかにしよう。

「言いつけた仕事はちゃんとやるの。だけど、それ以上の仕事を自分からすすんでやるという所はまらない」と、一ヶ月前には、セツ子によって課題が指摘されていた寮生(A**56)についてである。

1977.3.2

ス キ ー 大 会

A(**56)は頑張った。*大書し、6行で強調—引用者

今日のスキー大会2日目は、Aの得意な回転、大回転だけに大いに楽しみにして神社山へ行く。回転、大回転ともに、安藤の決して切れのいいテクニックではないのにさっと滑り降りてくる姿には見事な安定感があって、僕は目頭の熱くなる思いでAを見続けたのだった。

正式なタイムと順位は明日にならないと発表されないのだが、惜しかったのは大回転、タイム計測班ではなく タイム掲示板でタイムを記入していただけた僕にも、Aの滑りは10位以内に入るいいタイムだぞきっと！と思う位にきれいな大回転だったのだが、計測班のミスで、その時タイムはとられていなかったのである。

僕は呆然としてその様子を見守っていたのだが、結局、Aは再び神社山へ登って再度大回転に挑んだのだが、その時はもうかなりコースが荒れてきていたのは下から見てもはっきり判り、A自身もかなりかたくなっていたらしく、途中で大きく転倒してしまい、大きくタイムをロスしてしまったのである。

服部さんが大いに憤慨するまでもなく、僕はその場で抗議しようと思ったのだが、ようやくおし

とどまる。

夜に、炊事場で 家内に、

「僕、口惜しいよ！」

とぼつんと言 言っていたとか〜。それはそうだったのだが、計測班に抗議しなかった様に、Aにも一切無言。いつかゆっくり機会をとらいて、

「人生にはそういう事はいっぱいあること。

その様な時には、軽躁にふるまわないで身を持すこと。」

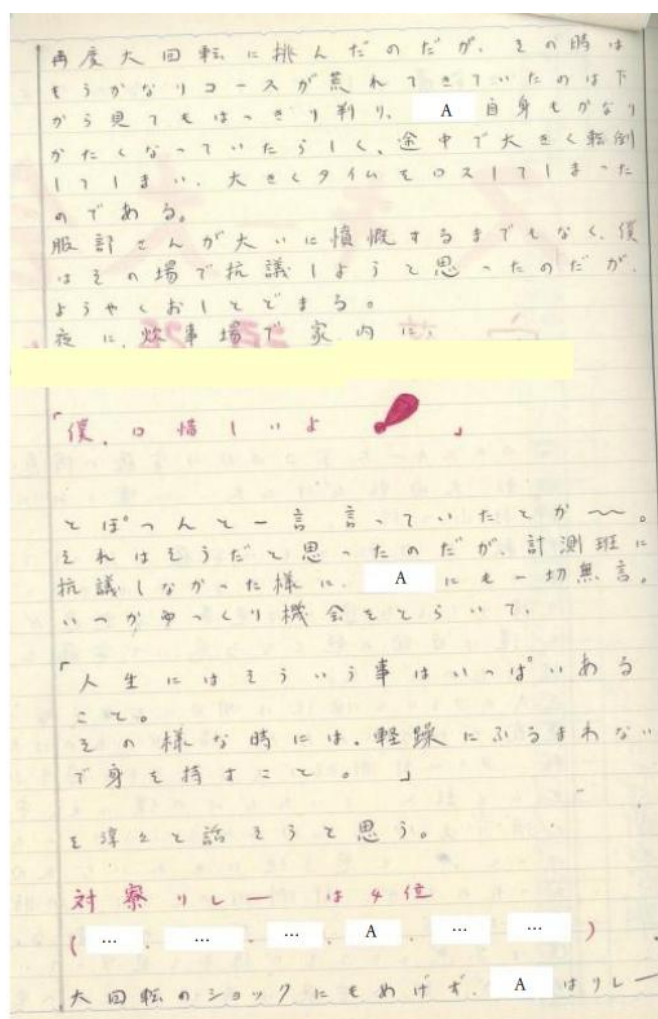
と淳々と話そうと思う。

対寮リレー は 4位 …

大回転のショックにもめげず、Aはリレーでもほんとに頑張った。

T(**52) I(**33) S(**55)で2位になり、M(**51)、S(**43)で4位か5位に下っても、Aでなんとか4位でゴールインしてほしい！という僕の希いと作戦がほとんどその通りになって、Aが5位に100m以上もの差をつけてゴールインした時は、頬ずりしたい思いだった。

よくやったぞ A！



資料5. 寮生A(**50)についての日誌

「スキー大会」は、同校の毎年の恒例行事である。その状況が一寮生に即して克明に描写されている(資料 5)。その記述のなかで、この寮生の取り組みが、最後の「頬ずりしたい思いだった。よくやったぞ」という寮長の表現に示されている。リレーにおいて結果的に、4 位であったとしても、「頑張った」ことが賞賛されている。大回転の種目で転倒しショックを受けた後の頑張りに対してむけられている。その点で、3つのことに注意をむけたい。第一は、「口惜しいよ!」という寮生の心情を寮母セツ子がかうけとめていること。共感的傾聴といえる。辛い思いに共感してくれる存在として寮母がいること。第二は、失敗経験の意義について。「人生にはそういう事はいっぱいあること。その様な時には、軽躁にふるまわないで身を持すこと」という寮長の見解。それは困難さを含む実社会でどのような人間のあり方を実現するか、という人間形成の指導を示している。第三には、第一と第二は相互補完的に、この寮生に対するかかわりを必要としていること。このような積極的な価値実現の事例をここに見出すことができる。「治療的養育」というアプローチ、あるいは自立支援ということが期待する以上の人間のあり方の課題が求められている。その領域に、寮長、寮母はかかわっている。翌日、成績発表がおこなわれた。全校で 11 位、中 2 で 1 位、「A の表情如何にと僕はちらっと A を見たのだが、怒っている顔でもない勿論笑顔でもない A 独特のかたい表情が最後まで変わらず、A の心中思い僕もじっと沈黙。…安藤は淡々と自分のペースにもどり、これも又安藤のひとつの風格と領いたのだった」(1977.3.3 A**56)。成長が証明された、その姿がここに記述されていた。さきに跡づけた寮母セツ子の寮生に対するかかわりの諸相の一局面としてこの事例も着目できる。ここにとり上げたのは、一例であるが、藤田の日誌には、こうした事例は例外的ではない。他の寮でも、同様であろう。

この価値実現という点について、さらに立ち入って、家庭学校がどのような視野を含んでいるか検討しよう。さきにわれわれは、留岡幸助がみずからが創設した「学校」が当初から「家庭的生活」を原理の一つとして重んじていたこと、それを基礎づけている領域として「政治」があることを指摘した。

「慈善と政治」ということばは、かれの認識の枠組みを示している。この事業がけっして「廃物の利用」ではなく、むしろ「放棄物」と見做される対象を包摂するものであること、そのような者が示す長所(「引き掛り」)の発見とともに各自がそれぞれの所を得るように、「役立つ人」を育成しなければならない、という主張を導いていた。そうした認識関心に、戦後の寮長藤田俊二、寮母セツ子にどうひき継がれていたか。寮長、寮母は、寮生と生活をともにするなかで寮生一人一人の社会的な自立にむけた思いにおりに接し、成長証明できるはずである。「自分がきちんとした社会人になってから」実の母親と会いたい、という思いを記した事例(1988.7.14 Y**128 生徒作文)もその一例である。寮在籍中の個々の事例ではなく、以下では、卒業日、あるいは卒業に近い数日の日誌に着目しよう。当の寮生についての寮長のふり返りとこれからの将来が、簡潔なことばで記述されている。

・様々な紆余曲折の中で、再非行だけは絶対にないと思う。100% 成功とみる。

(1976.2.15 S**45)

・悪い仲間にさい引きずりこまれなければ、再非行は 100%なし *下線原文ママ引用者と見ているだけに、M(**75)の健闘を祈るや切!頑張れよ M。(1980.11.6 M**75)。

「不良性」がどのように除去されたか、という制度上(1948 年、児童福祉施設最低基準)要請され、それに応える記載がないわけではない。その要請に応えることに、寮長俊二はけっして消極的である

わけでもない。大書して強調もしている。けれども、藤田は、この節目の時点で、より積極的に当の寮生がどのように価値実現し、どのような水準まで人間のあり方を達成できたか、という点にまで言及している。そこに、成長証明にむけた、凝縮した意志が明らかにされている。われわれは、その記述とともに、それに補足する形で、卒業する寮生最後の作文（事例 1~6）の内容によっても、跡づけたい。

事例 1

1978.4.10 A(**56)

今日は

○ 3 学期成績発表

○ 1 学期始業式

A は

○ 作業賞受賞

(木工部)

今日同じく発つ N(**57)が、二学期連続しての三賞受賞という輝やかなしい栄誉を得ての成績発表だっただけに、ちょっとショックをかくしきれない様子の A だった。

僕は僕で、そんな A の様子にひどく素直なものを感じて、表面の A とは別の、何かすっきりした A を感じて送り出す日を迎いたのが、実に嬉しかったのである。

始業式が終わった後、谷校長に呼ばれて皆の前に立った A と N(**57)が、

「ここで学んだことを生かして、しっかり頑張りますので、皆さんも頑張ってください。」

ときちんと挨拶し、始業式の日にして挨拶して発って行くのは稀有の事だなあ！

と、僕は後からしみじみ二人の顔を見つめたのだった。

先生方に二人で挨拶にまわったのは朝だったが、入院中の寺崎先生にご挨拶できなかったのに、奥さんからハンカチをもらって来ましたと、とても嬉しそうにしまっていた二人だった。

午後 3 時、待ちに待った石井さん兄弟

(兄は建築内装、弟は左官)

がにこやかに車で来寮し、約 30 分後に忙がしく札幌に発って行ったのだった。

石井さん兄弟は山形の出身で、事業の方も順調らしく、**興業と会社名も変えて、

「まあまあです。(仕事の方)

I(**36)君も頑張っていますから、A 君も一人前にしたいと思っています。

任せて下さい」

とにこにこしながら話し、今本君は母の急死(4月3日)で来られないのが残念だったが、石井さんのお宅は僕も一度訪ねたことがあるので、是非再び訪ねることを約して見送ったのだった。

皆もいつ迄も手をふり続け、3時に着いた N の母さんは「もう汽車がありませんので明日発ちます」という事になって、N は「少し変な気持だなあ」とにやにやしながら A を見送り、A はなんとなくびよこんと僕に頭を下げて発って行った。

いろんな事があるだろうと思う。！

人にストレートには愛されないかも知れない。

しかし、段々と年を経ていけば、それなりの洒脱な味も出て来よう！

笑顔だって多くなるだろう！

大人に冗談だって言える様になるだろう、仕事をする事では絶対に人にひけをとらない A だ！
ゆっくりゆっくり豊潤な人格に向かっていくと思っているよ。

僕は、再非行の心配は

100%

なし *大書し、13行で強調—引用者

と、見ている。

体を大切に、しっかり頑張れよ！

どこかに自分の旗を上げるまで 頑張れよ。

真面目に渡れば、世の中の川位楽しいものはないのだからな！

1978.4.10 夜

藤田 記

* 4.10A**56 生徒日記

「これからのこと」

今日で自分はこの学校と別れることになりました。今日までは先生に色々と教しえってもらったり又しかられるようなこともして来てしまった。又今日の寮回りで自分は色々な先生に色々話しをしてくれてやはり、自分がよいんだと決めつけれる道を歩めと言われた。自分は今日でこの学校をはなれて又一年生として自分が正しく行けるふうにして行く。又自分としてやは他の先生からニコ、ニコして話せる人にならねばならないと言われて自分としてしっかりして行く。又自分は今日からは、又新たな気持ちで社会の人と合うふうにして行く。今までの自分では社会へ行くと失敗してしまうふうな気がします。でも今から気を付ければ自分のとてもいい道がひらけると思う。仕事については人一倍の仕事を自分にみにつけなければならない。又自分の仕事についてまだ足りない所も直してしっかりして行きたいと思います。又自分としてはしっかりして行きとてもよい人となる。又人の話をまじめにきけるようにならなければならない。今自分が社会へ行くことにとても大切なことが有り又これを直して行くふうにしなければ自分がよくなりだめになってしまう。自分が社会へ行くととてもよい人となる。又今日 向えに来て行く時は、自分が一年生になった人で有ると思って又これからしっかりして行くふうにしてこれから又頑張っていきたい。

終り

事例 2

1982.3.26 H**85

今日は元気な H だ。体力がないのをひけ目にしている H だけに、山へ行って人並みの太い木をかついだというのは大変な喜び、

「だけど、必死でやると、かつげた。とてもうれしかった。」

たったこれだけの結びだが、力のある体力のある者には解らない非力な者の喜びが、言外にほとばしっていてすがすがしい。

3.26H**85 生徒日記 『卒業にあたって』

「卒業」なんて言う言葉はまだ自分には遠い所にあると思う。自分の悪いくせ、態度、言葉使い、友達との行き来、まだまだ若い所がある。人と話をしたりするにも、相手が変な言葉を使ったりすると、馬鹿にしたりしてしまう言もある。自分は、以前まで人の事を考えず、好き勝手な言ばかりして来た。そのためにこの地、家庭学校に来て、自分を反省し、強い心、身体を少しづつ身につけてきたが、やはりまだまだ「卒

業」という言葉はほど遠い。今で、一年と十四日が経過しました。一年というのは、長く感じられた新入生当時、僕はここから逃げ出す事ばかり考えていたが、一年が短かったと感じている今は、卒業という目標を持って生活している。どこでどうなって、「無外」しようとしていた者が、「卒業」を目指して頑張ろうという気になったか、それはやはり、規則正しい生活習慣、午前中の学習、午後の作業、など、他の学校にない特色のある生活をしているので、平らで洗濯板のようだった身体にも肉がついてきて、木もかつげれるようになり、外面的には新入生の頃よりも良くなった。が、やはり、自分の気分的な行動は、まだ少し、残っている。具合の悪い時や、気分の悪い時、すぐ顔に出してしまい、周りの人に迷惑をかけてしまったり、とにかく、自分の身体に影響されやすい。やはり、「卒業」はまだまだ目標でしかない。もっともっと自分を深く見つめ、考えて行きたいと思う。自分は、意志のはっきりしている時と、はっきりしていない時がある。周りに左右されやすいので、自分の意志をはっきり言って、左右されないような、強い心を持って生活して行きたいと思います。もう中卒で、今までの自分を深く反省して見ようと思います。 終り

3.27 H**85

昨日、僕の学級全員に書かせた『卒業にあたって』の作文を貼付しておく。これは決して H(**85)へのあてつけとかなんかではなく、卒業近い遠いに関係のない奮起待望の思いで書かせた作文なのである。

○夕方 M と T(**70)の卒業の挨拶廻りに H をつけたのは、明らかに H を意識して僕が指名した。

M とがどんな挨拶をし、M と T(**70)がどんな言葉で先生方から励まさせるか！4年数ヶ月、3年数ヶ月という年月の重みを H にこそその眼で見てもらいたかったんだよ！H。

事例 3

1977.3.13 I(**33)

今日の礼拝は谷校長先生、卒業即自由という考い方の危険な錯誤について淳々と話して下さっての感慨深いお話しに、特に I(**33)と S(**43)は深い感銘を受けた様である。

「今日の谷先生の話しは、とても大事な話だと思っています。」

ほんとだぞ I！

5年3ヶ月、260枚以上書き続けて来た礼拝感想文の最後の一枚が谷先生の深い示唆にみちたお話しで終わったことに、今更に深い感謝の思いでいっぱいである。

礼拝が終わった後、20年前の卒業生本間勉さん（帯広で建築業）が、

「家庭学校に居るうちにうんと勉強して下さい」

と簡潔な言葉の中に千金の重みを感じさせての挨拶があり、その後、楽山寮の0君の卒業の挨拶に次いで I も挨拶する。

「5年3ヶ月ここで学んだことを社会に出てからやり通します。皆さんも頑張ってください。」

なんとも言いえない気持でじっと聴く。

○午後は洗濯をした後の自分のベッドを整理し、夕方、S と2人で各先生に挨拶廻りに行って来る。

帰った後の目頭がにじんできたのは涙だったのかも知れないなあ～～。

○夜、I と S の送別会をする。

あんまり感傷的な雰囲気になってしまったら辛くなる気がして、コーラを飲みながら、昔の石上館の話などをしてできるだけさりげないかたちの送別会にしたのだった。

いよいよ今夜で最後、I の転出証明を見せながら、

「明日からは札幌の市民になるんだぞ！

札幌の人口は1人ふえるんだ！」

と言ったら、

「札幌の人になるのかい僕も！」

とびっくりしていた眼の輝きが印象的だった。

*1977.3.13

I(**33)生徒日記「寮回りについて」

僕は、自分が明日卒業すぐから寮回りにS君と一緒にいった。各一人一人の先生わ、僕達に、そのはげましの言葉によって、又家庭学校の名誉にかけて、一生懸命やって行きたいと決心した。やっぱり先生方におわかれのあいさつをと言う事は、本当につらい事だと思いました。僕はやっぱりこの家庭学校の先生方に感謝しなければならないと思う。多くの人を寮回りにつきそった事があったけれど、今回は自分と言うものをにぎりしめて今日の寮回りに行きました。長い事この石上館にすみなれたかと言うか、小さい頃からこの学校に来て、本当に自分の家の様にして、くらして来た。やっぱり、僕もこの学校に先生方と友に暮らし、又、先生方のきたいを裏切らない方が自分のためかも知れない。けっきょく社会出て自由を求めて行った言うか、しっばいしている卒業生わ多いと聞かされ、りっぱな社会人とすだっで行きたいのです。でも自分の道はこれからです。くじけずに頑張りたい。

*1977.3.13

I 生徒日記「感想文」

今日の谷先生の話しわ、とても大事な話しだと思います。春がちゃくちゃくと近づいて来ている。春が来るとこの家庭学校からすだっで行く人が多いのですが、これからおもに卒業すると言う人のために話しをした。この学校を卒業したら、多分さきに自由を求めるはずだと思。でも自由と言ったて、そう簡単につかめるものではないと思う。自由と言うものは、免許を取って、自働車を運転する事だと思います。でも免許を取らないで、車のそうさとかも知らないで、その車に乗って、百メートルさきスイスイ行けないものではない。自由に生きるためには、やっぱり修業して力をたくわえて行かないと自由は求められないと思います。今は、この学校にいて、色々先生方に修業を受けていますが、社会に出たらこれから何でも一人でやって行かないとならないと思います。今日卒業生も言ったけれど、ここにいるうちは、やっぱり勉強をいっぱいしておかなければならないと思います。社会に始ると、それだけ厳しい事はよくわかるし、それに、一応修業をちゃんと受けてから自由を求められないと思います。今日校長先生の言わんとした事は、やっぱり社会に出てよくよく自分の事を修業したり、何回も苦勞を受けてこそ、本当の自由を求められると思います。社会に出ると、いつつかの、苦勞があるけれど、その苦勞にぶつかりながらも自分の事だけを毎日勉強して、そして、修業してこそ、本当の自由と言うものが求められると思います。やっぱりそのため自分は、これから一生懸命頑張らないとならないしそう言った、苦勞、又、今日校長先生が話してくれた事は、やっぱりいつまでもわすれない方が良くと思います。

3.14**33

7時20分、家内にとまなわれて福島先生の車に乗せていただいて発つ。皆の見送りに1回ちょっと手をふっただけのなんともさっぱりとしたIの出立、

それがまた如何にもIらしくて、胸中の様々な感慨を共有する思いでじっと見送ったのだった。

Iと暮らして5年3ヶ月、Iが卒業する日もいつか来る筈と思い続けて来た今日だったのに、いざ

今日になって見ると、意外な程に感傷的な気持はなく、これから I の 1 日 1 日に起るであろう様々な起伏を予想しながら、予後の安定には

(1) ***貿易に集合した家庭学校の卒業生

(*** ***) I)

の人間関係への緻密な配慮。

(2)I の肉親関係へのより密接なアプローチ、具体的には

(ア) 父との間断ない連絡

(イ) ばあちゃんを軸にした伯父伯母との暖かい環づくり。

(ウ) 許されるなら、再婚している母親とのなるべく早い機会での対面。

以上の 2 つが不可欠だと考えている。

転職はあり得るかもしれないが、

再非行は

100%

なし *大書し、16 行で強調—引用者

とみる。

I よ、

家庭学校で 5 年 3 ヶ月暮した様に、自分のペースで生きていけば絶対に大丈夫だからな。できるだけ笑う様にするんだぞ！

I の出立持物

...

| | |
|-------------|-----------|
| ○体格 | 入校時 |
| 身長 169.3 cm | (139 cm) |
| 体重 59.5 kg | (32 kg) |
| 胸囲 87 cm | (67.5 cm) |

夜に書いた皆の日記をコピーして貼付しておく。

○夜 8 時 30 分、札幌まで付添って行った家内が帰ってくる。

家内

「汽車の中でも心配そうだったけど、**貿易（会社名—引用者）に着いてからはほんとに不安そうで、I しっかり頑張るんだよ 行って帰ろうとしたら、涙ぐんでいたみたい～～。

I のあんなに不安そうな顔を初めて見たわ～。S (**39) 君と M(**29)がとても喜んでいました。」

事例 4

1981.3. 21 I(**71)

◎ M(**73)と一緒に、M の父さんにともなわれて発って行った。

M の父さんが快諾してくれ、すぐ萱場さんと連絡を取り合い、10,56 分発おおとりで発って行った。最後の最後まで I(**71)とつき合わされることになった M(**73)は仕方なさそうににやにや笑い、I はもう興奮して眼が充血している感じで手を振り続け、残った子等は 2 人が居なくなった後淋しそうにぼかんとしている。

I が発った後の昼、給食棟で弟 T が、

「せんせ、どうも有難度う」

と礼を述べたのには、一瞬どぎまぎしてしまった程にびっくりしたが、その後、なんともいえない嬉しい気持ちになったのだった。

◎ 所持金 16,450 円

月々500 円の支給金と年末お年玉だけを貯めて貯めてこんなにもなり、

「僕、お金使わないでよかったね！ 先生の言ったこと（無駄遣いするなど言い続けた）

正しかったね」

と最後の名言を残して発って行った I、両親とは全く没交渉に、岩見沢児相さへきさん先生とだけ連絡をとり続けて就職させた I、実父母がいるのに実父母と全く無関係に僕の責任でさっささっさと就職させた例は 18 年間の経験の中でも一度もなく、それだけに又思い責任をひしと感じての夜である。

再 非 行 の 心 配 50 % （盗み）

あるし、

あたりまえの社会人になれるかどうか？

50 %

の心配があるだけに、今はただもう萱場さんにひたすらお願いしていくしかない。

とに角、ぼけっとしないで、しっかり頑張るんだぞ！ I。

1981.3.21 夜

藤 田

事例 5

1988.3.31 K(**126)

...

◎K に明後日の卒業を告げる。目をぱっと輝かせて喜んでいた K だ。

*1988.3.31K(**126)作文

「今日は、朝作業で、牛乳缶を取りに、牛舎に行きました。午前中は、藤田先生に洗濯をしれと言われて、びっくりしました。そして、四月二日に卒業をすると来いて、本当にうれしかったです。そして、洗濯しながら、部屋を掃除しながらやって居ました。そして、今までの事を色々思い出しました。今までに卒業をしていった人の、卒業をする時の気持ちが、分かりました。一日が、本当に長く感じました。明日は、皆の前で、挨拶をします。そして、夜には、送別会をやります。そして、次の日の朝になって、昼に親が迎えに来ます。本当にまちどうしいです。今までの一年四ヶ月は、本当に良かったと思って居ます。そして、残り少ない日々を大切に過ごして、卒業をしたいと思って居ます。自重した生活をしたいと思って居ます。」

1988.4.1

...

今夜は K の送別会の予定だったが中止とし、全員を 6 時に寝せる。K よ、許せ！

1988.4.2

母さん、姉ちゃん（帯広在住）、姉ちゃんの夫（20 才位？）が迎えに来て、にこにこしながら発って行った。「お世話になりました」大人びた挨拶に僕は K の成長を感じながら握手！

K なら 100%心配することなし！

体を大切にしっかりと頑張れよ！健闘を心から祈る！

1988.4.2 大安 藤田記

事例 6

1989.2.22 Y(**128)

父さんが迎えに来て発って行った。父さんとは初対面、生徒たちが「あれっやーさんだ～～！」と息をのんだ位にそれは暴力団スタイルだったし、顔も、優しさを怖さが包んでいる様な或いはその逆の様な感じで、乗って来た車もやーさんがよく乗っている外車、運転しているのが又弟分風の若者、その若い人は「少年院を出ました。」と淡々と明るく語り、僕はどう対応していいか戸惑いながらもえーっと腹を決めて四方山話をした後に手を振って送り出したのだった。心配は一杯ある！しかし、根本的には「悪い事はしない」Yの倫理観の確さを高く評価しているから、心配はしていない。再非行は100%なしとみる。ただなY！人にだけは好かれる様に努力すれよ！そして頑張れよ！頑張ればなんとかなるのだから～～！

事例 7

1974.6.6F(**37)

・心配な点は

・ 短腹なこと

・ そそっかしいこと！

しかし、好きな木彫制作で藤戸はきっと伸びていくだろう。

それだけの天賦の資質と才能を藤戸は持っている。

成功 90%とみる。

*大書し、2行で強調—引用者

以上の事例（1～7）を通じて、卒業する寮生が、これまでの寮生活とともに今後の将来にむけて、以下の目標を実現することが期待されていることがわかる。

- ・「洗濯板」のような身体であったが、木をかつげるようになること（事例 2）
- ・無駄遣いせず、当たり前の「社会人」になること(事例 4)。
- ・人に好かれるように努力すること(事例 6)、
- ・お世話になったことに感謝して、「お世話になりました」といって、「挨拶」ができること(事例 5)、
- ・「札幌の市民」となること(事例 3)、
- ・天賦の資質を伸ばすこと（事例 7）。
- ・「自分の旗」を掲げられるまで、「仕事」に専念すること(事例 1)。
- ・「冗談」もいえるようになること（事例 1）

このように列記できる。在籍中の「作業賞」など「三賞受賞」（事例 1）では十分ではない。日常の対人関係、市民生活を円滑に実践しながら、いかに自己の長所を伸ばすとともに、仕事に専念し継続しできるか、という課題が示されている。一人一人が校長、職員、主婦たちに生活上の姿（人間の在り方）を通じて示している「引き掛け」を見出し、いかにして「個性」、長所として伸ばしながら、同時に、一山林、土木、板金、そ菜など「生産活動はまことに多岐にわたっている」（谷）とはいえ 60）、そして、何よりも基盤的な職業倫理といってよい、「汗を流し」「勤労」の精神態度が培われ、「収穫のよろこび」

も知っているにせよ—他方では現実社会における所与の「仕事」に専念し、銘々がその「職分」を尽くし、務め続けていくか、という課題である。藤田自身どこまで自覚的な認識があったかどうかは不明であるが、個性と「職分」とをどう適合させるか、という関連性の問題がここにも存在する。荻生徂徠—その著作の一つは幸助も長文で引用し共感しつつ紹介していた—が原理的に応答していた事例が想起される。より直接的には、『第二篇家庭学校』（1902）で提示した「人を助け人に助けられ、互いに共同的生活を営む」ということ、相互依存的な関係を確立する公共的な課題をうけ継いでいる。ここに「政治」ということばはないが、日記で示していた知見でいえば、「出来る丈多数の民衆」にかかわる「デモクラシー」を実現する政治にむけた参加が、卒業する寮生たちにも期待されている。国民一般に対してではなく、対象が限定されている。その参加は一たとえ学校内でどれほど作業班活動によって寮長指導のもとで、そして「天然の感化力」のなかで年間を通じて鍛えられたとしても—寮生一人一人においてただちに実現できるわけではないであろう。留岡幸助は、「教育」は「政治」と対比して「春の雨」のように、「その降るや油の如く静かに地中を湿ほして、万物を生々化育せしめる」と語っていた（『政治教育』1920；大正9）。「教育の事は急進的であっては不可なり」（『自然と児童の教養』1920）と留岡は捉えていた（61）。こうした思いは、藤田も共有している。「ゆっくりゆっくりと豊潤な人格に向かって」と卒業する寮生の一人に期待していたが（A**56）、その思いはどの寮生に対しても同様であろう。時間をかけた人間形成の持続的な努力が、家庭学校内と同様に卒業後でも必要とされるのである。こうした藤田俊二の卒業時の所見もふまえれば、「生産教育」としてのみならず—留岡幸助の認識でも、われわれの認識でも—「デモクラシー」をめざす政治教育としても特徴づけられる認識が、寮生たちに示されていた。

以上のように、藤田日誌を通じて寮長としての自身の認識をたずねることができる。児童「児童自立支援施設運営指針」が示す「生活の中の教育」は、教護院時代の北海道家庭学校の藤田寮長の場合には、「治療的養育」（檜原真也）あるいは「支援」を越えている。身長、体重でどれだけ成長したか、ということももちろん着目する。それ以上に、積極的に人間のあり方の価値実現をめざす、すなわち教育の働きかけを意味していた。卒業する寮生たちも、その直前の作文を通じて—「社会に出たらこれから何でも一人でやって行かないとならないと思います。」（1977.3.13 I**33）のように—そうした期待に応えている。

6. ケア・教育・政治(デモクラシー)の関連構造

—寮母藤田セツ子の「家庭であること」の実践が示すその政治教育的意義—

以上のように、家庭学校在籍中の最終的な時点での価値実現の努力を跡づけ、その特質を確認したうえで、本稿主題である寮母藤田セツ子の寮生一人一人に対するかかわりの問題に立ち返ろう。そして、セツ子の「家庭であること」の実践が示していた意義を考察することとしたい。

そのかかわりは、「炊事場」を中心としていた。その場を中心としたかかわりは、サンマ焼き、カレーライス作り、カリントウ作りなど炊事当番に関することではなかった。買い物、取りなしなど諸相あった。両者は、たしかに「生活を共にする」経験を共有した。こうした諸相を統一的全体として捉えれば、この経験を通じて、看護の働きなどマイナスの臨床的状态からゼロの状態に復帰させるケアの働きだけではなく、さらに積極的に人間形成の価値実現にむかう、という一連の垂直的な向上の段階があることを特質としていた。そのようなケアの行為を、寮母自身抱いている思いに限定せずに、北海道家庭学校史の文脈のなかで、すなわち、寮長俊二との協働関係とともに創設者留岡幸助の「家庭的

生活」の認識との関連で把握しよう。そのときこのケアの概念は、寮母セツ子の自覚を越えて、次のような意味を示していたことを、ここにあらためて指摘しよう。

第一に、このケアの行為は単に身体的、精神的な傷や病、あるいは親子関係の破綻を対象にして単にその治癒、回復、修復をもって終結していない事態の存在をわれわれは認めることができる。容易には治癒し、回復、修復していない—と当事者たちに認識されている一場合である。ケアする者（寮母）も、ケアされる者（寮生）も、その状態を直視し、それが持続することを、運命的なものとして、あるいは不可避免的なものとしてうけとめることが期待されている。受容する、といってもよい。そこには、日常生活での対話的なコミュニケーションの関係性が求められている。この点で、ケアは教育の場に依存している。そして、ケアする者（寮母）に対しては、「苦しむものと共に苦しむ」（留岡「苦痛の賜物」1912；大正元）という「同情」の働きが要請されている。のみならず、その場合には、その状態を意志的に選択するということが期待されているわけではないが、「難有」という理念として価値づけ、積極的にうけとめ人間形成の主体的契機とすること—「難苦なくして発達進歩するものなし」（留岡幸助）という認識—が当の寮生には求められている。この場合には、教育がケアに依存していることを意味する。「スキー大会で転倒したことについて「口惜しいよ！」と内面を吐露する寮生を寮母セツ子が共感的に傾聴するようにうけとめていること、そのうえで寮長藤田俊二が「軽躁にふるまわないで身を持すこと」を求めようとしたこと（1977.3.2）をここで想起しよう。この一例は、家庭学校のなかでは軽微な部類にすぎない日常の経験であろう。が、この一例が示すように、失意の状態から回復、場合によっては破綻した人間関係を修復させようとするケア概念のなかに、「苦難に耐える力」（谷昌恒校長）を発揮するという人間形成の契機が含まれている⁶²。

第二に、このケア概念は、その対象となる者の人間形成、とりわけ他者と協働的な人間関係形成力の育成の契機をうけ継ぎながら、政治教育の課題に繋がっている。すなわち、炊事当番にあっては、留岡幸助『第二編家庭学校』（1902；明治35）の認識でいえば、「自己ありて他人あるを知らず」という「主我的情念」を乗り越える。そして、寮内の「炊事場」を中心とした寮母と担当した一寮生の二者間の個別的対応の関係にとどまらず、寮生全体にかかわる家事仕事（炊事当番その他）を通じて「社会的観念」（留岡幸助）を培う。そしてこの観念に根ざして長期的な視野で一勤労の精神とその習慣的態度を培うことによって一校外の実社会で、人々と「共同生活を営む」（留岡幸助）ことのできる人間のあり方を実現する、そのような人間形成を基盤から育成している。その場合、一人一人に対する寮母のかかわりは、単に「非行」性の除去を目標とする消極（抑制的）的な課題設定にとどまらない。それも不可欠であるが、より積極的に、価値志向に導かれた課題が提示されている。すなわち、卒業する寮生一人一人が個性（「長所」）を発揮するとともに、どのようにみずからの「職分」を見出し、精勤し続けることができるか、という公共社会に参加することを人間形成目標としている。したがって、その目標が求められる対象は、包摂的であることを要し、一意識的であるかどうかは別として一民主主義の理念に即したものとして特徴づけられる。人間一般誰もが、というのではなく、あるいは、すでに自立的な職業人として確立された存在が、この対象とされるのでもない。変化可能性が期待されている当の寮生たちに限定されている。なにかしらの問題行動があっても、かれらを「放棄物」（留岡「感化事業の真諦」）としてはならない、という意味で包摂的であることが同校の存在理由としてある。その一人一人が発揮しているはずの「引き掛かり」を見出し、それを個性として認めて伸長することが期待されている。生活を通じての形づけという陶冶可能性に対する信頼が、ここに横たわっている。そのように対象を限定した形での包摂の教育的アプローチが要請されていた。全員参加—制度的には社会福祉領域での

組織的实践にちがいないが、「公教育」の対象としてうけとめる（谷昌恒）—を理念とする政治教育の視野が、寮母の寮生に対するかかわりの課題にひき継がれている。

第三に、以上のように、負の状態からの回復と受容というケアと正の価値実現にむけた人間形成（政治教育）という両極の働きかけが把握できるとすれば、それらを担う寮母藤田セツ子の寮生に対するかかわりは、炊事場でその両極性を実現している。すなわち、親密性のある雰囲気—「温かい甘やかな雰囲気」（谷校長）を醸す—のなかで実の両親（産みの親、あるいは義父母）などにかかわる一身上の話題を当番の寮生から自発的にもちかけられる機会がある私的領域を自然として肯定的にうけとめている。ここに、基本的信頼感の醸成を担保する「ホーム」としての一面が確固として用意されている。若き日の留岡幸助が1888(明治21)年「昌平和楽」と形容し「帰ルベキ家」とも指摘した home は、戦後のこの小舎夫婦制のもとで失われてはいない。そうした領域とともに、寮生全体のための炊事という当番活動を通じて「主我的情念」の支配から脱して「社会的観念」を培う公的領域の部分をも重んじている。寮母藤田セツ子の寮生に対するかかわりは、こうした両極性を有した炊事場を起点としている。「奥さん」という呼称も、このような微妙なポジションを反映している。寮母のかかわりは、後者の公的方向をより発展的に包摂的な「デモクラシー」（留岡幸助）の政治教育に繋がっている事例であった。その点で、現在 J.C.トロントによって提唱されている「ケアリング・デモクラシー」に理念として接近しながら、他方、それとは区別して、ケアを担う側についても、うける側についても対象限定的であり、そして意図的に人間形成するという教育の契機が理念としても、制度としても、実践としても、前面的に押し出された形で決定的に働いている。そうした領域の重点づけによって、ケアと教育は、「生活を共にする」という経験のなかで、どちらにも解消されない形で相互依存性が成り立っている。その関係性を維持した形で、当事者たちの自覚を越えた形で、ケア・教育・政治（デモクラシー）の関連構造が示されていた。この点に、寮母藤田セツ子の「家庭であること」の実践、とりわけ寮生に対するかかわりが明らかにしていた政治教育上の意義があった。「治療的養育」ということのできる取り組みは、児童養護施設のみならず、この北海道家庭学校でも一藤田夫妻が石上館を担当した当時でも、そして「児童自立支援施設」となっている現在ではなおのこと（『「家庭」であり、「学校」であること』第3章、富田拓）—不可欠な重要性をそなえているであろう。けれども、その概念によっては十分には説明できない残余の部分がある。本稿で明らかにした政治教育的意義は、その部分を占めている。その集約点が炊事場であった。「汗」を流す作業の現場（畑、牛舎、山など）、「朗読会」がおこなわれ、時に「難有」の理念が語られる「礼拝堂」と重なりながらも、それらとも重ならない独自の場所が、炊事場であった。この場所においてこそ、両極性を示しながら、藤田セツ子自身は、当時においても、晩年（資料 6-1, 2）においても、それらを意味づける視野はけっして十分には認識してなかったであろうが、見逃しがたい意義を—他の寮舎の寮母もそうであったように—示していた（63）。

本稿の中心的課題が、以上の消息として果たされたとすれば、残された課題も見えてくる。

寮生一人一人において、自己の身体的条件、家庭的境遇条件にかかわる心の傷、病を抱えながら社会的、職業的な自立にむけて生きることが求められるという際、創設者、校長、寮長、寮母の役割、とくに寮生に対する人間形成上の役割が重要であることを、本稿でも知ることができた。立場は異なるにせよ、この場合、他者の働きは不可欠であった。寮生仲間、先輩との関係、とりわけ「親」と呼ばれる世話役の「年期」の先輩との一対一の関係、「理事」と呼ばれる寮代表と他の寮生との一対多の関係、等も見落とせないだろう。他者の働き、ということで他方において見落せないのは、その自立を支える、自身の内部での生きる力の存在である。「暗いけれど、それなりにユーモアを持っている」

(1966.10.31 菊池) と記していた。ユーモアと微笑について、藤田は着任当初から見逃すことはなかった。谷校長が折々に強調した「苦難に耐える力」と並びうるほどの、あるいは、それと補いうるであろう。それほど生きる力があつたのではないか。この点を見極め、“成長証明”にむけた藤田俊二の努力を一藤田の試みに倣って一跡づける必要がある。

もう一つある。ケア概念が政治教育につながっているという場合、留岡の論説「艱苦は賜なり」(1897)、「人生は試練なり」(1897)、「苦痛の賜物」(1912)と—これらの論説で引用されている古代イスラエルを対象として社会史的に実証研究した—マックス・ヴェーバー(1864—1920)の問題関心とともに、はるかに遡って奥深い歴史の古層をたずねるならば、原型といってよい事例が想起される⁶⁴⁾。その来歴を意識するとともに、一人一人の個性と「職分」との適合関係と問題にした事例(徂徠)にも留意しながら、留岡が、「家庭学校」という名称以上により普遍化して名づけていた”Family School”を、どこまで一地域社会との連携した形では「地域社会学校」(留岡清男)としての性格を保持した教育共同体の様相も加味しながら—理念型的概念として構築できるかどうか、どのような有効性を示すことができるか。このような点も、残された根源的な課題としてうけとめたい。

こうした課題を残しながらも、本稿によって、現在の北海道家庭学校の成り立ち、すなわち、小舎家族制を保ちながら、これまでの教育の補うため分校を内部に開設しつつ、他方で「樹下庵診療所」を整備している成り立ちは、「ケア・教育・政治」の関連構造からも、その存在理由を理解できる。



資料 6-1 晩年の藤田セツ子

2013(平成 25)年 11 月 4 日、北斗市千代田の自宅で。寮生の名前を挙げれば、40 数年前のその寮生のことを夫俊二とともに印象深く語ってくれた。筆者撮影。



資料 6-2 北斗市千代田の自宅での藤田俊二、セツ子夫妻

自宅 2 階。バックの写真の大半は卒業生から。資料 6-1 と同日に筆者撮影。

註

- 1) 拙稿「北海道家庭学校寮長藤田俊二年譜」『宮崎大学教育文化学部紀要』教育科学、第 27 号、2012 年 8 月、拙稿「北海道家庭学校寮長藤田俊二年譜・補遺」『宮崎大学教育学部紀要』教育科学、第 31 号、2014 年 8 月。
- 2) 二井仁美『留岡幸助と家庭学校—近代日本感化教育委員会史序説—』（改訂普及版）不二出版、2020 年、p.98。
本書は欧米の関係施設に関する留岡の視察行動事績を精細に明らかにしている点で特色を示している。とくにドイツ・ハンブルクのヴィヘルンの感化教育施設「ラウヘスハウス」に関する実践情報に接して、開放処遇の「理念的モデル」を具体化するものとして留岡が評価していることを、本書は論じている。なお、この方面での先駆的研究として、公刊された留岡の日記記述等から留岡のヴィヘルンの原理を受容していることを論じている北村次一『ヴィヘルンと留岡幸助—キリスト教社会改革史—』法律文化社、1986 年、参照。「家庭学校社名淵分校」の開設（1914 年）と教育の実際については、北海道家庭学校編『北海道家庭学校 110 年史—北の大地の暮らしと教育—』六花出版、2024 年、以下、「110 年史」と略記、第 2 章（二井仁美）、参照、「北海道家庭学校」への名称変更（1952）については、同書、第 4 章（大泉漣）、p.125 参照。
- 3) 子ども家庭庁 資料集「社会的養護の推進にむけて」2024(令和 6)年 6 月、など。里親、ファミリーホームによる養護を「家庭養護」と称し、施設において小規模グループケアによる養護を「家庭的養護」と称するにせよ、継続的に「生活を共にする」ことを基本的性格とする。
- 4) 「110 年史」、pp.200-205。「生産第一主義」から「教育第一主義」という同書の認識（前者から校舎に重点移動していかなければならない）は、花島政三郎の多角的（財政的基盤、施設の拡張、決算状況と独立採算制等）に実証し、戦後、「生産第一主義のきらいがなかったろうか」「施設経営の成否にかかわるような作業からは少年をはずすべきである」という問題提起を含む論文「北海道家庭学校 60 年の歩みとその再検討」『ひとむれ 教育特集号』通巻第 411 号、1976 年 9 月 1 日、の課題認識の表現を用いている。その認識をふまえて、同書では、職員居住空間、生徒室の特徴など実際とともに寮舎整備の方針等について整理している。阿部祥子・小野理映子「北海道家庭学校（旧教護院・児童自立支援施設）にみる夫婦小舎制の展開—建物を中心として—」『生活学論叢』第 5 号、

2009 年、も参照。個室を与えなかったことも谷校長の判断による。「生徒の集団生活を重視すると共に、生徒個人の生活を、即ち 2 段ベッドを廃して、机と棚を備えた 1 段ベッドにし、その下には引き出しをつけ、充実させた」と谷校長時代の寮舎の特徴が指摘されている。

5) 留岡清男『教育農場五十年』岩波書店、1964 年。

6) 機関誌『ひとむれ』通巻第 353 号、1972 年 4 月 1 日、通巻第 411 号、1976 年 9 月、通巻第 456 号、1979 年 8 月 1 日など。353 号には、目次の前におかれた「はじめに」で、谷校長は次のように記している。「『ひとむれ』誌は、毎秋、収穫感謝号を発刊して年間の生産活動のあらましを御報告してまいりました。生産教育の実践の場として感謝号に収録された生産活動は、そのまま本校の教育活動でもあります。しかし、本校にはさらにその多様な生活場面において展開される、さまざまな教育の営みがあります。今、それらの営みに関するいくつかの報告を、教育特集として編集することにいたしました。」「生産第一主義」から「教育第一主義」へ移行」といっても、11 月恒例の「収穫感謝祭」で谷校長も毎年、一人一人に即し、また寮生全体として総括的に賞賛するように、寮生たちの生産活動の教育的意義が顧みられなくなった、というのではない。その意義を十分に認めつつも、それのみではなく、ということが「特集」を編集している狙いとされている。藤田俊二は、411 号では「日誌抄—K のこと—」を掲載している。K は、筆者による整理番号 16 の寮生で、『もうひとつの少年期』晩聲社、1979 年、にとり上げられている島田茂雄（仮名）のこと。それについて谷は「はじめに」で「藤田の追跡」と捉えている。より対外的には、一例として、1982 年 2 月『教育展望』第 28 巻第 2 号、に「今の学校教育に欠けているもの」と題した論説を発表している。そのはじめには「1. 北海道家庭学校の教育の諸原則」と明記された内容で構成されている。その最後の段落では、「留岡幸助が基礎をおき、以来、67 年の歳月を一貫して、私どもはその教育の原型ともいふべきものを維持、継承してきた」と谷は指摘している。『教育の理想—私たちの仕事—』評論社、p.40。

7) 谷昌恒『森のチャペルに集う子ら—北海道家庭学校のこと—』日本基督教団出版局、1993 年、pp.207-208。

8) 新藤こずえ、板倉香子「児童自立支援施設における小舎夫婦制支援の検討（1）—「家庭的」支援の実践「に焦点をあてて—」『立正社会福祉研究』第 17 巻 1・2 合併号、2016 年、pp.39—46、同「児童自立支援施設における小舎夫婦制支援の検討（2）—「家庭的」支援の課題に焦点をあてて—」第 17 巻 1・2 合併号、2016 年、pp.47—55。

9) 檜原真也『子ども虐待と治療的養育—児童養護施設におけるライフストーリーワークの展開—』金剛出版、1917 年。

10) 拙稿「北海道家庭学校寮長藤田俊二の校長谷昌恒との対話的關係とその意義—寮生を仲立とする校長講話「ローマ人への手紙」に対する寮長藤田の応答を中心に—」宮崎国際大学教育学部紀要『教育科学論集』第 10 号、2023 年 12 月、pp.1-55。

11) 谷昌恒『ひとむれ』第二集、1974 年、p.64。

12) 拙稿「藤田俊二未発表原稿「誰れが悪いのでもない—ある父子 1960 年から 1994 年 2 月までの日々—」—本文及びその主題設定の意義—」『宮崎大学教育文化学部紀要』教育科学、第 32 号、2015 年 3 月。日誌原文とこの創作部分を含む未発表原稿との内容上の異同について比較した拙稿によって、この未発表原稿執筆は藤田俊二による成長証明の一つの試みであったことが、成果の一つとして明らかにできた。

13) 拙稿『『ひとむれ』の対話的世界について』北海道家庭学校『ひとむれ再刊 1000 号記念特集号』、2022 年、pp.52-54。

14) Joan C.Tronto, *Caring Democracy : Markets, Equality, and Justice*, New York and London: Newyork University Press, 2013 (ジョアン・C・トロント『ケアリング・デモクラシー—市場、平等、正義』岡野八代監訳、勁草書房、2024 年) は、本稿の対象が示す意義を考察するうえで比較参照に値する。「あなたが帰らなければなら

ないときに、あなたを受け入れてくれる場所」としての「ホーム」が一現代アメリカ社会においては現実問題として見出せないという事態の認識に、トロントは前提として立脚している（Tronto, op., cit., p.6, 訳 p.7）。そのうえで、「ケアが人間の生の基本的側面であり、また全て政治理論がケアに注意を払うべき」（*Ibid.*, p.25, 訳 p.32）と主張し、「ケアのより公的な概念なくして、民主的な社会を維持することはできない」とトロントは指摘する（*Ibid.*, p.18, 訳 p.22）。「現実には人間は皆相互依存的で、その生涯にわたり、程度の差こそあれ他者のケアに依存している」（*Ibid.*, p.26, 訳 p.33）と論じている。留岡幸助の「家庭的生活」の認識と関連づけられる、そのかぎりの寮母藤田セツ子の寮生一人一人に対するかかわりは、本稿で跡づけるように、その一部、もしくはその全体が公的領域に属するケアの実践事例を、特徴的に提供するであろう。その場合、トロントが着目するものと対比してどのような特徴を示すものか、検討に値する。本稿の註 63)を参照。

15) 北海道家庭学校編『「家庭」であり、「学校」であること』生活書院、2020年。

16) 寮生 147 名について大学ノートに記された日誌は、石上館寮長中、1965（昭和 40）年 10 月 20 日から 1990（平成 2）年 3 月 13 日まで、24 年 4 ヶ月、にわたる期間で記述されている。この期間を便宜的に 3 期に分けた。家庭学校着任後担当した寮生の最初の日誌の開始（1965.10）から谷昌恒の校長就任まで（1969.4）までの時期を初期：1965 年 10 月—1969 年 3 月とし、谷校長就任から「寮長二十年のくぎりに」と題した、教護院研修会報告（1983.11）までを中期：1969 年 4 月—1983 年 11 月、そしてその報告以降、退任前、最後の日誌までを後期：1983 年 12 月—1990 年 3 月、と分けた。ちょうど 30 年になる。147 名の入寮生徒は、その時期（年月日）によって整理番号を付した。拙稿「北海道家庭学校寮長藤田俊二の実践記録一覧」『宮崎大学教育文化学部紀要』教育科学、第 31 号、2014 年 8 月、参照。富田拓による「児童票調査」による時期区分では、第 6-8 期に相当する。「110 年史」p.297、参照。

17) 留岡幸助日記編集委員会編『留岡幸助日記』矯正協会、1979 年（以下、日記、と略記）、第 1 巻、p.19。

18) 日記、第 1 巻、pp.16-17。

19) 日記、第 1 巻、pp.95-96。

20) 7、8 割が 14、5 歳に時にすでに「不良少年」であったと知った、と後に留岡はふり返った。「感化事業の三十年」1929 年、著作集、第 4 巻、p.582。これを裏づけられるのは、1891 年の日記、第 1 巻、p.228、の「子供ヲ救済」しなければならないという認識の記載、および「囚徒の生育、犯罪歴」として日記で収録してある記事、第 1 巻、pp.310-337、である。この問題認識から、留岡は翌年 1892（明治 25）年「罪因果して感化し能はざる乎」と題した論説で「家庭に於て両親を喪い、寄る辺なき身なりて諸国に流浪し竟に悪境遇に陥るあり」（第 1 巻、p.13）と論じている。

21) 日記、第 1 巻、p.241。

22) 同志社大学人文科学研究所編『留岡幸助著作集』同朋舎（以下、著作集、と略記）1978 年、第 1 巻、p.555。

23) 日記、第 1 巻、p.248。

24) 日記、第 1 巻、pp.572-573。後、米国遊学の後、1899 年東京巢鴨に「家庭学校」開設の後、1900 年でドイツの「ラウヘス・ハウス」にふれて、それを「模範」として、欧米各国の「感化制度」に言及している。米国の「感化院」については、「大抵ファミリー・システム」であったとふり返っている。子供が 150 名であれば、「5 軒」を造って、「一家族に 30 人」と概括している「其一家族の内には、風呂場もございますし、教場もございますし、其他色々の室がありまして、詰り一家族の者が其所で独立の生活の出来る様に致しまして、其家族に一人の院長があつて之を取締まる。又一家族の内には家族長が必ず夫婦連でございまして、規律上のことなり其他凡ての事柄を世話致します」と留岡は説明している。「感化事業」『監獄協会雑誌』1900、著作集、第 1 巻、p.550。米国の「感化院」が「大抵ファミリー・システム」という記述は、日記（第 1 巻）の記述内容とどのように照合できる

か不明である。事実史的関心からすれば問題になるであろうが、本稿ではこの点よりも、「ファミリー・システム」として家族制の寮舎を普遍的な実績のある制度として留岡が把握し、社会的にも方向づけている、という姿勢が示されていることに着目したい。

25) 日記、第1巻、p.643。

26) 日記、第1巻、pp.688-689。

27) 日記、第1巻、pp.693-694。

28) 日記、第1巻、p.695。

29) 著作集、第1巻、p.542。

30) 著作集、第4巻、p.611。

31) 著作集、第1巻、pp.542-543。

32) 著作集、第1巻、p.541。

33) 『家庭学校』1901(明治34)年6月16日、警星社書店(国立国会図書館蔵)、pp.30-32(著作集、第1巻、pp.581-582)。

34) 同上、pp.64-65(著作集、第1巻、p.591)。

35) 『第二篇家庭学校』1902(明治35)年10月18日、警星社書店(国立国会図書館蔵)、pp.163-165(著作集、第2巻、p.12)。

36) 「感化事業私見」(1906;明治39)著作集、第2巻、p.219。

37) 註35)の文献、p.169-170(著作集、第2巻、pp.13-14)

38) 日記、第1巻、pp.655-656。同1897(明治30)年1月公刊された留岡の『感化事業之発達』警星社書店(国会図書館蔵)は、欧米関連施設見聞と文献調査をふまえて、わが国の「感化教育」の課題を論じている貴重な著作であるが、「父兄に代わりて悪少年を教育保護する、是れ政府の任なりとせば、則ち感化院の如き宜しく絶對的に監獄と分離し、大に其費用を擲て、不良の少年及び罪を犯したる者を感化せざるべからず」(pp.116-117)と主張している(傍点原文ママ)。

39) 「市町村自治の四角同盟」『人道』41号、1908(明治41)年、著作集、第2巻、pp.409-411。

40) 著作集、第3巻、pp.330-332。

41) 著作集、第4巻、p.506。徂徠の教育思想は、よく知られた徂徠の「万人役人」論(丸山眞男『日本政治思想史研究』1952)に関連する。「聖人の世は、棄材なく、棄物なし」という理念に導かれている。そこから包摂的な人材育成の思想が展開する。「疵物」と見られる人間はいかにして人材たりうるか、という問いに徂徠は思想的に応答した。拙稿「徂徠学における発達観念に関する一考察—「気質」と「職分」との関係の問題を手がかりに一」『教育学研究』第54巻第5号、1987。この本論文は拙著『徂徠学の教育思想史的研究—日本近世教育思想史における「ヴェーバー的問題」—』溪水社、2004年に収録。

42) 日記、第4巻、pp.604-605。

43) 著作集、第1巻、p.409。

44) 著作集、第1巻、p.233。

45) 著作集、第1巻、pp.226-227。

46) 著作集、第1巻、p.583。

47) 著作集、第1巻、p.591。

48) 著作集、第1巻、pp.586-587。

49) 『家庭学校』(1901)では、第4章「天然の教育」、第5章「家庭的生活」、第6章「実物教育」と論じられて

いる。「天然の感化力」（第4章）ということで、留岡はルソーを引く。そのうえで、「農業」「牧畜」「家禽の飼育」「徒弟教育」によって少年たちを自然環境のもとに置くことの必要を指摘し、馬鈴薯の収穫のさい、生徒に発掘させた事例を紹介する。「彼等又平常の怠惰なるに似ず、非常の熱心に以て之に従ひ、殆んど日の暮るゝを知らざるが如く、教師の制するを待つて始めて鋤鋤を擲ちたるの有様なりき」註33)の文献、p.28(著作集、第1巻、p.581)。ここには、外的自然とのかかわり（馬鈴薯の栽培、収穫）がその者の人間形成に与える好ましい影響力—「労作を愛好する習慣を作らしむる」—が指摘されている。課題場面にむきあって自己活動が促されている。たしかに『エミール』でもこの点の重要性は語られている。親が付き添っているわけではない田舎の自然の環境におかれ幼年期のエミールは必要に迫られて、自己活動が積極的に促されるようおのずから「訓練」され、遠方の者にも届く発声ができる。こうした外的自然とのかかわりと同時に、留岡は明確には認識してはいないが、内的自然として人間の自然の善性に対する信頼が示されている。ルソーの表現をそのまま用いれば、「学ぶ能力」のある者として捉えている。その点でもルソーに即している。このように類比できる留岡の参照にしたがって、ルソー『エミール』の「自然の教育」「事物の教育」「人間の教育」という3類別も、ここで想起される。「人間の教育」に相当するのは「家族的生活」であり、校長との関係である。『エミール』で登場するのは、「事物」を人為的に構成する理想的な教師であったが、家庭学校では、家族舎での寮長夫婦ということになろう。「家庭の情景以上に魅力ある画面はない」と『エミール』では指摘されている。その実現が概して困難であること、もしくは困難な場合が少なくないことを知っている点では、ルソーも、留岡も、そして藤田寮長夫妻も共通するであろう。しかし、代替する担い手が異なっている。この点で大きな違いが潜んでいる。エミールは孤児という設定であり、そのゆえの「苦痛」をすでに伴っているはずだが一描かれても不思議はないはず—、作品では「苦痛」をむしろ種々の「試練」として経験する必要が説かれている。「苦痛」の感覚は、隷属するにではない、人と人との相互依存の関係構築を促す、とされる。それに比較して、リアルな現場に即して留岡は、すでに家庭的境遇を通じて「苦痛」を伴っているであろう少年たちに対し、かれらに欠如する「ホーム」を提供する必要を説いている。その提供は切実である。この場合、寮長夫婦は「人間の教育」の担い手として対面でむきあうと同時に、「実例」「実物」(p.583)を意味する「家庭的空気」を通じて「ホーム」をもたらす「事物の教育」の担い手でもある。「看護」「同情」の働きも、その観点から重んじられる。その基盤のうえで、「社会的観念」を培う「政治」教育の課題—『エミール』でもいう「公共教育」の課題—が要請されている。

50) 日本感化教育会編の『保護教育』第10巻第1号、1940年、には、「保母」の役割を主題とした論説が4、5編収録されている。近藤基平「少年教護院に於ける保母の任務」には、「道府県立少年教護院職員令」第五条に寄りながら、その職務について、「温き明朗なる家庭」、「保険衛生」「衣類の修理」、「寮舎の掃除」「傷病者の看護」「日用品の給与」など9つの事項が指摘されている。白水シズエ「家族舎に於ける保母の任務と活動」では、「躰け」「作法実習」「衛生」「炊事」「給与品の衣服」「娯楽」などが、説明されている。富士居カヲリ「少年教護院保母を勤めて得たる体験の一端」では、「外観は洗濯婆さんでも私自身は只の婆さんではない要教護少年を教化し善導する先生であり母性愛を与えるお母さんであるとの自信をもっていたしています」と記されている。いずれにしても、実務的な仕事の現場に即して、保護的側面と教育的側面での任務が強調されて記述されている。

51) 柏葉館教母平本秋子「婦人会の現況」によれば、給食、被服（学生服、作業服、スポーツ服、普段着、外出着）、寝具、什器、日用品、保健衛生、などに関する事項で、週一回、学校内で集まり情報交換し、話し合っている。「家庭学校は、小舎夫婦制、寮毎炊事ですので、寮母の仕事のほとんどがこの炊事に費やされ、その合間をうまくきり抜けながら例会をもち、行事に参加しております」と記されている。『ひとむれ』教育特集号、通巻第450号、1979年8月1日、p.23。

52) 藤田俊二日誌からの引用に際しては、以下の方針とする。

1. 石上館であれ、他の寮であれ、寮生にかかわる固有名は匿名とし、姓をイニシャルで表記し、そのうえで石上館への入寮時期に沿った整理番号（註 16 の拙稿参照）で表記した。S**10 あるいは S(**10) のように表記。その寮生が同日の記述に 2 回以上記される場合はイニシャルのみを表記した。
 2. 不必要と思われる情報は省略し、… で表記した。引用文中の「～～」の表記は原文ママである。
 3. 住所、民間企業名も明記してある場合には、それら***で伏せ字にした。
 4. 藤田自身の記述部分は、本文と同じ 10 ポイントとした。一部強調して大書している場合は、11 ポイントにあげた。際立って強調している場合は、11 ポイントで表記したうえで、原資料の様態を付記した。
 5. 日誌に添付されている寮生の作文は、9 ポイントとして藤田自身の記述部分から区別した。
 6. 色鉛筆、ボールペンで朱筆している箇所はそのまま朱筆した。
 7. 引用文中の「!」「?」「○」「◎」「×」等の表記も、原文ママである。
- 53) 拙稿「北海道家庭学校寮長藤田俊二の中期日誌における寮生理解について—対話的コミュニケーションの実践とその意義—」『教育科学論集』宮崎国際大教育学部紀要、第 9 号、pp.15-102、2022 年 12 月。
- 54) 同上、参照。留岡幸助は、「校長と教員及び主婦は恰も病院長と医師及び看護婦の関係に等し」と『家庭学校』（1901）で論じていた。この三者の上下関係というよりも、それぞれの役割分担が強調されていた。コミュニケーションの対話的関係の重要性にかかわる所見といえる。著作集、第 1 巻、p.596。
- 55) 「三能主義」と題した論説(1914)で、「能く働かしむると共に、能く食はせ、而して亦能く眠らしむる」という 3 件は「少年を教育するに於て必要なるのみならず、凡ての人類を教育するに於ても亦誠に必要欠く可からざるものなり」と留岡は説明した。著作集、第 3 巻、p.379。「教育」そのものというよりも、めざす教育を実現する基盤として位置づけられている。「基礎的教育」も、その意味で捉えられる。
- 56) 留岡の場合には、「艱苦は賜なり」（1897;明治 30）「人生は試練なり」（同）、「苦痛の賜物」（1912;大正元）といった論説が示すように、古代イスラエルの人々の苦難の経験に関する知見があり、そのような人類史的共感が支えている。他方で、寮母セツ子の場合には、一人一人の寮生がこれまで歩んできた足跡にかかわる認識が支えている。「藤田の追跡」と谷が寮長藤田俊二の認識作業を捉えていたように。
- 57) 檜原、前掲書、p.108。
- 58) 檜原、前掲書、pp.213-215。
- 59) 全国教護院協会編『教護院運営ハンドブック—非行克服の理念と実践—』三和書房、1985 年、p.81。
- 60) 谷昌恒『教育の理想—私たちの仕事—』評論社、1984 年、p.38。
- 61) 著作集、第 4 巻、p.72。
- 62) 「難有」ということ、寮生の一人一人がみずからの生立ちにかかわる難儀を有難いとうけとめることを、谷は折々に「苦難に耐える力」と呼称した。その人間のあり方は、教育、とりわけ自己教育の目標として、しかも礼拝堂に掲げられるほどの中心的な目標として、われわれも把握できる。生徒が自身のありようをふり返って、現在及び今後について改善しようとするその目標は、通例の表現でいえば「自立」にむかうという人間の主体的なあり方としても、総称できるにちがいない。そうであるとして、もしもその「自立」を支援する、という表現をもって、校長、寮長、寮母のかかわり—自己教育を促す他者教育として位置づけられる—を指し示そうとする場合には、何ほどの慎重さを要する。「自立支援」という制度上の定着している定型表現をわれわれはただちに思い浮かべる。その時、留岡らが込めた「同情」の意味—「苦しむものと共に苦しむ」という生い立ちに関する知的認識を伴う心遣い（ケア）すること—を失う可能性があるだろう。この点を本稿でもここで注意したい。その心遣いは、寮長寮母だけが可能にする、というわけではない。けれども、留岡幸助らの思想の論理では、家庭学校創設の当初からそれが期待したように、寮舎にあっては寮長、寮母こそが、その担い手としてもっともよく期待される働きを専門的

におこないうる、と理解できる。誰がケアの担い手か、という問いに関しては、個別のニーズに限定された対応関係があるだろう。したがって、「誰もがケアの担い手」であるとただちに一般化すること（註 63 参照）によって、この個別のニーズに限定された対応関係に対する視野が失われるとすれば、実践的な問題解決に遠のくであろう。

63) トロントは前掲書（原著 2013）で、ケアが民主的であるならば、「私たちはみな、ケアの受け手である」という意味で「包摂」的でなければならないと主張している。第 6 章以下。留岡幸助「家庭的生活」認識と関連づけられた寮母藤田セツ子の寮生に対するかかわりをケアと捉えた場合にも、それは一俎徠を引用する留岡の「政治」論で示されていたように「包摂」的であることを要する。そのように接近している。トロントの提示するケアリング・デモクラシーの理念と照らし合わせ特徴的であるのは、次の点である。i) ニーズの主体とケア概念について。人間の本性認識にかかわってすべての人間は「傷つきやすく、脆い(vulnerable and fragile)」(Tronto, op. cit., p. 31, 訳 p. 40) という認識に立って、「現実には、人間はみな相互依存的で(interdependent)、その生涯にわたり、程度の差こそあれ他者のケアに依存している」(Ibid, p. 26, 訳 p. 33)ということ、したがって「ケアするという理念をより身近にする」(Ibid, p. 170, 訳 p. 245) 方向を提案している。そのかぎりでは、ケア概念をトロントは、「「世界」を維持し、継続し、そして修復する」(Ibid, p. 19, 訳 p. 24, 原文斜体) と包括的なものとして論じている。他方、藤田セツ子の実践の対象の場合には——一人一人のなかに「善への意志」(谷昌恒「ローマ人への手紙」1978)があるとともに——より限定的で、「脆さ」ということばを用いれば、生育環境の劣悪によって「不幸に負け」(谷昌恒)、問題行動(「110 年史」富田拓、pp. 286-313) という「蹟き」を重ねるとする「脆さ」と、そのゆえの依存性をもっている対象である。「アフターケア」にかかわる具体的取り組み(「110 年史」椿百合子、pp. 342-360)を要するという依存性である。ii) 「民主的ケア」について。上記 i) のケア概念に基づき、「誰もがケアの受け手」とあるとともに、「ケアの送り手」は「民主的市民」たるものが責任分担すること、「共にケアすること」を基本認識としている。そして、より良いケアである以上に、より良い民主主義をもたらすケアの必要性をトロントは公的領域に属するワークとして重んじている。よって、ケアを女性の仕事としてジェンダー化する倫理を問題提起した。他方、藤田セツ子の実践の対象の場合には、ニーズに応じた形で、寮長とは区別される寮母としての役割が限定的に期待されている。iii) 「ケアに満ちた制度」について。トロントの所見では、「家族はひとつの制度として、伝統的なケアの場であった」とし、「家族に郷愁の念を抱くべきではない」とする(Tronto, op. cit., p. 159, 訳 p. 228)。そして、「ニーズに関する多くの組み合わせやレベルが存在する」(Ibid, p. 161, 訳 p. 233)として特定の制度は明確にしてはいない。藤田セツ子の実践の場合は、「伝統的なケアの場」としての「家族」そのものではなく、留岡幸助が「家庭学校」と名づけて“FAMILY SCHOOL”と表記した、「家庭であること」とともに「教育」を実践する学校であった。「あなたが帰らなければならないときに、あなたを受け入れてくれる場所」としての「ホーム」は、トロントの著作では失われているものとされていたが、家庭学校の寮長・寮母の夫婦小舎制のもとでは、「帰るべき家」と尊いものとして意味づけた留岡幸助の home の認識(1888)を端緒として、自覚的に追求されてきた。iv) 「ケアと教育」について。ケアと教育との関連についてトロントも視野に入れているが、その場合には、第 5 章「市場はケアすることができるのか」で重点的に言及されている。「教育」はここでは、市場主義的な方法で導入された、そのかぎりの教育のあり方が着目されている(「落ちこぼれゼロ運動」)。「自己責任が機会均等に取って代わる」という事態が指摘される(Ibid, p. 131, 訳 p. 188)。そうした市場化との関連ではなく、民主的社会とケアとの関連を問う主題設定からすれば、民主主義社会を担う主体の人間形成の側面での働きかけについてはどうか、当然問われなければならない。アマルティア・センの「人間の基本的潜在能力」の概念に言及(Ibid, p. 162, 訳 p. 234)があり、また、「乳幼児がどのようにして子どもから大人に、依存から自律へと移行するのかという問い」(Ibid, p. 31, 訳 p. 41)の存在を重んじ、加えて、「人間の自律性は、出発点としての前提ではなく達成するものであり、この達成は長い年月を要するものである」(Ibid, p. 125, 訳 p. 178)ということをトロント自身も認識してはいる。これら

があれば—プラトン、ロック、ルソー、ミル、デューイ、ヴェーバーなどがそうであったように—論理的に人間形成の働きに対する問いと応答を要請するはずである。ケアとは区別される行為としての教育については、「民主的ケア社会の視点からだ、よい教育とは」という問いかけをトロントは示している。しかし、「民主的な社会の市民であることに関心を向けること」(*Ibid.*p.135,訳 p.193)という言及にとどまって、意図する人間形成の場合にせよ、しない場合にせよ—「市場化と教育」以外の論点から—社会を構成する主体の人間形成の働きについてトロントは論じてはいない。他方、藤田セツ子の実践の場合には、家族舎内での役割分担を通じて勤労する人間を培うという人間形成の働きが不可欠なものとして明確に位置づけられている。寮生全体のための役割分担というこの時点で、すでに公的契機を含んでいる。そして、この契機を中心的に含みながら、いかにして、人間形成と関連づけながらケアを担うか、あるいはどのようにケアの契機を含みながら意図的な形で人間形成を担うか、という教育の問いが寮長・寮母において重んじられている。こうしたケアと教育の相互依存性が見られる。その場合、ケアそして教育においては、「苦しみ」を「苦しみ」として受け入れることを価値づける（「難有」）とともに、「苦しむもの共に苦しむ」ことを重んずるということ、いずれにせよ受容するという精神的態度が原理的に要請されている。そうした態度を保持した形でケアと教育の相互性をふまえたケア・教育・政治（民主主義政治）との関連構造を、寮母藤田セツ子の寮生に対するかかわりは実践的に提起していた。トロントの表現（*Ibid.*p.151,訳 p.216）を用いば目の前の「二者関係」（dyadic）に限定することなく、背後に史的蓄積として横たわる、とりわけ留岡幸助「家庭的生活」の認識と関連づけるならば、そのように示された意義を捉えることができる。

64) マックス・ヴェーバー（1864-1920）は「世界宗教の経済倫理」と題した一連の論文で中心に位置づけられる「古代ユダヤ教」（1917）において、「苦難」を「罪なき苦難」として受けとめることが求められ、そのように経験したという一個人的な体験行為である以上に集合的で—共同体的行為の成立を、社会史的に実証した。その論でヴェーバーが *Seelsorge*（魂への配慮）と表記する行為は「罪なき苦難」を受けとめる試練を促すものであった。われわれが今日いうところの「ケア」の大きな源流の一つであるにちがいない。であるとすれば、「ケア」と名づけものは、—トロントは着目していないが—もともとその共同体的行為として公的な性格をそなえていたかもしれない。トロントも古代に着目するがその場合、アリストテレス『政治学』であって、ケアが「家政」に属し、私的領域に位置づけられ、ケアを排除してきた—と、トロントの捉える—現代の民主主義の原型となっていたという来歴の説明であった。

謝辞

本研究は、令和 3(2021)年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)(基盤研究(C) の支援を受けた研究「北海道家庭学校寮長藤田俊二の〈成長証明〉的实践記録の特質と意義」（課題番号:21K02041）の成果の一部である。研究遂行に際しては、北海道家庭学校特別顧問家村昭矩氏、同校元校長で理事長仁原正幹氏、前校長清澤満氏、令和 5(2023)年 4 月以降の現校長軽部晴文氏のご理解、ご協力を得ている。深く感謝申し上げます。

Hokkaido Home School Matron Setsuko Fujita's practice of 'being at home' and its significance in political education: In relation to Kosuke Tomeoka's conception of 'family life'

Kunio Kawahara

Key Words: caring, family life, family dormitory, role-sharing concept, political education, related structure of 'care, education, and politics'

This paper describes how Setsuko Fujita (1938–2020), the matron of the Sekijo Family dormitory of Hokkaido Home School, using the diary of her husband and housemaster, Shunji Fujita (1932–2014). Relatedly, this paper then examines the conception of 'family life' articulated by the school's founder, Kosuke Tomeoka (1864–1934), and attempts to elucidate its significance. The paper reaches the following conclusions:

1) The relationship between matron and boarders in the family house, mainly in the kitchen, was revealed *inter alia* through cooking, shopping, listening to personal confidences, intercession, and nursing. The matrons treated students who were ill, wounded, or discouraged, and actively guided them in realising their values. As they shared the lives of their boarders, the matron became involved in the human development, care, treatment, and protection of individual boarders. In this positive conception of human development, the concept of 'therapeutic nurture' has had limited power to explain the matrons' treatment of the boarders, leaving some aspects unexplained.

2) To investigate why the matron became involved in the personal development of each student, this paper elucidates not only the matron's own involvement but also Shunji Fujita's expectations of graduating students in terms of the matron's practice of 'being at home'. It then evokes Kosuke Tomeoka's conception of the 'family life' to explain how matrons guided the human development of their students. Therefore, this paper traces the housemaster's ideas on basic human development via a role-sharing concept practised in a family dormitory that identifies the 'strengths' of each dorm resident, who will be able to practise an interdependent 'communal life' through work in the future. The idea of political education based on the principle of 'democracy' was premised on the inclusion of each individual and the participation of all.

If we consider the characterisation of education in 1) and 2) above as 'inclusive' political education, one which includes opportunities for care and aims to identify the strengths of each individual student and develop human resources, then Setsuko Fujita's treatment of the students can be contrasted with the findings of the current 'caring democracy' (Toronto). In other words, the uniqueness of the practice of Setsuko Fujita, the matron of the home school, consisted in its inclusion of the opportunity for education (political education) related to the formation of the subjects who constitute society based on the idea of democracy while revealing the related structure of 'care, education, and politics'. The structure of the current Hokkaido Home School, that is, the establishment of a branch school within the school to supplement the existing education while maintaining the small family system, on the one hand, and the establishment of a 'clinic', on the

other hand, is the institutional embodiment of structural relationship between these three factors.